

第2章 学徒勤労働員の開始

第1節 4ヵ月動員と通年動員

学徒勤労働員

1943(昭和18)年6月25日に閣議決定された「学徒戦時動員体制確立要綱」(福間『前掲書』学徒勤労働員の開始本文P.59)において、

二、勤労働員の強化

の項を設け、初めて「勤労働員」という用語を用いた。この決定を43年7月6日発総151号「学徒戦時動員体制確立要綱実施二関スル件」(福間『前掲書』資121)として文部次官より各地方長官宛に通牒した。この通牒には、「学徒動員ハ飽ク迄教育錬成内容ノ一環トシテ実施スルモノナレバ、単ナル勞力提供ニ終ルガ如キコトナキ様特ニ指導スルコト」とし、学校教育への一定の配慮を示した。同年10月12日に閣議決定された「教育二関スル戦時非常措置方策」(福間『前掲書』本文P.239)においてさらに具体的に「教育実践ノ一環トシテ学徒ノ戦時勤労働員ヲ高度ニ強化シ在学期間中一年ニ付概ネ三分ノ一相当期間ニ於テ之ヲ実施ス」と明示した。いわゆる4ヵ月動員である。

ところが、学徒動員等の強化に伴う体育訓練(43年9月23日発体59号)と科学技術の動員は閣議決定により(43年10月1日)、防空補助員動員(43年10月18日発体232号)は体育局長より、農業土木学徒動員は農政局長より(43年10月21日発体243号)というように、動員需要とその対策が、所管ごとにバラバラであった。そこで、43年12月7日の閣議決定で、「国民動員機構二関スル件」によって機構の整備を図った。これを踏まえて、44年(昭和19)年1月18日の「緊急国民勤労働員方策要綱」および「緊急学徒勤労働員方策要綱」の閣議決定をみた(福間『前掲書』本文P.64—70、荒川信吉『女子学徒動員』綴り込み配布資料)。

前者は、国民勤労働力の発揚を目的とし、①国民勤労働配置の適正化 ②国民勤労働能率の飛躍的向上 ③軍動員との緊密な連携の保持 ④国家の動員所要数の充足などのため総合的計画的国民勤労働員を強力に実施し、44年度国民動員計画の策定の為の方策を講じるとしている。その内容の要点は、

1. 国民登録制度の確立……………一元的国民登録制度の確立
2. 国民徴用運営の改善……………実施範囲の拡大
3. 学校在学者の勤労働員
4. 女子の勤労働員……………女子使用範囲の拡大、在家庭女子の勤労働力の活用
5. 勤労働給源の確保……………各種学校在学者の積極的動員、男子の就業制限範囲の拡充
6. 勤労働配置の適正……………都道府県別需給計画の設定、地方行政協議会長が都道府県間の調整に当る
7. 勤労働能率の増進
8. 行政の刷新……………動員行政機構の刷新
9. 国民運動の展開……………運動主体は大政翼賛会

などについて方針を示している。

また後者は、①「学徒戦時動員体制確立要綱」・「教育二関スル戦時非常措置方策」の趣旨の徹底 ②勤労働即教育の徹底 ③総合的計画的な学徒勤労働員の強力な実施 ④戦力増強への挺身 ⑤学徒の教育錬成の完遂などの方針を示し、次の諸点を明示した。

1. 特定部署の通年恒常循環的な学徒の動員の樹立
2. 学校を基本に学校教職員を中心として組織する
3. 同一学年の動員期間は、1年につき概ね4ヵ月を基準とする
4. 工場事業場を学校の校地・校舎に設備し、学徒を生産に従事させる
5. ①文部省または地方長官の推薦により、教職員または関係官吏を軍需管理官または労務管理官とする

②関係恒常事業場に、文部省または地方長官が嘱託する学徒専門の勤労係員を設置すること

6. 国家総動員法に基づく法的措置

7. 学徒勤労管理関係者の講習・学徒に対する短期技術教育訓練の実施

8. 学徒勤労に対する報酬方法(別途)

これには、勤労即教育として勤労以外の教育の停止が伏線として示され、4カ月動員が明示された。しかし学校史・記念誌の多くに書かれているようにこれによって学徒勤労動員が開始されたのではなかった。これに続いて「緊急学徒勤労動員方策要綱実施二関スル件」が発体36号として、44年2月19日に文部次官から地方長官・学校長に通牒され(福間『前掲書』資料171)、「決戦非常措置要綱」が44年2月25日の閣議において決定した(『福間『前掲書』175、新聞紙上には、3月8日情報局発表)。

前者は、主文で、地方の実情に即応し、①食糧増産 ②航空兵器の増産 ③その他聖戦完遂上特に緊急なる業務に積極強力で挺身奉公せしめることとし、要領におよそ次のようなことを掲げている。

1. 農業関係学校は、農林、水産業の増産に重点を置き、成るべく必要に応じ長期間出動すること。

2. 工業関係学校は、航空兵器の生産、その他工場・事業場の作業に重点を置き、継続4カ月出動すること。

3. 法文系大学・高等専門学校、大学予科、高等師範学校、女子高等師範学校、師範学校、青年学校教員養成所、中学校、商業学校、高等女学校等は、その土地の状況等に応じ、航空兵器生産等戦争遂行上特に緊要なる工場・事業場に対して継続4カ月その他緊要なる国策的業務に対して成るべく継続して長期間出動すること。

4. 工業学校に転換したる学校は、当該学校の実習工場として特定したる工場に対して動員するよう措置すること。

5. 出動学校とこれを請たる工場・事業場、農村等は、成るべく同一学校を同一場所に出動せしむること。

6. 理、工、農、医等関係の学校は、専門学科の技能を活用し動員すること。

7. 可能なる限り多数の教職員を派遣し、出動学徒の指導監督を強化すること。

8. 状況によっては学校内において生産に従事させるよう勘案すること。

9. 学徒勤労動員の法的措置については、差当り成るべく国民勤労報国協力令によるものとし、協力令によらざるものは、臨時の通牒に指示するものを主とすること。

10. 中等学校第1学年、第2学年ならびにこれと同等程度の生徒の勤労動員については、差当り43年12月20日発国569号文部次官通牒の趣旨によること。

11. 教職員等の軍需監理官、労務官への任命、勤労動員関係者の技能の認定、学徒の報償方法等については、別途指示する。

また後者は、主文で、国民即戦士の覚悟を強調し、緊要施策の急速徹底を図るとし、つぎの諸点を掲げている。

1. 学徒動員体制の徹底

(1) 原則として中等学校程度以上の学生生徒は総て今後1年、常時、勤労その他の非常任務に出動させることが出来る態勢に置き、随時活発なる動員を実施する。

(2) 理科系のものは、専門に応じ、軍関係工場・病院等の職場に配置し勤労に従事させる。

(3) 学校校舎は、必要に応じ、軍需工場、軍用・非常倉庫用・非常病院用・非難住宅用その他緊要の用途に転用する。

2. 国民勤労体制の刷新

学徒、女子および応徴者等の受入体制の刷新強化、女子挺身隊強制加入、官庁側の指導・斡旋・保護の充実、軍動員との関係の緊密化を図る。

3—15(省略)

上記中前者の10にいう43年12月20日発国569号文部次官通牒については福間『前掲書』にも収載されず内容が明らかでない。こうして前者に掲げるように、継続4カ月動員、航空兵器生産への動員、学校工場化等が指

示されたが、この段階では、法的な措置、監理官の任命、学徒の報償等についてはいまだ決定していなかった。後者において注目すべきことは、中等学校程度以上の学徒の1年間の動員待機を掲げていることである。通年動員と明記してはいないものの前者から1週間も経ないに拘らず、通年動員をほのめかしていることである。また、学校校舎の工場転用も掲げている。

この「決戦非常措置要綱」を受けて、44年3月7日の閣議において「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒勤労動員実施要綱」が決定された。主文は、44年2月25日の「決戦非常措置要綱」の1年間の動員待機を復誦し、およそ次のような指示を与えている。

1. 国民学校高等科児童の動員は、土地の情況、心身の発達を考慮し適当なる作業種目を選定実施すること。
2. 中等学校
 - (1) 工業学校生徒は、軍関係その他重要工場・事業場に動員する。
 - (2) 商業学校から転換した工業学校の生徒は当該工場に動員する。
 - (3) 農業学校生徒は、食糧増産、国防建設事業等に重点的に動員する。
 - (4) 中学校、商業学校および高等女学校生徒は、土地の情況、勤労需給の情況を勘案して食糧増産、国防建設事業または工場・事業場、輸送等の作業に動員する。女子の動員については、学校設備の工場化による勤労を、また大都市の生徒は、疎開および防空施設事業にも動員する。
 - (5) 第1、2学年生徒の動員は、国民学校高等科児童に準ずること。
3. 大学・高等専門学校(省略)
4. その他
 - (1) 学校を基本とする隊組織とする。
 - (2) 学校報国隊の整備強化を図る。
 - (3) 学校校舎の軍需工場化を図る。
 - (4) すみやかな法令上の措置を講じる。
 - (5) 当該作業場の勤労者に準じ食糧・その他の物資の配給を行なう。

次いで地方長官・学校長あて文部次官通牒「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒動員実施要綱ニ依ル学校種別学徒動員基準ニ関スル件」(44年3月31日発体68号、福間『前掲書』資料191、荒川信吉『女子学徒動員』綴り込み配布資料)によってより一層具体的に示された。その要点は、

第一 大学・高等専門学校

甲 理科系学生生徒

一、工鉦関係(理学部物理、化学、地質、鉦物、数学等ノ学科ヲ含ム)

1. 動員方針及動員期間

- イ. 第三学年ハ其ノ専攻学科ニ応ジ分散配置スルヲ原則トシ通年動員スルコト
- ロ. 第二学年ハ其ノ専攻学科ニ応ジ地域的集団配置ヲ原則トシテ通年動員スルコト
- ハ. 第一学年ハ臨時緊急ナルモノニ動員スルコト

2. 出勤先(省略)

3. 割当配置

学徒勤労ニ対スル受入側ノ需要数ハ厚生省ニ於テ之ヲ取纏メ関係者ト協議ノ上需要割当ヲ決定シ之ニ対スル学徒ノ出勤配置ニ関スル措置ハ文部省之ヲ行フコトトシ要スレバ関係者ト協議スルコト

二、医学及歯科医学関係(省略) 三、薬学関係(省略) 四、農学関係(省略)

五、其ノ他ノ理科関係(省略)

乙 文科系学生生徒

1. 動員方針及動員期間

- イ. ^{ツト}カメテ特能ヲ發揮シ得ル如ク措置スルコト
- ロ. 食糧増産、国防施設事業、運輸及防空施設事業等ニ対スル動員ハ必要ニ応ジ適宜動員スルコト

ハ、工場、事業場ニ対スル動員ハ通年動員トシ高学年ヨリ順次之ヲ行ヒ（以下省略）

2. 出勤先(省略) 3. 割当配置(省略)

丙 教員養成所学校

大学専門学校ニ準ジテ取扱フコト

丁 高等学校

大学専門学校文科系ニ準ジテ取扱フコト

第二 中等学校

一、工業学校

1. 動員方針及動員期間

イ、其ノ専攻学科ニ応ジ地域の集団配置ヲ原則トスルコト

ロ、国民学校初等科修了程度ヲ以テ入学資格トスルモノノ第五、四、三学年、校区民学校高等科修了程度ヲ以テ入学資格トスルモノノ第三、第二学年ヲ主トシテ原則トシテ通年動員スルコト

ハ、(省略)

ニ、(前略)必要アル場合ハ学校ヲ工場化シ之ニ動員スルコト

2. 出勤先(省略)

3. 割当配置

厚生省ニ於テ取纏メタル需要数ニ基キ関係省ト協議ノ上、産業別及府県別需要割当ヲ決定シ、之ニ対スル学徒ノ出勤配置ニ関スル措置ハ文部省ニ於テ決定ノ上、地方庁ニ移牒スルコト。但シ地方庁ニ於テ変更ノ余地ヲ残スコト

二、農業学校

大学専門学校ノ(中略)農学関係ニ概ネ準ズルモ、割当配置ハ地方庁ニ於テ行フヲ原則トシ必要ニ応ジ文部省又ハ地方行政協議会ニ於テ調整スルコト

三、中学校

1. 動員方針及動員期間

イ、工場、事業場ニ対スル動員ハ通年動員トシ高学年ヨリ順次之ヲ行ヒ（以下省略）

ロ、国民学校修了程度ヲ以テ入学資格トスル中学校第一学年及第二学年ノ生徒ハ土地ノ状況並ニ心身発達ヲ考慮シ適当ナル作業ヲ選ビ出勤セシムルコト

2. 出勤先(省略)

3. 割当配置

学徒ノ出勤配置ニ関係スル措置ハ地方庁ニ於テ行フヲ原則トシ、必要ニ応ジ文部省又ハ地方行政協議会ニ於テ調整スルコト

四、商業学校

1. 動員方針及動員期間、出勤先

概ネ工業学校ニ準ジテ取扱フヲ原則トシ土地ノ状況ニ準ジ食糧増産、国防及防空施設事業等ニモ動員スルコト

2. 割当配置

概ネ農業学校ニ準ジテ取扱フコト

第三 女子ノ学校

1. 動員方針及動員期間、出勤先

イ、可及的学校設備ヲ工場化シ其ノ学校ノ生徒ヲ之ニ動員スルコト

ロ、工場、事業場ニ対スル動員ハ前項ニ依ル動員ノ依ル余力ニ付通年動員トシ高学年ヨリ順次之ヲ行フ（以下省略）

ハ、出勤ハ通勤ヲ立前トスルモ宿舍ノ完備スル場合ニ限り教職員付添ヒノ上、宿泊勤務セシムルコトヲ

得ルコト

二、国民学校初等科修了程度ヲ以テ入学資格トスル高等女学校ノ第二学年及第一学年ハ中学校第二学年第一学年ニ準ジテ取扱フコト

ホ、（省略）

2. 割当配置

専門学校程度ノモノノ割当配置ハ文部省ニ於テ、其ノ他ノモノノ割当配置ハ地方庁ニ於テ行フ原則トシ必要ニ応ジ文部省又ハ地方行政協議会ニ於テ調整スルコト

第四 青年学校（省略） 第五 各種学校（省略）

第六 国民学校高等科

1. 土地ノ状況並ニ心身ノ発達ヲ考慮シ適当ナル作業ヲ選ビ動員スルコト

2. 学徒ノ配置ハ地方庁ニ於テ行フコト

備考 （省略）

これを整理すると、① 需要調整は厚生省、割当配置は、大学・高等専門学校・高等学校・教員養成所学校等については文部省、中等学校・女子の学校・国民学校高等科については地方庁（都道府県庁）が行う。② 中等学校の中、工業学校・商業学校・中学校・女子の学校等の工場・事業場への動員は通年動員とする。③ 女子の学校等は学校工場化により学校工場へ動員する。④ 工業学校は、学科・設備・土地の状況に応じて学校工場化により動員する。⑤ 中学校・高等女学校の第一・第二学年、国民学校高等科は土地の状況・心身の発達を考慮して配置する。⑥ 女子の学校は通勤を建前とするが、宿舎完備を条件に宿泊勤務も行なう、というものであった。

以上の経過から現実には、4カ月動員は実施されずいきなり通年動員が実施されることになったと考えられる。

これについての県内各学校の4～5月の動員状況を表示すると、つぎのようであった。

動 員 月	動 員 先	動 員 学 校
4. ?	片倉製糸郡山工場	郡山高等女学校
5. 1	保土ヶ谷化学郡山工場	郡山商業学校

※ 1. 郡山高等女学校については、『紫匂ふ』収録卒業生の証言による。

2. 郡山商業学校については、郡山商業学校『創立60周年記念誌』ならびに荒川信吉『女子学徒動員』中、5月10日付「朝日新聞」（福島版）切抜きによる。

これらの事例中郡山高等女学校のみが、県内中等学校および他の高等科に先んじて出動したかを考えてみると、いささか疑問を抱く。この事例は学校等の文書・記録によったものでなく卒業生の回想によったものであった。また、先に紹介した44年3月31日の文部次官通牒によれば、割当配置は地方庁が行なうことになっていたのであるから、一部の学校のみ優先配置ということは考えられない。郡山商業学校学徒隊の保土ヶ谷化学郡山工場動員については、これも郡山高等女学校と同様、単独出動は疑問なのだが、同年5月10日付「朝日新聞」（福島版）に「中等学徒に動員令、郡山商業が先駆」という見出しで、

「去る五日学徒動員の指針ともいふべき「学徒勤労働員実施要領」が発表されたが本県ではすでに通年動員の先陣を切って去る一日郡山商業生五十名が保土ヶ谷化学〇〇工場へ出陣愛国の熱意をハンマーにこめて行学一体の挺身をつづけてゐる時本月末までにこの後続部隊ともいふべき男女中等学校生徒に大規模な動員令が下されることになった。（以下省略）」

※ 荒川信吉『女子学徒動員』5月1日付県教学課伊藤雅教あて書簡によれば、5月5日に内政部長、市内各中学校長臨席のもと入場式が挙行された。

と書かれていて、一概に否定しきれない。なお保土ヶ谷化学郡山工場への他校の動員状況を表示すれば、次の通りであった。

動 員 月 日	動 員 学 校	学 年	動員数	特 記 事 項
10. 20 ?	安積中学校	5 年	2名	明らかでないが、横浜出動が10. 20. となっている。
10. 20	同	3 年	50名	
10. 21	安積高等女学校	3 年	153名	
10. 22	白河高等女学校	3 年	不 明	
10月か11月？	日和田国民学校高等科	2 年	約50名	
不 明	桃見台国民学校高等科	1 年	不 明	
不 明	米沢工業専門学校	不明	30名	

※各校学校史・記念誌、『山形大学工学部六五年誌』『郡山戦災史』『ターゲット2025』などより。

第2節 動員の割当・配置はどのようにして行なわれたか

割当・配置の組織・態勢

こうして学徒動員が開始され、7月以降本格化するのだが、地方庁において行なわれる割当・配置は実際にはどのようにして進められたのであろうか、追求してみよう。

まず文部省の組織・態勢からみる。1944(昭和19)年4月17日文部省訓令第11号「決戦非常措置要綱に基く学徒動員実施方」(福間『前掲書』本文P.75)を発し、同日、省内に動員本部を設置した。訓令では、

今や中等学校程度以上ノ学徒ハ挙テ常時勤勞其ノ他ノ非常任務ニ服スヘキ組織的態勢ノ下、適時出動ノ機ヲ迎フ事(中略)将来国家須要ノ人材タルヘキ学徒ヲシテ勤勞其ノ他非常任務ニ従ハシム。蓋シ我ガ教育史上空前ノコトト謂フヘシ

と述べ、動員本部を次のような組織とした。

- 総務部 学徒動員の総合企画および連絡調整を掌る。
- 第1部 大学高等専門学校学徒の事務を掌る。専門教育局内各学校担当者が兼務。
- 第2部 中等学校、青年学校、国民学校、教員養成諸学校(高等師範学校、師範学校、青年師範学校)の学徒の事務を掌る。国民教育局内各学校担当者が兼務。
- 第3部 防空防衛等の動員、学徒の援護、保健、指導者の訓練等の事務を掌る。

都道府県の教育行政は、1926(大正15)年に設置された学務部が、42(昭和17)年に内政部に統合され、文部省の意図に反して内政部長やその下の学務課長(のち教学課と改称)は、内務省の通常人事による国の官吏となった。28年に設置された地方視学官は、官公私立の諸学校長・教員から任命された(百瀬 孝『事典昭和戦前期の日本』)。従って地方庁における学徒勤労働員事務は、内政部教学課が担当した。

動員計画の作成

これによって福島経済専門学校は、学徒動員本部第1部所管となり、師範学校、附属国民学校、青年師範学校等は、同本部第2部の所管となった。中には、府県からの出動要請を受けて出動させた事例もある。そうした場合には、出動先、出動日、作業内容、出動数、勤務実態、食事給与、教育訓練の方針・実施方法等を記載した原議書を持って発議している。また、県立・市立および私立の中等学校等は、福島県内政部教務課の担当となった。

ところで、福島県内政部教学課の学徒勤労働員関係文書は、いまだに公開されていない。しかし44年4月26日に学徒動員本部第一部長・専門教育局長から学校長へ発せられた通牒「昭和19年度一・四半期大学・専門学校等学徒動員割当二関スル件」(動専17号、福間『前掲書』資料204、204の2)には、

今般需要割当ノ決定ヲ見タルニ付、各般ノ事情ヲ考慮シ別紙ノ通出勤配属ヲ決定シタルヲ以テ、左記事項御参照ノ上至急当該受入側ト連絡シ出来得ル限り速ニ出勤相成様御取計相成度、尚出勤令書ハ後日受入側ヨリノ申請ニ基キ交付相成ベキニ付

受入側トノ協議整ヒタルトキハ至急別紙「動員実施調書」並ニ「動員除外調書」ヲ提出スルコト

学校側トノ協議整ヒタルトキハ至急別紙「学徒勤労働員割当工場・事業場調査表」ヲ提出願度コト
などとあって、決定通知書、動員実施調書、出勤令書などが交付、あるいは提出されていた。実際、文部省(国立公文書館収蔵文書)に「動員セラルベキ学徒数」「動員需給計画表」「学徒出勤工場・事業場調」などの記録が遺存している。この通牒(4月26日動専17号)とほとんど同文の通牒が地方長官へも出された。次いで福島県知事宛44年4月27日付官総発6号文部次官・厚生次官・軍需次官通牒「学徒勤労働員実施要綱ニ関スル件」(荒川信吉『女子学徒動員』綴り込み配布資料、福岡『前掲書』資料206)が出された。これらから、福島県にも同様の文書類があるだろうことは容易に推定できる。これらに関する調査は今後の課題でもある。

動員先の内定から決定まで

上記のことから、県内の中等学校等の動員割当・配置は、県内政部教学課と各学校長と受入工場・事業場との間で進められた。この過程を、県立安積高等女学校長荒川信吉『女子学徒動員』によって見ることにする。

福島県知事あてにて44年5月3日動総11号文部省総務局長・厚生省勤勞局長・軍需省総動員局長通牒「工場・事業場等学徒勤労働員受入側措置要綱ニ関スル件」(荒川『前掲綴』配布資料、福岡『前掲書』資料211)が出された。その要点は、

- 1. 学校修練隊による協力申請は当分の間国民勤勞報国協力令により、大学・高等専門学校・師範学校の修練隊の出勤は文部大臣・厚生大臣において行い、中等学校以下の出勤については地方長官において行うこと。
- 2. 学校修練隊の割当・配置については、学校側の希望を斟酌すること。
- 3. 動員決定後直ちに学校当局と事前連絡を行なうこと。事前連絡事項は、① 作業内容 ② 勤務時間・食事給与その他勤勞条件 ③ 宿舍の状況・保健施設特に医療設備 ④ その他必要事項
- 4. 予備訓練の実施
- 5. 受入選任担当者、作業指導者等の選任
- 6. 分散配置された者は職員に準じて処遇すること。
- 7. 長期動員の学徒は、健康保険の被保険者とし、保険料は受入側で支払うこと。
- 8. 勤務時間中に軍事教育等のため原則として週6時間を設定すること。
- 9. 勤務時間は10時間以内を原則とし、残業を含めて12時間を超えないこと。交替制における深夜就業(午後10時から午前5時まで)および残業は男子のみとする。
- 10. 宿舍は受入側にて準備し、女子隊員には女子専用宿舍を当てること。
- 11. 作業用品類は現物支給または貸与とし一般従業員と同様にすること。
- 12. 報償は、明細書を付し一括学校修練隊に納付すること。また基本報償と特別報償の2種とすること。
- 13. 通勤交通費は受入側にて負担すること。
- 14. 隊員の父母の死亡、隊員の死亡・危篤の際は旅費を支給すること。
- 15. 弔慰金および基本報償算定基準

弔慰金 業務上の死亡：500円、業務外の死亡：300円

基本報償算定基準

性 別	学 校 別	1人当り月額(円)
男子	大 学	70
	専門学校・高等学校・高等師範学校・青年師範学校・大学予科・師範学校(本科)	60
	中等学校第3学年以上・師範学校(予科)	50

性 別	学 校 別	1 人当り 月額(円)
女子	専門学校・師範学校(本科)・青年師範学校・師範学校(予科)	50
	中等学校	40

※同年5月11日(荒川『前掲綴』配付資料では12日)動総17号「工場・事業場等学徒勤労働員学校側措置要綱二関スル件」の、別表「動員学徒二対スル支給金額基準」では、

大学・高等専門学校	月額30円(舍費を含む)
中等学校	月額25円(同上)

これをうけて、44年5月6日、宮城県で開催された東北六県労政課長会議において第一・四半期(4月以降6月まで)動員実施事項によって労務要員の大半は学徒動員により充足することにし、各県別の動員割当を決定し、同月10日の六県教学課長会議において学校別動員割当を決定する見通しであった(荒川『前掲書』中、5月10日付朝日新聞)。しかし県労政課が県内の工場・事業場等を召集し実施要領・受入側措置要綱を示し、受入側の希望数調査を開始したのは5月12日で、5月13日付「福島民報」では、「近日中県教学課で学校別配置が決定され遅くも今月末までには出勤を完了するに至った」と報じた。割当・配置の作業は、遅れ気味であった。

1. 前々より日東工礦業株式会社郡山第三工場長と内談する。
2. 5月5日 郡山商業学校学徒の保土ヶ谷化学工業郡山工場入場式の際に、県内政部長に学校長の意図を上申する。
3. 5月9日 出県し、学徒動員につき説明を受け、同日他用にて内政部長に面談の折、学徒動員につき内談する。
4. 5月10日 高学年生徒勤労働員計画私案を作成する。
5. 5月11日 私案を県教学課伊藤雅教へ上申する。

(内談・上申の内容不明、私案＝手書き写し[学校専用B4罫線紙3枚半]省略)

6. 6月23日付19教「学徒勤労働員出勤先割当二関スル件」が県内政部長から関係男女中等学校長宛に照会された(安積高等女学校6月24日受付)。

文書の宛先から県下一斉に発信されたと思われる。このことから全県下の学校について6月20日前後に、動員先の割当内定が集約されたことが分る。安積高等女学校長宛の文書は、次の通りであった。

標記ノ件、左記ノ通り出勤先割当内定、近日出勤ノ運ビト相成候ニツイテハ受入工場・事業場側ニ出向ノ上、現地作業場(宿泊スル場合ハ宿舍)ノ設備状況等視察相成、出勤二関スル具体的打合ヲ遂ゲラルヘト共ニ、出勤学徒ノ生活変動ニ対処スベク父兄会ヲ開催シ学徒動員ノ趣旨ヲ充分理解徹底セシメ、以テ出勤二関スル万般ノ準備ヲ遺憾ナキヲ期セラレ度。

追テ視察打合セタル結果ニ依リ出勤可否二関スル貴職ノ意見、本月末日当庁必着ヲ期シ後回報相成度。

記

配属先工場	科 名	人員	宿泊通勤ノ別
日東工礦業郡山(第一)工場	—	50名	通 勤
同 郡山第二工場	—	100名	同
同 郡山第三工場	—	100名	同
備考 成ルベク高学年生徒ヨリ出勤セシムルモノトス			

これに対して安積高等女学校は、次のような措置を講じた。

7. 生徒出勤工場実地視察並意見交換

6月26日午後1時 — 午後3時、 日東工礦業郡山工場
同 午後3時 — 午後5時、 日東工礦業郡山第二工場
6月27日午前9時半 — 同11時半、 日東工礦業郡山第三工場
6月28日・7月3日、3工場責任者来校打合ヲナス

一、作業ノ種類

1. 種類 生徒ニ適スルカ否カ
郡山工場—前紡及精紡作業／郡山第二工場—織布作業／第三工場—保温紐加工作業
何レモ女生徒ニ適ス
2. 作業場ニ配置スル生徒数
何レモ一ヶ所又ハ二ヶ所ニマトメテ生徒ヲ配置スル予定
3. 生徒交代制ニ対スル工場側ノ意向
能率ノ上ヨリシテ交代ヲ好マザル向

二、勤労時間 市外特ニ汽車通勤者相当数ニ及ブ関係上、原則10時間勤務ハ困難カ

学 級	在 籍	休 学	常時出席	通 学 地 域		市外生徒細別		通勤上 支障ナ キモノ	通勤上 支障アル モノ
				市 内	市 外	汽 車	徒 歩		
一組	55	1	54	25	29	26	3	18	11
二組	55	1	54	39	15	13	2	12	3
三組	54	—	54	34	20	15	5	13	7
四組	54	—	54	30	24	21	3	18	6
五組	54	—	54	38	16	13	3	11	5
計	272	2	270	166	104	88	16	72	32

1. 午前8時—午後3時、7時間勤務トシテ工場側ハ承諾スルカ
生徒日々ノ通学時間ニツキ別段何レノ方向ニモ支障ナシ
2. 午前8時—午後5時、9時間勤務ヲ確保セントスルカ
3. 10時間勤務ヲ絶対的必要トスルカ(午前7時—午後5時)
4. 前2、3ニアリテハ左ノ特例ヲ認ムルカ
 - (1) 汽車通勤生徒ハ朝ハ午前8時タルコト
 - (2) 同生徒中駅ヨリ遠距離ノ者ハ更ニ午後3時切上ゲノコト
 - (3) 希望者ニハ入寮ノ便ヲ図ルコト
 - (4) 随時入寮ヲ認ムルカ寮舎設備ハ郡山工場、同第三工場共ニ優良ナリ、郡山第二工場ハマリヤ寮ヲ借受テ之レヲ寮舎ニ当ツル見込(現在寮舎ハ満員状況)

三、授業関係

1. 1週間ノ授業ヲマトメテ行フタメ毎週水木曜日中1日ヲ作業休止、出校セシムルコトヲ認ムルカ
2. 前ノ号ニ加フルニ更ニ月4回ノ日曜日ニ対シ2回ハ一般従業員ト同ジク公休トシ残りノ2回ヲ出校セシムルコトヲ認ムルカ
3. 水木ノ日ヲ除キ其ノ他ノ曜日ニツキ一生徒ニツキ1日、工場中食炊事ノ実務ニ当テシメ、割烹実習時トナシ度シ、2時間トスルコトハ如何

四、身体検査

1. 出勤日決定後準備行為ノ一ツトシテ日東病院に於テ行フコト
2. 弱体生徒ニ適當ナル勤勞作業アリヤ。学校トシテ出勤シ得ザル生徒ノ取扱方

- (1) 軽作業ヲ課ス・・・毎日仕事ガアルカ
- (2) 学校挺身隊ヲ組織シ教務事務方面、教科方面、看護方面等二分担配属セシムルハ如何

五、報 償

- 1. 9時間勤務ヲ原則トシタル時正規ノ金額ヲ払ハレ度シ
- 2. 特殊取扱生徒ハ如何
- 3. 公休外ノ出校日曜、日曜外ノ出校日ハ完全勤労日ト見做(みな)サレタシ
- 4. 派遣教職員ニ対シ報償ヲ考慮サレ度シ
 - (1) 工場囑託ノ形式ヲトルモ一方法カ
 - (2) 寮舎関係者ノ一人トセラルルモカ
 - (3) 青年学校ノ講師トナシ名目上又ハ一^{フ×イ}□一、二時当ラシムルモ可
 - (4) 金額ハ別ノ機会ニ打合スコト

六、派遣教職員

- 1. 50名ニ1名、100名ニ2名ヲ付添ハシム
- 2. 朝及夕刻、中食時ニハ必ラズ執務スルモ其ノ^{フ×イ}□□ニハ出校セシムルコトアルベキモ支障ナキカ
- 3. 執務ノタメ机、椅子及鍵ノアル箱又ハ抽出アルモノヲ用意セラレ度シ

汽車通学生徒状況調及寄宿舎生徒組別調(組別は省略)

駅 名	計	駅 名	計	駅 名	計	駅 名	計
本線南部	19	本宮	10	磐越東線	37	神俣	1
安積永盛	3	二本松	4	舞木	4	小野新町	5
須賀川	14	磐越西線	10	三春	19	石川線	3
鏡石	2	喜久田	4	船引	6	守山	3
本線北部	17	熱海	4	磐城常葉	1	合 計	86
日和田	3	川桁	2	大越	1	寄 宿 舎	16

8. 7月3日 学校側「第四学年生徒工場勤労働員下令実施要綱」、受入側(各工場別)「勤労働員学徒勤務要項」が決定した。その主要点を示せば、次の通りであった。

(1) 出勤先と出勤人員

日東工礦業郡山工場：約 50名―5組
 同 郡山第二工場：約100名―3、4組
 同 郡山第三工場： 106名―1、2組

(2) 身体検査

出勤に先立ち工場側と協議し嚴重な身体検査を行ない、検査の結果、三種に分ける。
 甲(健康者)、乙(弱体者)、丙(虚弱者)
 虚弱者は工場勤務が出来ない者で、学校において別途取扱う。

(3) 勤務時間

原則として午前7時から午後5時までの10時間勤務。汽車通学生徒は午前8時出場の9時間勤務。
 特殊汽車通学生徒は午前8時より午後3時までとし、報償額を減額する。深夜業や残業は課さない。

(4) 授 業

毎週水又は木曜日は終日学校において授業を行なう。水曜は1、4組出校、木曜は2、3、5組出校／授業は午前8時から午後4時5分までとし、必要に応じて増減する。(郡山工場においては、磐城高女が火曜日、安積高女が水曜日)／1ないし2組単位で8週(8日)の間、出校日に郡山幼稚園、郡山婦人会保育所において保育実習を課す／出校日以外の曜日に1生徒毎週1回、工場の中食又は夕食炊事の実務につき2時間の割烹実習を課す(郡山工場では、磐城高女と安積高女は班別・曜日制によ

り昼食と夕食を交互に行なう)

(5) 教 科 目

- ① 基本教科＝家政科(保健 1 時、育児 1 時)、救護実習 1 時
- ② 増加教科＝国民科(修身 1 時、国語 1 時)、理数科(数学 1 時)
- ③ 保育実習＝すでに課しているので、基本教科の育児 1 時を振替え、保育実習を省く。
- ④ 工場において毎週 2 時、工場共同炊事に従事するので、保健授業 1 時に読み替える。
- ⑤ 工場の作業関係から定日外出校の際は、家政科(被服)・芸能科(音楽)等に当てる。

(6) 授業時数(省略)

(7) 派遣教員 1 組 1 名の割合で派遣

- ① 郡山工場 1 名(安部井教諭)、郡山第二工場 2 名(五十嵐・岡教諭)、郡山第三工場 2 名(内海・須藤教諭)
- ② 勤務時間：午前 6 時 45 分より午後 5 時 30 分まで。宿直は別に定める。
- ③ 職務：勤労生徒の訓育・身上関係等精神的方面一切の責に任じる。
- ④ 出校：午前 8 時 20 分より 11 時 30 分、午後 0 時 50 分より 3 時 10 まで適宜出校し、他学級の授業を行なう。
- ⑤ 書類の調製・処理・保管の責に任ず(書類名省略)。生徒勤労日誌は毎日教務主任を経て学校長に提出。

(8) 寮舎および宿直

通勤困難な生徒の入寮／入寮者の携帯品＝移動証明書、衣料切符、印鑑等(たは省略)／入寮者 7 名未満の場合は、工場側寮監に寮生活の指導監督を依頼／入寮者 7 名—19 名の場合は、派遣所教師は 1 週 2 回以上宿泊し、入寮生徒の保護監督に当る／入寮者 20 名以上の場合は、常宿直を置き原則として派遣女教員を当らせる／交代宿直の勤務は、午後 6 時より翌朝 7 時までとする。

(9) 学校と工場との連繫

学校長(修練隊長)は、絶えず生徒勤務工場に出向き、工場長及び関係工場職員と協議し、教員の報告を受け書類を検閲し出勤生徒の勤務状況を視察し督励に勤める／必要に応じて学校側及び工場側の責任者連絡懇談会を開く／時々工場において方部保護者懇談会を開き、認識を深め不安を一掃し激励の機会を多くする

(10) 作業指導

作業の指導は工場側において行なう／工場側には、学徒動員受入専任担当者(工場労務主任)、作業指導者、同補助者等の係員が勤労方面の責に任じる

工 場	工 場 側 指 導 監 督 者
郡山工場	工場教育訓練担当者(工場長・坂井・村井)
郡山第 2 工場	専任担当(柳沼)、作業指導(準備織機・硝織の 2 名)、作業指導補助(準備・織機・硝織の 4 名)、生活指導(訓育・炊事の 3 名)
郡山第 3 工場	専任担当(労務係)、作業指導(工務係)、作業指導補助(12 名)、生活指導(練成係・炊事の 2 名)

(11) 隊員の身分・取扱い

工 場	身 分・取 扱 い
郡山工場	記載なし
郡山第二工場	一般工員と同様健康保険の被保険者とし保険料は工場負担とする。
郡山第三工場	一般工員と同様健康保険の被保険者とし保険料は工場負担とする。

(12) 報 償

出勤勤務生徒は、至誠尽忠国家の生産業務に当ることを至高の光栄かつ最上の喜悅として報償については全く眼中にないので、工場側責任者は一般従業員にこれを周知徹底させる／勤務生徒の報償・特別報償・定期賞与はすべて工場側より派遣教員を通じ学校長が一括受領する／基本報償は生徒1人に対し月額40円、一般汽車通学生徒に対しても同額とする。遅刻・早退等は、工場の規程にもとづき減額される／汽車通学生徒の乗車賃は、報償とは別途、工場より受給する／学校納付金(授業料・修練隊費・保護者会費・旅行積立金・報国貯金等)は、生徒報償金より控除し、その剰余を小遣いとして金円で支給する。教科書代・寮費等は小遣いに含まれる

(13) 成績査定(省略)

(14) 教育訓練

工 場	名 称	実 施 期 間	訓練時間
郡山工場	工場特別教育訓練	入場より7月31日まで	勤務終了後30分
郡山第二工場	教育訓練	7月15日より7月28日まで	第1週：午後3時まで 第2週：午後4時まで
郡山第三工場	教育訓練	7月15日より7月28日まで	第1週：午後3時まで 第2週：午後4時まで

これによって郡山工場は、7月12日に磐城高等女学校の入場式、次いで7月15日に安積高等女学校の入場式が予定された。また、特別教育訓練終了後の8月1日より全員が午前7時より午後17時まで工場勤務となった。

9. 6月28日、動員割当に対する県内政部長への回報

安積高等女学校長は、6月23日付県内政部長からの照会に対し、6月28日付安高女発第167号「学徒勤労働員出勤先割当二関スル回報」を送付した。

学徒勤労働員出勤先割当二関スル回報

一九教昭和十九年六月二十三日付御照会ノ標記ノ件、出勤先割当内定工場ニ出張打合セタル結果、出勤可ト認メ候条、此段及回報候也

10. 父兄懇談会の開催

安積高等女学校は、6月30日付の父兄懇談会開催通知(B5版の半分の更紙に孔版印刷)を第四学年父兄に発送し、7月4日午前8時半より学校講堂において開催し、「第四学年生徒工場勤労働員下命二当リテ」という左記に紹介した7月3日作成の「下令実施要綱」とほぼ同じ内容の印刷物と「第四学年生徒勤労働員通年工場出勤教科配当表」を配布し、父兄の諒解を求めた。「下令実施要綱」には見えない内容の要点を摘記する。具体的内容に加えて、趣旨の周知徹底を図ることに主眼が置かれていた。

- 一、国家ノ現況(1. 敵米国ノ反攻愈々熾烈 2. 国家隆替、民族興亡ノ岐路)
- 二、戦力増強ノ只一途(1. 一億国民^{けっき}葬蹶起 2. 正義必勝ノ信念 3. 軍需生産ト食糧増産)
- 三、生産労力ノ給源(1. 女子ノ挺身 2. 学徒ノ動員)
- 四、学徒ノ勤労強化
 - (1. 勤労集団作業時代ヨリ学徒勤労働員マデ 2. 夏休五日以内ノ作業ヨリ通年勤労マデ)
- 五、皇国勤労観(1. 学業ト訓練ト勤労ノ一貫性 2. 勤労即教育一行学一体ノ修練)
- 六 - 八(省略)
- 九、其他(1. 一切ノ事項 - 凡て学校へ^{すべ} 2. 学校・家庭・工場一体化 - 協力・慰安・激励等
 - 3. 専門学校入学志願 - 工場勤務状態・修学能力ノ状態 4. 防空関係生徒 - 現場勤務)

11. 出動令書の発令

福島県内政部長は、44年7月6日19教をもって県内男女中等学校長に対して次のような出動令書を送達した(安積高等女学校は、7月7日受付)。

学徒勤労働員出動二関スル件

予テ御配意相煩居候標記ノ件、別紙出勤令書通り発令相成候二付テハ受入側ノ準備整ヒ次第、速ニ出勤相成度

追テ左記事項決定ノ上ハ至急報告相成度。

記

- 一、出勤先
- 二、出勤人員(学年[学科種別アルトキハ学科名]付記ノコト)
- 三、受入式日時場所
- 四、勤務状況(通勤・宿泊ノ別、作業時間)

(別紙) 中等学校修練隊出動令書(写)

福島県立安積高等女学校修練隊長 荒 川 信 吉

右ノ者左ノ事項ニ依リ学校修練隊ヲ出動シ之ニ依ル協力ニ関シ必要ナル措置ヲ為スベシ

隊ノ名称		安積高等女学校修練隊	協力セシム ベキ員数	男／人、女100人
隊長ニ関スル事項		教職員	詮衡ノ範圍 及標準	可成高学年
隊ノ出頭スベキ日時及場所				
協 力 申 請 者(請 求)	住所(団体ナルトキハ 其所在地)	郡山市長者町225		
	氏名(団体ナルトキハ 其代表者ノ氏名)	日東工礦郡山第三工場		
作業指導者ノ職氏名				
作業場ノ所在地及名称		同右		
作業ノ内容		保温紐加工		
協力期間		自昭和 年 月 日至昭和 年 月 日 午前 午後		
支給経費		認定ニヨル		
災害疾病死亡等二 対スル□□ノ内容		県ノ指示ニヨル		
宿舍、保健、衛生、救護施設		完備		
其他参考トナルベキ事項		通勤		

昭和19年7月6日

福島県知事 石 井 政 一

(以下の付記は令書を写し取った荒川信吉による)

付記　他の二令書は全くこれと同一なるが「氏名」及「作業ノ内容」の部だけ左記の如く記入しあり。

協 力 申請者 (請求)	住所(団体ナルトキハ 其所在地)	郡山市豊田町122	郡山市麓山町115
	氏名(団体ナルトキハ 其名称及代表者ノ氏名)	日東工礦郡山第二工場	日東工礦郡山工場
作業ノ内容		織布作業	海軍飛行服地原糸紡績

出動令書の送達は、県下一斉に行われ、その全貌は、 7 月 8 日の新聞に掲載された。

学徒・生産決戦へ　ー待望の通年動員下令ー

学窓から生産決戦の第一線へ――学徒通年動員が七日下令された、出動校三十八校、四千七百十五名に上り本県最初の大規模な動員下令である、男子中学校二十校のうち白河中、石川中の両校が神奈川県下の某工場へ出動するほか他は男女とも県内の工場、事業場に配置され受入側の準備出来次第直ちに生産決戦に突入することになってゐる、近く第二陣として若干の追加と県外出動が下令されるが、今回の動員に当って県では(中略)行学一如の實踐に徹するとともに若き学徒戦士の敢闘による戦力の飛躍的増進を期待し、石井知事は?尽忠の若き血沸る学徒諸君の挺身敢闘こそ必勝の原動力である。と学徒動員の出陣を激励した、出動校および人員次の通り(表示は筆者による)

安積中	150	会津工	425	福島高女	250	三春高女	100
磐城中	200	川俣工	100	会津高女	50	小名浜高女	100
福島中	140	平 工	150	磐城高女	200	桑折高女	50
相馬中	150	福島商	400	安積高女	250	湯本高女	50
会津中	150	若松商	150	喜多方高女	100	植田高女	50
喜多方中	50	須賀川商	150	福島第二高女	100	福島高等家政	50
保原中	50	平 商	50	郡山高女	150	福島成蹊	200
白河中	50	喜多方商	100	若松高女	50	田村農蚕女子	50
安達中	50	郡山商	50	二本松高女	50	男子20校	2,765
石川中	100	相馬商	150	須賀川高女	50	女子18校	1,950

(荒川信吉『前掲書』貼付切抜き、昭和19年7月8日、朝日新聞)

12. 壮行会と入場式

安積高等女学校においては、 7 月14日に学徒動員工場出動壮行会を挙行了。次のような学校長の「壮行会に於ケル激励ノ辞要旨」が遺されている。

一、国家ノ現状ヲ凝視セヨ／二、正義ハ終極ノ勝利／三、国民総蹶起／四、学徒動員(1. 動員令ハ下ル／2. 光栄ノ諸子／3. 工場ハ其ノ倭戦場)／4. 勤労即教育)／五、祝出動／六、師ノ情誼(1. 祝賀・記念・会食／2. 共甘同苦／3. 健康ヲ祈ル・身体ニ注意セヨ・無理ヲスルナ)／七、万歳
師弟ともに会食をして壮途を祝った。その翌7月15日に入場式(第四学年工場勤務出動壮行受渡式)を出動先三工場長臨席の下で挙行了。学校長は式に臨み一場の告辞を述べた。

告 辞

大東亜戦争勃発茲ニ二年有半、(中略)是ノ時ニ当リ、正ニ勤勞ノ動員令ハ降レリ、女子学徒タル諸子ノ頭上ニ降レリ、明ニ降レリ、嚴ニ降レリ。諸子ノ光榮之ニ過グルモノアランヤ。予ハ諸子ノ此ノ日ヲ待ツコト久シキヲ知ル。待ッテ遂ニコノ恩寵ニ浴シ、今日出勤ノ歡喜ニ浸ル。予モ亦職員一同ト共ニ胸中感激ニ満チ、衷心欣快ニ堪エズ。茲ニ諸子ニ一言 ^{ハナムケ} 驢 シテ其ノ行ヲ壮ナラシメントス。

夫レ諸子ハ宿敵撃(?)ノ大任ヲ帯ビテ、其ノ途ニ上ルニアリ。

勇躍所定ノ工場ニ征ケ。征キテ働ケ。勤勞即教育ノ理念ノ下ニ死力ヲ尽セ。(中略)ヤヨ征ケ、諸子、健ナレ。

今茲ニ出勤先三工場長ヲ迎エ、皇国ノタメ赤心至誠、純真無垢、何ニモノニモ代ヘ難キ、予ガ本校入学ノ許可ヲ与ヘテヨリ此方、多年ニ亘リテ愛護撫育セル二百七十ノ大和乙女ヲ、敢テ其ノ手ニ委ヌ。

^{ネガワ} 冀クハ其ノ全能力ヲ發揮セシメテ、国家喫緊ノ養成ニ応ヘシメ、以テ生産陣營ニ敵必滅ノ凱歌ヲ奏セシメラレンコトヲ。

昭和十九年七月十五日

福島県立安積高等女学校長正五位勲五等 荒 川 信 吉

決定までの二、三の証言

動員先決定までの経過についての安積高等女学校以外の事例を回顧録や座談会記録などから拾い出せば、およそ次のような事例があった。

1. 父兄の反対で動員先変更—平商業学校の場合—

【呉羽から三菱造船へ】

清水 わたしは横浜の三菱造船会社へ行った。出発は十九年十月二十八日。(中略) 最初は錦の呉羽に来てくれといわれ、呉羽なら近くていいというわけで、父兄を呼んで話したら、だめだという。何故かという、毒作っているという。それで横浜へ行った。(以下略)

(『平商六十年誌』所収、座談会「学徒動員の頃」より抜粋)

【注】 清水：旧職員清水幸蔵先生。錦：いわき市錦町。呉羽：呉羽化学、当時は相模海軍工廠。毒：塩素ガスやジニトロクロルベンゼンなど。第一海軍火薬廠(宮城県船岡町、現柴田町船岡)の原薬工場としてカーリット爆薬(過塩素酸アンモン)を製造供給した。

この結果、仙台高等専門学校・田村中学校・植田高等女学校が動員され、塩素ガスを吸ったり、ジニトロクロルベンゼンでかぶれたりして、田村中学校は翌年5月末に離脱した。なお横浜ゴムに動員された田村中学校4年生は、中村広寿の証言によれば、1944年4月から呉羽化学錦工場に3か月動員され10月19日に横浜ゴムに向ったという。その時は、呉羽化学の前身の呉羽紡績の跡地整理や石城郡山田村の山林からの原木の運搬作業だったというから呉羽化学の危険性について認識していたかどうか明らかなでない。

2. 工場の要望を断った―若松商業学校の場合―

【弗素ガス工場からトロッコ押しに】

稲村 大寺の方は、工場は化学工場で、機械工場とちがって仕事を覚えるような工場ではない。一番困ったことは、弗素ガスの工場があってそこに生徒を入れたいと工場側は言ったが、これは歯がくさるので若い人を入れるわけにゆかずお断りした。そうすると仕事は結局トロッコ押しだけだ。トロッコ押し専門で学校を卒業しても、どうなるのかと生徒に聞かれて困った。

(若松商業高等学校『創立五十周年記念誌』より抜粋)

【注】稲村：当時の校長稲村良之助。弗素：フッ素。大寺：日本曹達大寺工場(現磐梯町)

3. 県の命令に反対して県外へ―福島電気工業学校の場合―

【地元から県外へ】

昭和19年6月、本校生も学徒動員令により、福島市の工場と京浜地区の工場に分割配置され、軍需生産に従事すると同時に、学校には軍隊の一部兵士が駐留することになった。これは一体どういうことか。しかも市内の学校は皆地元じゃないか。これは昨年の福島商工学校との合併の命令に反抗したしっぺがえしなのだ。山森氏は唇をかんだ。

(学法電気学園『創立50周年記念誌』より抜粋)

【注】6月：8月の誤りか。分割配置：地元(1期生＝東北興業、2期生＝協三興業・昭和鉄工所、3期生＝中島飛行機地下工場・周辺農家の援農)、県外(2期生＝横浜市の日本アスベスト)。駐留軍隊：隊名不詳。福島商工学校：福島商業学校に工業科が設置されて変更した校名。市内の学校は皆地元：福島商工学校は全て地元であった。ただし福島中学・福島高女・師範学校は県外にも動員されたので、地元と県外の分割動員は電気工業学校だけではなかった。山森氏：校長山森栄三郎氏。

4. 低学年が県外へ―若松商業学校の場合―

【3年生が横須賀海軍工廠へ】

司会 戦時中の思い出は、生々しいでしょうが、稲村先生どうでしょうか。

稲村 あの頃三年生が横須賀の海軍工廠に勤労働員、四年生が日曹大寺、五年生が今のいすゞです。一番苦勞したのは、三年生で、お膳も何もない所で食事をしてね。三年生は可愛想だったですな。それで三年のみは引揚げてくるように努力したが絶対ダメで、結局八月十五日の終戦まで居ました。(若松商業高等学校『創立五十周年記念誌』より抜粋)

【注】海軍工廠：若松商業学校の動員工場は田浦にあった。寮は逗子市桜山の第五寮であった。白河中・一ノ関中・日川中・小田原商・早稲田第一高等学園などが同じ寮であった。いすゞ：川崎のいすゞ自動車。

白河中学校の3年生自身も、横須賀海軍工廠への動員は辛かったと述懐している。そこで、低学年の生徒が県外へ動員された事例(専門学校・農学校を除く)を拾い出すと、およそ次の通りであった。

動 員 学 校 名	上級学年	動 員 先	当該学年	動 員 先
福島中学校	5	福島製作所・沖電気・福島駅	4	横須賀海軍工廠
福島高等女学校	4	品川計器・日東工鉱業・福島駅	3	横須賀海軍工廠
(私)福島電気工業	(3)	東北興業	(2)	日本アスベスト
梁川高等女学校	4	大日本兵器	3	古河鑄造
保原中学校	5	伊達製鋼	4	東芝電気通信機
			3	三菱横浜造船所
保原高等女学校	4	東京兵機	3	東京兵機
安達中学校	5	郡是製糸	4	川崎化工機
安積中学校	5	京三製作所・保土ヶ谷化学・郡山駅	4	日本電解・東洋電機
石川高等女学校	4	ヂーゼル川崎(川崎いすゞ)	3	ヂーゼル川崎
(私)石川中学校	5	相模陸軍造兵廠	4	日立製作所
			3	東芝電機(鶴見工場)
田村中学校	5	日立製作所	4	横浜ゴム
白河中学校	5	横須賀海軍工廠	4・3	横須賀海軍工廠
白河商業学校	5	日本精工	4	日本精工
			3	三菱化工機
棚倉高等女学校	4	横須賀海軍工廠	3	横須賀海軍工廠
会津中学校	5	沼倉発電所・日本鋼管・三菱製鋼	4	日本鋼管・三菱製鋼・若松駅
			3	ヂーゼル川崎・東京衡機
若松商工学校	5	ヂーゼル川崎(鶴見)	3	横須賀海軍工廠
喜多方中学校	5	横須賀海軍工廠	4	東芝電機
坂下高等女学校	4	横須賀海軍工廠深沢分工場	3	横須賀海軍工廠深沢分工場
相馬中学校	5	日東工鉱業	4	東芝(川崎・大宮)
			3	海軍航空技術支廠
相馬工業学校	5	帝国金属原町工場	4・3	帝国金属本社
双葉中学校	5	日立製作所日立工場	4	日立製作所多賀工場
浪江高等女学校	4	横須賀海軍工廠	3	横須賀海軍工廠
磐城中学校	5	常磐炭鉱	4	日立製作所多賀工場
			3	藤沢飛行場建設工事
磐城高等女学校	4	帝国通信工業・日東工鉱業・品川白煉瓦ほか	3	横須賀海軍工廠・品川白煉瓦ほか
平工業学校	4	日立製作所(山手・多賀・鮎川)・日立鉱山・昭和航空機	3	日立製作所
平商業学校	5	日産自動車・新日本鋼管・日の出製鋼・日本水素・古河鉱業	4	日産自動車・日立製作所・古河鉱業
			3	三菱造船所

【注】(私)福島電気工業学校は、高等科卒業を対象としていたので、(3)(2)と表示したが、一般の学校の5・4に相当する。

このようにかなりの学校で低学年生が、県外に動員されている。上級学年と同じ会社あるいは工場に動員された学校もあった。だが県外には全く動員されなかった学校もあったから、次に紹介する福島高等女学校生の「どうして3年生が」という疑問は、動員計画や協議の経過などが明らかにされなければ、解消されない。文中の「S先生の話」や「校長先生の演説」などから、そこには当時動員に関わった当事者の信条や会社・地元経済界あるいは校長相互の力関係などが介在していたであろうと推測される。

なぜに横須賀へ—学徒通年動員—

私たちは、なぜに横須賀まで出かけて行かなければならなかったのか。単純かつ素朴な疑問である。四年生が福島市内の工場に出動していた後のことだから、三年生が割り当てられるのは当然のことに違いない。だが、なぜに横須賀まで、という疑問が解かれたわけではない。

M女史によれば、S先生の家へ遊びに行った時、「横須賀まで行くなんてかわいそうに。俺がいたら……」と話されたという。親心としてのいとおしさから言って下さったのだろうと思うし、たとえS先生が、動員計画の会議に顔を並べていたところで、横須賀行きの結論は出たのだろう。それにしても職員会議等でどのような話し合いがあったのか、知りたいところである。

ちなみに、沼間第五寮にいた宮城第一高女の場合は、(中略)最初、横須賀を希望したのはわずか二十名で、あわてたらしい校長先生は全員を集めて、「みなさんは国賊だ」と演説をしたという。それで一挙に百七十名の希望者が出、抽籤の結果、百名になったとか。(以下略)

(福島県立福島高等女学校第四十三回卒業記念文集『敷島の海いまなお藍く』巻頭言より)

5. 学年やクラスの分割動員—三春高等女学校の場合—

飛田昭喬先生の思い出

学校では第一陣として昭和十九年七月十七日、四年西組五十五名を東北航空に送り出しました。そして、八月二日第二陣として東組五十五名を貯金局郡山支局に出動させるとき、東組の生徒たちから、「貯金局でなく東北航空へ行きたい」と懇願されました。飛田先生は、「貯金局の仕事も大事なお国のためになる仕事です。その上、やがて戦争が終ったときでもあなた方のためになる仕事だと思い選んできたのです」と静かな口調で話されたそうです。

(『三つの春に』の「踏み切りの絵」から)

貯金局へ出動

司会 五十年前の今日、昭和十九年八月二日、東組が出動した記念の日です。まず、その日のことをお話してください。

橋本 私、その日の記憶があんまりなくて——。それよりも、前に東北航空へ出動していた西組の人たちがとてもうらやましかった。愛国心に燃えていたから、一日も早く仕事がしたかったのよ。

中西 私は西組で東北航空のはずなのに残され、すごく泣いたのを覚えています。

大内 私も皆さんと同じで、東北航空へ行きたかった。先生に説得されてがまんしたのをはっきり覚えています。

佐藤 私も東北航空の作業服を見るとうらやましかった。貯金局にいるのは肩身がせまくてね。

三浦 皆さんが東北航空へ行きたい思いから、それを校長先生に話をした。そしたら校長先生は「貯金局だってお国のためになるのだ。そして卒業してからあなたたちの役に立つ仕事なので、ここを選んだのだ」と言われた——と私は中城英さんに聞かされました。

(『三つの春に』の座談会「再びつどいて」より抜粋)

【注】飛田昭喬：当時の校長、福島師範美術教授、日展会員、後三春中学校長・田村高等学校長。

貯金局郡山支局：当時は郡山市清水台の元安積学館跡にあった。東北航空：松葉製糸の軍需転換工場、現東北工業

このような学年やクラスの分割動員はかなり多数の学校でみられた。

各校の出動日と動員先

こうして福島県の中等学校生徒の通年動員第一陣は出動して行った。その出動日と動員先を整理し、紹介して置く。

学 校	出動月日	動 員 先	学 校	動員月日	動 員 先
安積中学校	9. 30	日本化学郡山工場	福島高等女学校	⑥ 7. 11	品川計器
磐城中学校	7. 20	常磐炭鉱	会津高等女学校	⑦ 7. 7	仙台陸軍被服廠
福島中学校	9. 14	福島製作所	磐城高等女学校	⑧ 7. 12	日東工鉱業
相馬中学校	7. 15	日東工鉱業福島	安積高等女学校	⑨ 7. 14	日東工鉱業
会津中学校	10. 19	沼ノ倉発電所	喜多方高等女学	⑩ 7. 17	昭和電工喜多方工場
喜多方中学校	10. 18	岩瀬工機	福島第二高女	7. 15	福島製作所
保原中学校	8. 11	伊達製鋼	郡山高等女学校	4. 一	片倉製糸郡山工場
白河中学校	7. 10	横須賀海軍工廠	若松高等女学校	7. 24	会津航空工業
安達中学校	8. 11	郡是製糸本宮工場	二本松高等女学	(7. 13)	日東工鉱業富久山
石川中学校	7. 11	相模陸軍造兵廠	須賀川高等女学	(秋初め)	東亜航空電機
会津工業学校	① 7.	呉羽化学高萩工場	三春高等女学校	7. 17	東北航空
川俣工業学校	7. 4	日東工鉱業富久山	小名浜高等女学	20. 3 ~	日本水素小名浜
平工業学校	② (不明)	日立製作所山手	桑折高等女学校	⑪ 7. 18	日本蚕糸桑折工場
福島商業学校	7.	福島製作所	湯本高等女学校	(秋?)	品川白煉瓦湯本工場
若松商業学校	③ 10. 16か	ヂーゼル自動車	植田高等女学校	(不明)	呉羽化学錦工場
須賀川商業	④ 7.	東北航空	福島高等家政	(不明)	(不明)
平商業学校	⑤ 7. 28	日産自動車	福島成蹊女子商	7. 13	日東工鉱業福島工場
喜多方商業	(不明)	昭和電工喜多方	田村農蚕(女子)	(不明)	郡山蚕糸工場
郡山商業学校	5. 1	保土ヶ谷化学			
相馬商業学校	⑫ 7. 15	原町紡績原町工場			

表中に掲載の学校名は、前掲、昭和19. 7. 8付「朝日新聞」の記事による。従って、これ以外にも出動した学校が多数ある。

注 ① 他に三菱鋼材広田工場・昭和電工東長原工場・品川白煉瓦湯本工場・福島製作所・会津兵器・鈴善工業・吉田製板などに各科分散。

② 他に日立製作所多賀工場・同鮎川工場・日立鉱山・昭和航空機勝田工場・大昭鉱業上山田炭鉱などに各科分散。

③ 他に日本曹達会津工場・横須賀海軍工廠田浦工場(10. 16)に学年ごと分散。

④ 他に東京機械製作所玉川工場(8. 1)

⑤ 他に新日本鋼管・日の出製鋼・日本水素・古河鉱業などに分散。

⑥ 他に仙台鉄道局福島管理部(福島駅)・日東工鉱業福島工場などに分散。

⑦ 当初は3日から2週間ぐらいの短期就労で、勤労奉仕の延長のようなものであったが、11. 12. より通年となった。学校工場。

⑧ 日東工鉱業は郡山第一工場と富久山工場に分散。他に平郵便局(7. 14)・帝国通信鉱業川崎工場(10. 18)・品川白煉瓦湯本工場(10月)・平陽女学校の縫製工場(10月)・校内保育所(11. 18)に分散・時差出動。

⑨ 日東工鉱業は第一・第二・第三の各工場へ分散。

- ⑩ 11. 10に池貝鉄工所に変更となる。これが数少ない4ヶ月動員の事例とみられる。
- ⑪ 11. 20以降通年動員と記している。これも4ヶ月動員の事例とみられる。
- ⑫ 他に横浜高級鑄造所(7. 31)に学年・クラスにより分散。

表外学校の出動状況

昭和19年7月8日付朝日新聞掲載(表示)以外の学校の出動状況を表示し、参考に供する。これによって学徒勤労働員が、ほぼ県内全域の国・公・私立の専門学校・中学校・実業学校・高等女学校・国民学校高等科に及んでいたことが確認されるであろう。

【県北地区】

動 員 学 校	動 員 月 日	動 員 先	動 員 学 校	動 員 月 日	動 員 先
経済専門学校	s. 19(月日不詳)	日本曹達・不二越 鋼材・藤ヶ谷 飛行場建設①	師範学校(女子)	s. 20. 1. 12	中島(尾島)
				s. 20. 1. 13	中島(前橋)
	9. 27	日立製作所	市立女子商業	7. 12	日東工鋳業
師範学校	7. 11	東北興業・福島製 作所	飯坂高等女学	11. ー	川崎化工機
	7. 18	下館飛行場建設	瀬上高等女学	(年月日不詳)	(不詳)
	12. 1	寒河江町, 農業土木	私立福島女子商 業学校	6. 18	福島蚕種製造
青年師範学校	9. 21	北海道, 角田村	川俣高等女学	10. 末	東洋パラシュート
福島農学校	8. 12	北海道, 広尾	梁川高等女学	10. 1	大日本兵器
私立福島電気 工業学校	8. ー	東北興業・日本ア スベスト・協三工 業・昭和鉄工	保原高等女学	10. 14	東京兵機
			飯野国民学校	12. 1	富国通信機器
			桑折釀芳国民	s. 20. 6. 7	蚕種鑑別
			二本松第一国民	(年月日不詳)	日本蚕糸製造
附属国民学校	10. ー	精光社			二本松織物
市立第一・第二	(年月日不詳)	(不詳)	二本松第二国民	(年月日不詳)	二本松製作所
第三・第五・					東京芝浦電機
第六国民学校			本宮国民学校	s. 20. 5. ー	郡是製糸
第四国民学校	10. ー	軍需工場(不詳)			本宮製作所
杉妻国民学校	11. 10	日東工鋳・森永東 北農産工業			渡辺ファイバー
瀬上国民学校	(年月日不詳)	(動員先不詳)			
松川国民学校	(年月日不詳)	東京芝浦電機			
野田国民学校	12. 1	沖電気			

注 ① 学校史・記念誌等では21回生とあるが、藪内証言では、21回生は、日立と不二越だけだという。藤ヶ谷飛行場(松戸)は、22回生の誤りであろう。

【県中地区】

動 員 学 校	動 員 月 日	動 員 先	動 員 学 校	動 員 月 日	動 員 先
岩瀬農学校	(年月日不詳)	(動員先不詳)	本宮高等女学校	7. ー	片倉製糸・本宮製 作所・渡辺ファイ バー
田村中学校	8. 8	日立製作所			
田村農蚕学校	(年月日不詳)	北海道(町村不詳)			
日和田国民学校	11. か	保土ヶ谷化学	石川高等女学校	10. 27	ヂーゼル川崎

動 員 学 校	動 員 月 日	動 員 先	動 員 学 校	動 員 月 日	動 員 先
桃見台国民学校(男)	(年月日不詳)	日東工鉱業・東北 振興アルミ・郡山 駅・郡山工機部・ 日本専売局・片倉 製糸・保土ヶ谷化 学	芳山国民学校(女)	11. 4	片倉製糸
須賀川第一国民	(年月日不詳)	共同電気・中島飛 行機	沢田国民学校	s. 20. 4. 一	棚倉飛行場
須賀川第二国民	(年月日不詳)	東亜航空	三春国民学校	s. 19(月日不詳)	(動員先不詳)

【県南地区】

動 員 学 校	動 員 月 日	動 員 先	動 員 学 校	動 員 月 日	動 員 先
白河商業学校	8. 3	日本精工(藤沢)	白河高等女学	10. 13	東芝通信(小向)
東白川農蚕学	s. 19(月日不詳)	北海道(町村不詳)	白河高等家政	10. 15	東芝通信(柳町)
吉子川国民学	s. 20. 5. 13	棚倉飛行場	棚倉高等女学	11. 8	横須賀海軍工廠
		矢吹松倉開墾			

【会津地区】

動 員 学 校	動 員 月 日	動 員 先	動 員 学 校	動 員 月 日	動 員 先
大沼農学校	(年月日不詳)	(動員先不詳)	初等科訓導会津養成所	7. 22	仙台被服廠
会津農林学校	8. 10	北海道清水村・御 影村・浦幌村	市立若松女子商業	(年月日不詳)	(動員先不詳)
田島農林学校	(年月日不詳)	(動員先不詳)	鶴城国民学校	(年月日不詳)	会津兵器
河東第二国民	s. 20. 4. 一	三菱製鋼(広田)	耶麻高等女学	10. 23	日東工鉱業(富久山)
			板下高等女学	11. 8	横須賀海軍工廠
			猪苗代高等女	11. 5	日東工鉱業(郡山第1, 2)

【相双地区】

動 員 学 校	動 員 月 日	動 員 先	動 員 学 校	動 員 月 日	動 員 先
相馬農蚕学校	(年月日不詳)	(動員先不詳)	相馬高等女学	(年月日不詳)	日東工鉱業(富久山)
町立小高農学	(年月日不詳)	(動員先不詳)	浪江高等女学	11. 5	横須賀海軍工廠
双葉中学校	8. 6	日立製作所			

【いわき地区】

動 員 学 校	動 員 月 日	動 員 先	動 員 学 校	動 員 月 日	動 員 先
市立平高等女学	12. 一	三菱造船所	磐城農学校	(年月日不詳)	(動員先不詳)
市立平女子商業	(年月日不詳)	(動員先不詳)	小名浜実業学	(年月日不詳)	日本水素工業
私立平陽女学校	(年月日不詳)	(動員先不詳)	小名浜水産学	s. 20. 4. 一	三崎・格納庫
私立藤田裁縫女	(年月日不詳)	(動員先不詳)	平第2国民(女)	(年月日不詳)	(動員先不詳)
平第1国民(男)	s. 20. 3. 一	大阪造船所	平第4国民学校	s. 20. 3. 14	品川白煉瓦か
錦国民学校	s. 20. 4. 一	相模海軍工廠			

第3節 学徒の送出と受入れ

送出と受入れ

出発に当たって、学校・地域・保護者はどのように対応したか、また送り出す者の心情はどのようなだったかなどを、県外への動員を中心にして、勤労働員学徒並びに女子挺身隊員などの日記・回想・聞き取りなどをもとに再現してみよう。

保原高等女学校の3年生と4年生は、1944(昭和19)年10月15日に、伊達駅から東北本線上りの夜行列車に乗って川崎市中丸子の東京兵機(現不二サッシ)に向けて出発した。

○姉がケット(ブランケット・毛布)を編んでくれたのを覚えています。

○私は、「国のために行くのだ」と教えられていたので意気揚々として出立しました。

○私は、母に「保母になりなさい」といわれたが、みんなと一緒に出発した。

○汽車など初めて乗ったといってもよいくらいなので、喜び勇んでいて、みんながなんで泣くのだろうと不思議に思ったものでした。

○母が見送りに来ていたので、泣いてしまいました。

○半田山の姿をみて、朝夕眺めていた半田山ともお別れかと思うと涙が出てきました。

○保原駅から電車で伊達駅に出て、そこから国鉄に乗り換えて出発しました。涙で伊達駅の外灯が虹色に見えました。

○伊達駅から乗ったのですが、福島まで真っ暗闇のなかで誰も何もいわずに黙りこくっていました。

○上野駅、朝早く寂しい感じ。ゴミゴミして汚いんだなあー。ここで乗り換えです。「ドアのところで1、2、3で一斉に乗れよ」と教えられていました。上野駅から山手線で渋谷へ出てそこから東横線に乗り換えて工業都市駅(現武蔵小杉駅)で降りました。

○職場では、私たちを歓迎してくれました。クリスチানের清心女学校生徒代表の歓迎の挨拶があってとても嬉しかった。挨拶の中で「やすはら高等女学校生の皆さん」と述べたのが忘れられません。

○川崎で演劇を見せてもらいました。

(1999年10月15日、保原高等女学校「勤労働員学徒の集い[座談会]」から)

【注】清心女学校：神奈川県「学徒勤労働員の記録」には捜真女学校5年生を載せている。

半田山：桑折町西北方の宮城県境に近い標高863mの山。中腹には半田銀山跡・半田沼などがある。

電車：当時は、福島を起点に飯坂・湯野・保原・梁川・掛田・月舘方面に路線が運行していた。

福島高等女学校の3年生は、1944年11月8日の夕刻、横須賀海軍工廠(田浦)へ向けて福島駅を出発した。以下の回想文は、第43回卒業生記念文集『敷島の海いまなお藍く』からの部分抜粋である。

○昭和十九年十月の或る日、とうとう私達にも学徒勤労働員令が下りました。敗色濃い戦時下のこと、私達も、米英の女学生と戦うのだと思いました。家に帰り、いつものように、母の枕許で話をしました。母は九月末に、一番下の妹を出産したので休んで居りました。

「今日学校で、私達も学徒勤労働員で横須賀に行くようになったんだって。海軍の人が、説明に来たよ。」と、母に話しました。母はとても、がっかりした様子でした。すぐ下の弟は、今の競馬場の中にあっただ、清水航器へやはり学徒勤労働員で行くことになり、今でいえば、中一の子供です。私は自分のことを棚に上げて、戦闘帽とゲートル姿の弟を痛々しく思いました。父はその年の六月に中支に出征していて、家には祖父母と母と子供七人ですから、経済的、精神的に、母も祖父母も、それは大変だったと思います。

母は、私のために、座ふとんを縫ってくれました。メリンスの赤いきれいな布で、ふかふかの座ふとんです。その座ふとんは、逗子・沼間の特に夜の空襲で、防空壕に入るとき、いつも私と行動を共にして、とても助かりました。壕の中では、このふかふかの座ふとんに、よく眠りました。母のぬくもりを感じながら、涙も、ずい分流しました。

(安斎モト「お母さん、私横須賀に行ってきましたよ」)

【注】10月の或る日：不詳。清水航器：清水航空機。中一：師範学校附属国民学校高等科一年生。逗子・沼間：逗子の沼間第四宿舎。

○作業衣は、カーキ色の洋服型の上下と白い着物型の上下だった。福女生と云えば私が子供の頃にはフェルトの紺の帽子にセーラー服姿だった。子供心にそんな姿にも憧れて居たし、又英語が習えると云う希望が有った。しかし、夢に描いていた姿とは程遠いものであった。

(畠友子「今は瀧過されて懐かしいばかりだが」)

○隣組では防空演習、貴金属の供出と日々に軍事一色となり、私達にも勤労働員、学徒出陣の声が聞こえて来るようになりました。そんな折、親元を離れた経験もない私達は、横須賀への勤労働員を知り、喚声を上げて喜びあいました。物資不足の中から親達が心をこめて作ってくれたおべんとうを食べ、見も知らぬこれから先の生活に心をはずませて、私達は逗子の沼間寮(第七棟)に入ることになりました。寮に着いた夜、大きな駕籠に、ふかしたさつまいもが出されました。汽車の中で心づくしのおべんとうを食べ、お腹も満ち足りていた私達は、少しつまんだ程度で残りを配膳室へ返しに行きました。私たちがその駕籠を置くやいなや、挺身隊の人の「残ったのですか？」と云う言葉と同時に、あつと言う間にもう無くなってしまったのです。あの時の驚き。親元からはばたいて来たばかりの私達には、想像も出来ない、きびしい現実がまっていたのでした。

(伊関幸子「兄は田浦に、私は逗子に」)

【注】タイトルの「兄は田浦に」：横須賀海軍工廠の動員された福島中学校4年生。

○十一月の末。飯坂の大火で焼け出されて間もなくの頃だっただけに正直な所ゆきたくなくて、重い気持ちで福島駅頭に集合した時の光景があざやかに浮んでくる。町は灯火管制で真暗なのに駅前広場は臨時の投光器で異様に明るくカバンを背負った青春群像が浮き出されていた。光と陰影の濃いゴヤの絵のように……。その思い出の中に特にあざやかなのは小高い岡に七つの寮があり一番奥に私達福島の寮、そして手前に棚倉・仙台？・浪江高女の寮があった。

(伊藤純子「夢路にかよう「浜辺の歌」」)

○上級生は市内の軍需工場へ、私達は学徒動員で横須賀へ出発するまでいろいろな検査、体が丈夫でないといつていかれないといわれた時は自分の病気をうらめしく思いました。万歳の声に送られて出発する友達に「あとから行くから。」というのがやっとでした。翌日からの学校は二十人たらずで淋しい教室です。それでも午前中は軍手のつくろい作業、先生方も出席はとりにきても、授業は、数えるほどしかありませんでした。

(伊藤妙子「女学校時代をふりかえって」)

○横須賀線逗子駅を発ち間もなく田浦の駅に着こうとしてる車中で空襲警報発令となり、着くや否や乗り合わせていた人々と夢中で、トンネルめがけて駆け込みました。と同時に艦載機による機銃掃射を受けたのです。生まれて初めての出来事に唯々恐怖感に戦っておりました。全く生きた心地もありませんでした。どうせ死ぬ身なら親姉妹と一緒にでありたいと希っておりました。

(内池恒子「横須賀線での空襲等々」)

○学徒動員で私達は横須賀の海軍工廠に行くことになりました。そのときまで、私はまだ福島の県外に出るような旅行をしたことがありませんでした。

女学校へ入る憧れの一つに四年生になると関西へ修学旅行へ行けるのが大きな楽しみの一つでした。けれどその楽しみも戦争がはげしくなるとり止めになってしまいましたので、私はその代償に長い旅行にでも行くようなうれしい気持ちもどこかにありました。兎に角何よりも先生の言われることに

嘘はなく、私達のような小さな力でもお国に役立つことはとても名誉なことに固く信じて出発しました。ランドセルの中には教科書もつめて。 (原信子「いのちにはかえらん」)

○戦争が益々はげしくなり私達は、横須賀の海軍工廠に行く事になりました。家を離れ勉強をしなくとも良いという、単純な考えから慶びと緊張に胸をはずませて出発の日を待ちました。出発の日などは修学旅行へ出かけるような思いでうれしかったのです。おにぎりや、手作りのパンなどをカバン一杯につめて福島駅を出発しました。 (佐久間キヨ「孫たちに語り聞かせて」)

○通年動員横須賀行きが決まった時、Uさんのお父さんやKさんのお父さんは、「確かに国策かもしれない。だけど遠く横須賀まで行かなくともいいだろう。福島でも御奉仕できるのではないか。」と、校長先生に話しに行ったという。どんな話し合いがなされたのか。 (編集部「子を思って」)

○第七寮二十号室(B 6 判木綿糸で綴じたノートの表紙)。

このノートで、故郷をはなれ逗子にて郷愁になやまされながら記す(表紙見返し)。

十一月 八日 水 晴後雨、福島出発から…………。

十一月 九日 入廠式、身体検査。

十一月十五日 職場組立に配置。

十一月十七日 鑢けづり。セーラー服を着て福島の街を歩いた夢を見た。四日間続けて同じ時刻に空襲があった。職場が寒くてお腹が痛い。 (大橋光子「鉄と海風」)

福島中学校4年生の3クラスは、1944年10月18日に、横須賀海軍工廠へ向けて東北本線福島駅を発った。動員学徒の一人塚本利勝からの聞き取り(1999年10月19日)を要約・紹介する。

生徒には「防空壕も整っているし、修学旅行のようなものだ。」という説明があった。入社すると、まず身体検査があった。身体検査では「M検」という性器の検査があった。軍港の海軍の施設の見学もあった。軍法会議の法廷も見せられた。

米穀通帳が届いていないというので、しばらくの間はスイトンだった。

私立福島電気工業学校の2期生A班49名は、1944年8月(日にち不詳)に横浜市鶴見区大黒町の日本アスベスト(現ニチアス)へ向けて東北本線福島駅を出発した。2期生の渡辺清吾からの聞き取り(1999年12月13日)を要約・紹介する。

2期生は90人ぐらいいたが、志願兵などで10人ぐらいは欠けた。保護者への説明会があって、動員先(日本アスベスト・協三工業(市内)・昭和鉄工所(市内))は希望によって振り分けた。横浜(日本アスベスト)は家を飛び出したい人たちが多くなった(49名)。

壮行会などはなかった。一緒に行った学校もあった。

腕章をつけて行った。会社に到着すると同時に記念写真を撮った。49名写っている。

会津中学校5年生と3年生は、1944年10月19日に日本鋼管川崎製鉄所と東京衡機溝ノ口工場に向けて専用列車に乗って磐越西線若松駅を出発した。渡部勝康「川崎での日々」と蔭山淳「ハンマーとタガネ」(ともに『会津高等学校百年史』所収)から抄録する。

○当日(十月十九日)、若松駅に数百名の生徒が整列して小池元吉校長の訓示を受け、生徒代表が答辞を述べて専用列車に乗り込んだ。翌朝、上野駅で京浜東北線に乗り換えた頃は夜空が白みかけ、初めて見る東京の町並みが朝靄の中にぼっかりと現れてきた。モーターの唸りと車輪の音が朝のしじまを突き破りながら、やがて川崎駅に着いた。まだ人影のない街の裏通りを歩いて日本鋼管藤崎寮に入った。

寮のあるところは埋立地であった。

早速入寮手続きを済ませ、前もって決められていた部屋割りによって、10畳の部屋に五名ずつ入居し、作業服や地下足袋が配られた。しばらく休憩をとった後に、二階の大広間で寮の歓迎会が行われた。寮には既に、早稲田第二高等学院、中央大学、日本大学、専修大学、日本体育大学などの学生が入っていた。これらの学生達には、引率の先生が挨拶された筈であったが、何を思ったのか、二、三人の学生がこのこと部屋に入ってきて、「君達はどこの学生か」と問い質す始末。「会津中学です」と答えると「ああ、中学生か」と気の抜けた言葉が返ってくる。どうやら二本の白線帽を見て、どこかの旧制高等学校の生徒と間違えたらしい。この日の夕食は歓迎の意を込めてご馳走が出された。食堂にはすばらしい美人のウェイトレスがおって、朝夕の食事が待ち遠しかった。彼女と馴れ馴れしく談笑している大学生には、みんなが嫉妬を覚えた。

翌朝は六時起床、朝食後、小坪寮監の案内で工場に行く。配属は鋼管二課の圧延工程に決まった。○昭和十九年十月十九日、晩秋の茜空が消え、刻々と暮色迫る会津若松駅頭は「勤労動員学徒」の腕章をつけた私達と、それを見送る一、二年生の後輩達とでござった返していた。折柄暗い照明の下で「駒の嘶きつつの音……」の校歌、「緋緘し鎧ふ……」の学会会歌の歌声が後輩の間から自然発生的に起これば、我々は「花も蕾も若桜……ああ紅の血は燃ゆる」で答え、感激も新たに会津を後にした。そしてこの日からノートを鉄板に、ペンをハンマーに代える生活が始まったのだ。

勿論当時の私達には大戦は聖戦であり、天皇陛下は正義の根源であることに一片の疑念もなく、中学三年の多感な一五歳の青年達は、身振いを感じるほどの感激のなかで、その任に就いたのだった。以下蔭山淳「学徒動員のあの頃」（教材用ガリ版印刷）より抜粋する。

10月20日 8時30分東京衡機溝ノ口工場に到着・宿舎割当・荷物到着(フトンだけ)・身体検査。

10月21日 入所式(社長及び工場長の訓辞)・記念写真撮影・工場見学・製造部長の訓辞・労務部長の訓辞・相馬中村の女子挺身隊来る。家庭親類へ便りを出す。

喜多方高等女学校4年生は、1944年11月10日に、磐越西線喜多方駅から川崎市戸手町の池貝鉄工所へ向った。喜多方高女の学徒勤労動員を語る会「座談会記録」より出発前後の様子を紹介する。はっきりしないのだが、4ヶ月動員(?)から何の説明も受けずに通年動員先に出発したという。しかも空襲の危険を隠して、県外の高女を配置させたいということを耳にしたという。

(昭和19年度の4年生の方、初めは地元の昭和電工喜多方工場へ動員されたんですね。)

○そうです。

(昭和電工への出勤は7月17日からとなっていますね。池貝に行かれる直前まで働いていたんですか。)

○はい、そうです。私たちの半分が昭和電工に行って交代する訳だったのです。ところが交代できないまま皆で川崎に行っちゃった。

(池貝に配置転換になったことについて何か説明聞いていますか？どうして昭和電工から池貝に変わったのかとか。)

○保護者の方には説明があったと思う。保護者の集まりで保護者は納得したのね。そして我々にはそういう話はないの。

○私達は皆何も聞かされないで、もう行かなくちゃならないっていう。

(あそこは危険だとか、そういう風聞などは?)

○向うの方の人達は、空襲を受ける場所を大体わかってっから、この池貝は危ないから行かない。そこで全然事情がわかんない我々が連れて来らっしゃということを耳にしたことが何か記憶に残ってんだけど。

○なんか、よその学校は誰もゆかなかったから。女は喜多方高女だけじゃないの、池貝は。
○そんなふうにして半分燃えて半分泣き泣きで行ったのです。
○私なんか始めから行きたくなかったの。家の状況が父親が中国へ軍属で行ってましたからね。で、兄も兵隊に取られていましたよ。私の母は、私が生まれた時に右足を切断しましたから、そのまま教員もしていましたけど、ということで母親は冬になると雪で歩けないんですよ。で、弟妹3人いたでしょ。だからなんか非常に哀しくてね。とにかくもうそういう状況でも行かなくちゃいけないから行っちゃったけど、家庭的には、私は行きたくないわって気持ちがあった。
○だから本当家庭の事情なんていうのは全然無視ですね。
（一緒に列車だったというよその学校はありましたか？）
○ないですね。
○荷物だけだもんね。
○ぎゅうぎゅう詰めで、皆に見送られて行ったんだよね。
○それこそ戦争の出征兵士見送りたいに。
○この歌(ああ紅の血は燃ゆる[学徒勤労動員の歌])で送られたのね。
○ゆっくり走ってな。ゆっくり走って皆泣き泣き行っちゃったから。
○私あの出発して行く時にはやっぱり、なんかああ、これが最期になるような気持ちでさ、悲しくなったことを覚えている。皆にさようならされて、なんとなく。
○やって来なくちゃという気持ちと一緒にね。

若松高等女学校4年生は、1944年10月18日に、磐越西線会津若松駅から小田原市蓮正寺町の国産電機小田原製作所へ向った。本県から県外への動員では、一番南方であった。

（4年生の時行ったんですか？）
○はい、4年の時。
（全員ですか？）
○150名くらい(正確には147名)行った。
○校長先生引率で。
○中島先生と渡部貞子先生。
○あの頃、鈴木先生と太宰先生と萩野先生、もう一人安田先生、4人の先生が引率で。
○10時間ぐらいかかったですね。
○小田原、遠いんだあーと思いました。盛大でしたよ。若松駅での(見送りは)。(小田原駅に着いた時に若い酸っぱいミカン、出来かけの酸っぱいミカン。ミカン見るたびに、小田原駅に着いた時の大きな食堂でつかんだ酸っぱいミカン。印象に残ったの。

中村高等女学校(正式名称は高等女子職業学校、1946年に高等女学校と改称、のち相馬高等学校に併合)の女子挺身隊員のうち18人は東京芝浦工作所鶴見工場へ向け、1944年3月23日の卒業式の3日後の3月26日に相馬駅から常磐線で出発した。中村高等女学校女子挺身隊の集い(「座談会」)の記録より抄録、紹介する。

工場から会津出身の二瓶という方が迎えに来たが、工場の説明はなかった。
相馬駅前に日の丸の「神風」の鉢巻を締めて並び、万歳の声で、早川町会議員などの見送りを受けて出発した。汽車は一般客と一緒にだった。
上野駅で京浜線に乗り換え鶴見駅でまた乗り換え、終点海芝浦駅で下車した。

原町高等女学校3年生120名は、1944年10月14日、富久山町(現郡山市)の日東工鉱業富久山工場へ向けて出発した。原町駅から常磐線下り列車に乗り岩沼駅で東北本線上りに乗換えて行った。原町高等女学校学徒勤労働員の集い(「座談会」)の記録より収録した。

- 私(牛来)の父が盲学校の当直で弁当持参で出勤し、動員が決定したことを教えられた。県内(郡山)でよかったなあといわれた。
- 保護者への説明があったかどうか覚えていない。生徒には学校から知らされた。当日朝駅前に集合し校長の挨拶があった。服装はいろいろだった。小学校6年生の時の修学旅行もなかったから汽車に乗るのは初めてだったからうれしかった。(映画がいけない。写真はいけない。男を振り向いてもいけない。そういう時代だったから)今からすれば、純粹そのままだった。
- 会社から迎えの人は来ていなかった。
- 岩沼経由で行った。汽車の窓は開放され、駅ごとに出征兵士の見送りをする人が出ていた。
- 工場に着いたのは、午後4時か5時ごろだった。夕食には、ご飯、味噌汁、大根漬4?5切れが出た。
- 翌日、入社式が行われた。工場長は秀瀬日吉氏(のち郡山市長)であった。
- 2クラスに疎開者が加わって120名もいたが、不参加が4~5人ぐらいいた。

浪江高等女学校の3年生と4年生合わせて200名ほどが、1944年11月5日に、常磐線上り列車で横須賀海軍工廠へ向った。浪江高等女学校学徒勤労働員の集い(「座談会」)の記録及び飯塚禮子『日本の空の下で』より抄録した。

- 何となく浮き足立ってきた私達は、誰言うことなく既にお倉入りしたセーラー服を引張り出して写真を撮りに町の写真館に三々伍々目立たぬ様に通った。通学区の都合で一緒に行動できない同級生は一人で写して学校で交換した。襷のスカートはさすがに非常時の真只中残念乍らゴワゴワのモンペ姿での撮影だった。それでも乙女達は半制服姿で精一杯楽しんだ。
- 十一月十三日遂に私達浪江高等女学校にも学徒動員令が下った。四年生と三年生二百名は横須賀鎮守府海軍基地横須賀海軍工廠へ向けて旅立った。私達汽車通学班は常磐線大野駅から浪江駅ホームに合流した。黙々と整列した。やなぎ行李に、思い出の紅絹布で母が心を込め急遽仕上げた綿入チャンコンとおにぎり炒り豆の暖かさを詰め込み防空頭巾を携え腕に福島県浪江高女の腕章を付けて深夜の便に乗り込んだ。四年生十六歳と三年生十五歳の晩秋。
- 横須賀駅到着。寮は日の出町二丁目、肅々と固唾をのんで十五分の行進。寮の名前は前棟を日の出寮といった。
- 父兄は、国策だから行くのは当然だというような雰囲気だった。(だがしかし、卒業後、専攻科生として継続動員して8月21日に帰校したもの56名、4年に進級して8月21日に帰校したもの98名だったことから本音を想像することが出来るだろう。)
- 生徒は、初めての修学旅行のような気分ですんなりと受け入れたが、行ってから涙が出た。
- 町の有志から餞別100円をいただいて出発した。

棚倉高等女学校の1944年3月卒業生は、女子挺身隊を編成して、辻堂の横河電機19名が3月17日に白棚線に乗り、白河駅から東北本線上りに乗り換えて、土浦の第一海軍航空廠17名が3月27日に水郡線に乗り、水戸駅から常磐線上下りに乗り換えて、片倉製糸(三菱電機)郡山工場16名が4月1日に水郡線下りでと3班に別れてそれぞれ出発した。棚倉高等女学校女子挺身隊の集い(座談会)の記録より抄録した。

○卒業式って何時だったの？

(3月15日だったみたい。)

○学校で、何処に行く。何処に行くって決められて、それでその行くことしか記憶にない。

○なにしろ、学校の卒業式には紹介されたんだもんね。それから一所懸命荷物を行李に入れたのおぼえているもん。なんせいろいろと暇がなかったんだから。

○うん、出発までせいぜい2日ぐらいかな。

○3日かそこらだった。

(横河電機の方達は、水郡線で行かれたんですか？)

○白河、白棚線で行ったの。白河駅で乗り換えて。

○夜行ったんです。

(一緒に行った学校はないですか？)

○ないです。

(その次、土浦の方達が行かれたのは何日だったか分りますか。)

○それは分りません。

○20日は過ぎていた感じ。お彼岸ごろ？

(土浦の方達は、何処経由で行かれたんですか？)

○水郡線です。

(一緒の学校はなかったですか？)

○石川から来ましたね。

(片倉製糸というのは、のちの三菱電機になっていたところですね。)

○はい。

(先ほどちょっと話がありましたが、その説明というのは、保護者に対する説明ですか、みんなに対する説明ですか？)

○あー、保護者にはなかったね。みんなにだね。

(どういう形、例えば、就職の形なのか。)

○お国のために……。

○聞いていません。ただ行くというだけでね。

○戦争のためにやってこいというだけで、女子挺身隊に行くというだけでね。

(農業要因などいましたか？)

○いました。

(あとは、体が弱い人、両親の看護、師範学校などに進学した方は？)

○福島(師範学校)です。いや私ね、学校なんて嫌いだから行きたくなかったんですけど、親に言われて、それですごく食って掛かってね。言うこと聞いてもらえず送られて行っちゃったんです。

(行き先が3つに分かれたんですけど、希望で分けたんですか？)

○希望です。

○希望っていうよりも、第1希望、第2希望、第3希望って取って、家庭の事情で、それをけっばって行きたいっていう人は、第3希望で行ったんでしょ。私たちみたいな第1希望で行ったのは東京に行きたくて行ったんだ。

○横河電機に入って、三鷹にいたんでしょ。1か月くらいいたんですよ。

○それで、5月に空襲があつてね。

○綺麗なところだったね。畑がいっぱいあって、別荘があつてピアノなんて弾いてね。

(それで1か月で辻堂に行かれたんですね。)

○あそこに行って1番良かったのは、窓から富士山が見えたことかな。

○あの富士山が見えたのが、1番印象的だったね。

○そして夜になると、ザバンザバンってね、海のね、引く音ね。

【注】白棚線：国鉄、白河・棚倉間。現在は廃線となり、軌道敷はバス専用道路となっている。

三鷹：正式には吉祥寺工場。辻堂：藤沢市辻堂。石川：石川高等女学校(現県立石川高等学校)。

田村中学校3年生100名は1944年9月8日、磐越東線上り午前10時4分発にて石城郡錦町の呉羽化学錦工場へ向けて三春駅を出発した。末永正「中学三年生の記録」より抄録する。

8. 31 三年生も通年動員はたしからしい。

9. 4 通年動員の出発期日決定。九月九日午前十時四分の列車で我々が出発する。

9. 5 通年動員の出発日変更。九月八日の十時四分。昼食時に伴野先生より通年動員についてのお話があった。携行品、その他のご注意。午後一時より三年生父兄懇談会があった。

9. 6 教室における最後の授業である。午前中短縮三校時限。四校時に我々の壮行会が開かれた。学校・教室に名残りおしい。入学以来のことがおもい出される。校長先生、牧野先生、島内先生の注意、激励のことばと我々の学徒動員の歌によってその幕は切られた。午後三年教室で出勤に関する注意が学校長、高久田、玉田、伴野、片桐の諸先生からなされた。総合通帳、飯米通帳の訂正。

9. 7 明日は学徒動員に出発。出陣？家ではおはぎでおいおいをしてくれる。明日から工場生活、感無量。

9. 8 両親のひざ元を離れて行くのは今日が最初である。近隣の級友をさそい合って駅へ。駅で四年生、二年生に見送られ校長先生の激励のことばをいただいて一同感激して出発。無事到着。

入所式挙行。寮で夢を結ぶ。夕方みんな家へはがきを書く。夜、八時点呼。人格陶冶には良い機会。嬉しくて夜十一時まで起きていた。

9. 9 五時二十分起床。点呼。食堂へ。午前中身体検査、視力検査。

黄色い服と帽子、ゲートルをいただく。長い所を短くつめたり氏名を書いたりした。海岸へ全員で出かける。夕食後軍歌演習と第三体操。軍隊式生活は家にいるより少しきつい、規律ももきびしい。なれるよう努力する。

【注】詳細な日記を後年クラス会の資料用に要約し、用字を現代かな遣いに改めたようである。

相馬中学校の出勤の様子を『相中・相高百年史』より抄出する。

1944(昭和19)年10月16日午前9時より第4、3学年の通年勤労出勤隊壮行式に相馬高等女学校長、教頭、第一、第二各国民学校校長、中村町助役、中村警察署長、相馬勤労働員署長、宗像県会議員が出席、宮本行二学校長の訓示に続き各係職員より注意通達があり、翌17日夕闇迫る中村駅前に集合し、第4学年第1班70名は、東京芝浦製作所川崎工場へ、第2班67名は、東京芝浦電機大宮工場へ、そして第3学年181名は、横浜市磯子区海軍航空技術廠支廠へと、大勢の父兄や親族たちの見送りのなか、校歌や軍歌を声高らかに歌い、午後6時55分発臨時の夜行列車に乗り込み車中の人となった。

日立製作所多賀工場に出勤した磐城中学校4年生の様子を『創立百年』から抄出する。

昭和19年7月29日日立製作所多賀工場への勤労働員下令が通告された。動員された254名の生徒は、国家への奉公の気持ちと同時に、一抹の不安を抱いた。8月3日に父兄への説明会、8月5日に壮行会

が行なわれた。8月7日朝、国防色の制服に戦闘帽、地下足袋に巻脚絆、防空頭巾を肩にかけたいでたちで平駅前に集合、校歌「峰は秀づ赤井岳………」と学徒動員の歌「あゝ紅の血は燃ゆる」を斉唱して列車に乗った。

なお、磐城高等女学校4年生で平郵便局へ動員された船生喜佐子が、1944年7月14日に、学徒を代表して局長以下の職員を前にして次のような毛筆の宣誓文を朗読した。

宣誓

今や戦局ハ苛烈ノ度ヲ超越シ
瞬刻ノ儼安ヲ肆サズ、時局ノ
緊迫皇国隆替ノ危殆実ニ
今日ヨリ大ナルハ莫シ、吾等ハ茲ニ
前線勇士ノ覚悟ニ伍シテ明日ノ
戦力増強ヲ目指シ、聊カモ私事ヲ
顧ミズ粉骨碎身国家ノ重要
通信業務ニ挺身シ以テ
皇恩ノ万一二応ヘ奉ランコトヲ
期ス

右宣誓ス

昭和十九年七月十四日

福島県立磐城高等女学校修練隊

動員学徒代表 船生喜佐子

注：このような字はない。肆(ゆるさず)の誤用であろう。姓は原本も船生と記しているが、船が正しい表記だと生前ご教示された。なお読点は筆者による。

学徒や挺身隊員たちは、日頃からの戦意高揚の訓話などにより「お国の為に」と純粹かつ一向きに思い詰め何らの疑念も差し挟むことなく出発して行った。また戦時下において修学旅行も中止され、選ばれた中等学校就学者とはいえ、生活全般にわたる統制の下で、家郷を離れての遠出も長期逗留もできなかった子女にとっては、またとない旅行の機会とも受取られ心を弾ませる思いであった。そして中には、子どもを空襲下の軍事工場あるいは軍需工場に送り出すことへの不安を抱いた親との葛藤さえも体験した学徒達があった。そうして学校・地域によっては、宣誓文を読上げ、多額の餞別をいただき、母や兄弟の心尽しの弁当や身の回り品を携え、大勢の見送りをうけ出征兵士のごとく勇躍壮途についたのだった。

しかし、いきなり空襲に見舞われたり、都会の学徒に慇懃無礼な対応を受けたり、後に紹介するようにベニヤ板の寄宿舍だったり食事が連日水団だったりと到着当初から描いていた生活、抱いていた志操が打ち碎かれるような現実と直面することになった。

1. 動員生活の一面(1)

宿舍の状況

まず寄宿舍あるいは社員寮の様子から見よう。主要な事業所について学校ごとに寄宿舍あるいは社員寮の構造やスペースや設備などを回想録や聞き取りによって復元する。

事業所	動員学校	名称・構造・スペース・設備・管理監督など
横須賀海軍工廠	福島中学校	沼間第6寮、のち第2寮に移る。板張りのバラック2階建。1室12畳、入口は1畳分くらい、その脇1間と向側2間が押入れ。高等官用便所は水洗できれいだったが、学徒用は汚く、新聞紙を入れて「おつり」がこない使い方を卒業式の式辞で校長が話した。強制連行の朝鮮人が汲取りをした。風呂は未完成で、鵜田完一先生が工廠に申入れてドラム缶に湯を入れて入浴した。1階玄関脇に寮長室があった。寮長は仙台工専出身の海軍技術将校(中尉)。寮長付は、最初の2か月は徴用工、次は付添教員の指名で2名ずつ1, 2か月ずつ交代。出勤せず寮長の身の回りの世話をした。沼間第1寮には、徴用工がいた。
	福島高等女学校	3年生。沼間第4寮第7棟の1番奥の棟。隙間風の入る木の匂いがするバラックで第2寮に比して汚かった。2階建。玄関を入った左に洗面所。中廊下を挟んで左右に部屋が並び突き当たりにトイレ。1室10畳。四方ベニヤ張りで窓が1つ。1軒の押入れ3つ(上に寝具、下に私物)。1室8～9名。風呂はあったが毎日ではなかった。工場内に風呂場新築、入浴して帰寮。食堂は1階。食事当番が食缶で2部屋分を運ぶ。アルマイトお盆にアルマイトの海軍食器。
	白河中学校	3, 4, 5年生。福島中学校が移動した後の第6宿舍に入った。3年生は、沼間第5宿舍第2寮。ここは粗末だった。1室6人。食事は当番が食堂から運ぶ。前日の夜に明日の朝食を運ぶ。昼食は、工場付近に新築の寮の和室で摂る。作業終了後、蒸気で沸かす大きな浴場に毎日入れる。3年生のみ44年12月10日に谷戸田工員宿舍第3寮に移転。
	喜多方中学校	5年生。福島中学校とは別棟。
	浪江高等女学校	3, 4年生200名。日の出寮(工員宿舍)。木造2階建数棟。古い建物。1室6畳、押入れ付。1室4, 5名。中には1室8畳の部屋があり7名が入った。布団は糸屑などが入っている再生綿。食堂は別棟。朝夕は寮で、昼は工廠で。
	若松商工学校	3年生100名。沼間第5寮。
	相馬高等女学校	女子挺身隊21名。日出町の肥後寮。
日本アスベスト	(私)福島電気工業学校	2期生。寮は社内にあった。退勤後の寮には、軍から配属され軍刀を下げた憲兵のような人が2人ぐらいいた。寮で教練が行われビンタをとられない者がいないぐらいであった。
東京兵機	保原高等女学校	3, 4年生。東京兵機第7寮。北寮(3年生)、南寮(4年生)の2棟。1室6人ぐらい。
日東化学工業	保原中学校	3年生42名。花咲寮。食堂あり、便所は立派。14室。1室6畳、床の間付。1室に2～4名。風呂は銭湯。
三菱横浜ドック	保原中学校	3年生96名。工場から2, 3キロ離れた丘の上。
東芝電気通信機柳町・小向工場	保原中学校	4年生約70名。川崎市幸区下平間の社員寮。
大日本兵器富岡工場	師範学校	男子予科1年全員。能見台寮(現日平産業ヤマト・イトーヨーカドー寮)
中島飛行機尾島工場	師範学校	女子本科2年71名。予科2年40名。予科1年40名。民家に分宿。

事業所	動員学校	名称・構造・スペース・設備・管理監督など
中島飛行機前橋工場 → 沖電気福島工場	師範学校	女子本科1年119名。全寮。 学校の学生寮から通勤。
沖電気福島工場	第2高等女学校	福島駅前の旅館から通勤。
東芝鶴見工場	飯坂高等女学校	女子挺身隊20名。鶴見の総持寺の寮。
大日本兵器福島工場	梁川高等女学校	4年生101名。第1工場寮は仲間町仙寿亭。第2工場寮は工場内の東寮。
古河鑄造	梁川高等女学校	鶴見区矢向のスミレ寮。
棚倉陸軍応用練習所(石川町沢田)	安達中学校	小野田国民学校
	安積中学校	滑津国民学校
	(私)石川中学校	自宅から通勤。
	田村中学校	吉子川国民学校(木造平屋)。3教室抜き、荒筵を敷き軍用毛布1枚を掛ける。3年生150名。
	福島中学校	釜子国民学校講堂。風呂はドラム缶。時々近所の農家に貰い風呂。
	相馬中学校	石川国民学校と付設石川高等女学校寄宿舎。のち町内長泉寺・乗蓮寺に分宿し徒歩通勤。
保土ヶ谷化学郡山工場	白河高等女学校	2階建。南北2棟。1室6～8畳。1室5～6人。暖房は、火鉢1個。昼食も寮の食堂で摂った。
池貝鉄工所	喜多方高等女学校	1室8畳。押入れ付き。1室に3, 4名。
国産電機	若松高等女学校	4年生140名。1室10名。室長任命。暖房なし。
ヂーゼル自動車川崎工場	会津中学校	3年生。宿舎は川崎市立国民学校教室(全員学童疎開・会津中学入舎以前は高射砲部隊が駐屯)。
	石川高等女学校	品川区大森鈴ヶ森のいすゞ寮(赤松子爵邸)。フトン持参。川崎の工場までは、京浜東北線から大師線に乗り換えた。ギューギュー詰め。
東京衡機溝ノ口工場	会津中学校	3年生。溝ノ口寮、のち玉川寮。
品川白煉瓦	会津工業学校	3年生窯業25名。湯本駅近くの工員寮。
日東工鋳業富久山工場	耶麻高等女学校	2年約100名。桜寮。
	原町高等女学校	3年生120名。67室。1室15人。社員食堂で朝食。風呂が故障し40日も使えなかった。
芝浦工作機械鶴見工場	中村高等女学校	女子挺身隊18名。始め東寮(遊郭跡)。のちに西寮(報国母子寮、鶴見総持寺の寮で寮長は尼さん)に移る。暖房なし。
日東工鋳業福島工場	相馬中学校	5年生154名。社内の春光寮。
東芝川崎工場(柳町?)	相馬中学校	4年生70名。南加瀬寮。7棟14軒。1軒に5, 6名。建具など補修を要し数日間電灯がつかない部屋もあった。
東芝軽電気大宮工場	相馬中学校	4年生67名。南加瀬寮。7棟14軒。1軒に5, 6名。南武線で川崎—大宮間電車通勤。3月に入ってから火鉢を入れ父兄後援会から贈られた木炭で暖をとった。

事業所	動員学校	名称・構造・スペース・設備・管理監督など
海軍航空技術支廠	相馬中学校	3年生181名。始めは金沢の白山道寮。24棟並列。不潔で不快な寮であった。学徒・工員・徴用工が一緒。のちに京浜急行線湘南富岡駅の山手の富岡寮に移る。ここから電車通勤。
相模原陸軍造兵廠	相馬高等女学校	女子挺身隊20名。第2女子宿舍。1室5人。
昭和飛行機工業	相馬高等女学校	女子挺身隊38名。始め青梅寮(料理屋「魚久」)。のち福生寮(農家の蚕室)に移る。
三国商工北綱島工業	相馬高等女学校	女子挺身隊21名。寮は元温泉旅館。
日立製作所日立工場	双葉中学校	5年生56名。成沢寮。
日立製作所多賀工場	双葉中学校	4年生。宿舍は「いづみや」。
	田村中学校	5年生45名。多賀町大沼寮。木造2階建1棟。10畳に8名。
	磐城中学校	4年生の一部。多賀町大沼寮。木造2階建2棟。10畳に8名。
日立兵器勝田工場	平工業学校	2年機械科35名。宿舍は始め構内。のち海岸近くへ移転。
原町飛行場隠蔽壕建設	双葉中学校	2年生。宿舍は東本願寺別院。
芝浦電機鶴見工場	浪江高等女学校	女子挺身隊21名。新子安寮。
三菱横浜ドック	平高等女学校	学年不明150名。宿舍は工場の2階。階下の工場では、米軍捕虜が就労。
	平商業学校	3年生99名。寮は西区北軽井沢。
横浜ゴム	田村中学校	4年生72名。月見ヶ岡の松風寮(鶴見総持寺裏)。大きい食堂。9室。1室7～9名。舎監(寮長)、各室室長1名、副室長2名。

記録や調査・聞き取りが十分ではなく、部屋の広さや付帯設備について明らかに出来なかったところも少なくないが、これによって寮・寄宿舍などのおおよそを知ることが出来よう。古い工員寮・新築の社員寮のほか寺院の寮・旅館・料理屋・魚店などの民家の借上げないしは買上げなどさまざまであった。しっかりした構造の建物からベニヤ張りのバラックまでこれまたさまざまであった。おおむね便所・風呂の設備は良好とはいえず、職場でも寮でも暖房設備はないのが普通でかじかむ手で裸電球を包んで暖をとったという。

第4節 勤務の状況

勤務の内容

先ず、1944年12月1日付の白河中学校報国勤労学徒隊(第3学年)指導職員から父兄への「状況報告第一報」から1日の日課を紹介しよう。

午前5：00	起床	5：20	朝食準備と朝食(6：00終了)
5：08	点呼	家郷に向って遥かに父母に	6：15 集合、朝礼
		お早うございますと挨拶	6：20 出発
5：15	洗面		

6：37 東京急行電鉄神武寺駅乗車
 6：40 六浦荘仮停留場下車
 6：45 衛門通過
 7：00 更衣室にて更衣
 7：10 工場朝礼、作業開始
 11：00 午前の作業終了、昼食
 0：30 午後の作業開始
 4：30 作業終了、少休憩後入浴
 5：10 集合
 5：25 退出

5：30 衛門通過
 5：37 六浦仮停車場乗車
 5：40 神武寺駅下車
 5：55 帰寮
 6：10 夕食準備と夕食(6：30終了)
 6：30 娯楽
 7：00 坐学
 8：30 点呼 家郷に向かい父母に「お
 休みなさい」と挨拶させる
 9：00 消灯

温習室にて延灯許可(～11：00)

これによれば、横須賀海軍工廠における白河中学校生の勤務は、昼休みを除いておよそ8時間、ただし休憩なしであった。工場は、六浦町谷戸田にあり、作業「内容は申し上げ兼ねますが、非常に重いものの運搬・荷造り、一部は工場敷地の地均し土運搬等」(「状況報告第1報」)であった。1945年に入ると、何月から始めたかは不明だが、「防空壕の職場の如きはこの壕は白中学徒により完成させる、永久に記念する意気込みすさまじく自ら夜勤を申出て努力いたして居ります」(1945年8月2日付「状況報告第3報」)と、防空壕の構築のため夜勤も課されていた。

田浦の海軍工廠に出動した福島中学校4年生は、光学実験部(東組)、機雷実験部(中1組)、航海実験部(中2組・西組)に配属された。中1組は途中から他の工場に配置換えになった。1945年の2月ごろから専ら防空壕掘削をやった。工事場には1週間ごとの工事区分が与えられ、それを4日ぐらいで完成し、(当時は発売制限があって逗子駅では買えなかったので)田浦駅に並んで切符を買い帰省した(1999年10月19日、「塚本利勝からの聴取り」)。

福島高等女学校4年生の横須賀海軍工廠造機部での勤務状況は、次のようであった。

午前5：00	起床、洗面、食事	午後5：00	医務部前集合
6：30	出発、逗子駅まで徒歩	5：25頃	横須賀駅乗車
6：55頃	逗子駅乗車	(5：40頃)	逗子駅下車
7：10頃	横須賀駅下車	6：00頃	沼間寮着(食事、休息)
7：30頃	鎮守府前到着	8：30	点呼、室長伝達
	就労	9：00	消灯

出勤する時は、救急袋と防空頭巾、防毒マスクを肩にかけて出勤した。

背筋力などの適性検査により検査部(材料試験班・整理班など)、組立工場、鑄造工場、鍛錬工場などに配置された。材料試験班の仕事は、主に部品の検査であった。修理関係のトレース(図面書き)もあった。試験室は大きい防空壕の中にあって常時精密機械が動いていた。整理班の仕事は、修理伝票を横須賀港に船籍がある艦船の修理原簿に転記することであった。機械や部品名は和名であった。例えば、バネ＝発条、エンジン＝発動機。鑄造工場は、「岩をくり抜いた洞窟のような工場」(地下工場)であって、木型に土を鉄棒で搗き固める仕事だった。鍛錬工場には、背筋力のある者が回された。鍛錬工場の中に発条工場があって、そこの仕事は、バネを造る仕事であった。図面に従って針金(ピアノ線)を万力で芯棒に巻きつけ、ハンマーで間隔を揃え、螺旋の数を確かめてから鑿(たがね)で切りグラインダーで切り口を平らにし、炉に入れて焼き最初は水に入れ(焼入れ)、2度目には油につける。さらに溶けた鉛と油に交互に2、3度繰り返しいれて錆止めをする。

出勤したころは、沼間の宿舎には、まだ防空壕がなかった。暫くすると、徴用工によって宿舎の横の岩が鶴嘴で掘り始められた。掘り出された瓦礫を筵の両端に竹を通した担架や大八車で離れた所まで運び出す作業は、寮当番の仕事であった。

同じ海軍工廠でも、浪江高等女学校の学徒は、寮から十五分したところの衛兵が立つ裏門から入ると、作業

服を配られた。作業服は、国防色というカーキ色の木綿の手首と足首を絞った、同色の飾り紐を締めるものだった。頭に戦闘帽を被り腕に浪江高女の腕章を付けた。

おおむね女子が動員された工場は精密機械などの部品工作が多く、旋盤工・研磨などの仕上工・シーリング・検査係・事務への配属が多かった。東京兵機に出動した保原高等女学校の場合は、どうしてもオシャカ（不良品）が出るので、組長から教本を借りて、夜、寮で読んで研究したという。製品は砂で洗って油を取り除かなくてはならなかった。バイト（削る道具）の研磨も自分でやらなくてはならなかった。

浪江高女の学徒は、適性検査によって製図（墨付け）・切断・溶接・旋盤・溶鉱炉などの作業工程に配置された。墨付けは、鉄板の上に原図から墨で製図し、ハンマーの先で図形の細部を彫り刻み、ペンキを塗りその上にもう1度墨付けをするという作業だった。1945年3月の卒業式の頃からは、人間魚雷という小型潜水艦の外板の製図をした。切断は、色付眼鏡をかけて鉄板の上を墨に沿ってガスバーナで切断する仕事で、鉄板の上での作業なので、足を滑らせる危険な作業だ。その上、しゃがんで作業をするので、ズボンがガスの火花で穴だらけになり、その作業服を繕いもせずに着て通すという状況であった。旋盤は、万力台の上で機械を操作してボルトやナットなどの螺子切りをする作業だった。男子工員と変わらない労働であった。溶鉱炉工場での仕事は、直径1メートル以上もあるハンドルを操作して鞆（ふいご）を動かし直径2メートルもある溶鉱炉を燃やし厚さ5センチ、2畳ほどの大きさの鉄板を船底型に加工する仕事であった。肺活量も腕力もいる重労働であった。

保土ヶ谷化学郡山工場に出動した白河高等女学校について『卯月―勤労働員の記録―』から整理する。安積中学校については、『郡山戦災史』所収「市民の手記」による。白河高等女学校3年生は、紺のモンペズボン、素足に下駄で入所し閲兵分列行進に臨んだ。後にカーキ色の上衣とズボンに活性炭を入れた防毒マスクをつけ、ズックか焼印を押した膝までの長靴を履いた。それに日の丸鉢巻を締めた。工材倉庫、岩塩関係（掻き入れ・粉碎）、電解615（苛性ソーダ製造）、616、618（黄色い石鹼のようなアングルと呼ばれる絶縁体）、塗装、ドラム缶、トロッコ押し、工事現場、活用、エチル鉛関係、KVB、第3課PY（PR、PN）、消毒液補充、検針、製品液分析、研究所、会計などの職場に数人ずつ配置された。

工材倉庫は4人、618は、ナフタリンと塩酸を混合してアングルを加工したり、その箱詰め、またトロッコでの白炭の運搬。電解615は8名、PNは白女のみ10名だった。615と616は、塩素酸ソーダの製造工場で、そこで岩塩をスコップでベルトコンベアーに載せる作業。ドラム缶は、製品の入ったドラム缶をペンキ塗装し陸・海軍のマークを塗り分け、1人1本ずつ隣の現場へ運ぶ。工事現場は、新設工場の工事。活用は、機械の錆磨きや古い針金の打ち伸ばしなどの作業。消毒液補充係（消毒班）は、1日3回現場のエチル釜に補充する作業。研究所では、大きな反応釜での製品分析をするK12やビーカーやフラスコの洗浄、化学の学習（入所1ヶ月ほど特訓）、それに横浜本社の中央研究所から疎開して来た書籍の貨車からの荷降ろしと搬入など。検針は、製品サンプルをストローで吸い上げ濃度を記入する仕事。

白河高女と同じく保土ヶ谷かぐに出動した安積中学校3年生は、617やK15室に配置された。617は、バーナー室とポンプ室とに分かれていた。バーナー室では、食塩の電解によってできる水素と塩素をバーナーという装置で塩素ガスと合成塩酸を精製し、それをポンプ室のポンプで別の工場に送る作業である。布の作業衣は、塩素ガスでぼろぼろになるため服装はゴム合羽にゴム長靴だった。K15室は、高圧釜のアルコールに硫酸ガスを注入する仕事で、身边には硫酸苛性ソーダが充満していた。一般徴用工と同じく昼夜2交代制であった。

なお、安積中学校4年生が出動した東洋電機戸塚製作所の勤務状況を『安中・安高百年史』によれば、次のようであった。

午前5：00 起床・点呼・洗面・掃除（～6：10）	午後0：30 作業開始
6：20 宿舍出発、工場で朝食	3：00 雑炊（～3：15）
7：30 朝礼、作業開始	5：05 終業、夕食、帰寮、自習
12：00 昼食（～12：30）	10：00 消灯

日本鋼管川崎製鉄所に動員された会津中学校5年生は、鋼管二課の圧延工程に配属された。そこは、真っ赤

に焼けた鋼鉄のインゴットを、口径の大きい圧延ロールから、順次口径の小さいロールにフィードして径2センチ長さ10メートルくらいの棒鋼に仕上げる工程で、かなりの危険を伴った。会津中学校学徒の受持ち工程は、最終の圧延ロールから出てきた棒鋼を鉄の送り棒でストックヤードに転がす作業やロールコンベヤーの上を流れてくる棒鋼を直径2メートルくらい的高速回転丸鋸で、径10～15センチくらいに切断する作業であった。

東京衡機溝ノ口工場の会津中学校3年生は、ハンマー・ヤスリ・タガネ・キシヤゲなどを使う仕事であった。

ジーゼル自動車川崎製造所に動員された石川高等女学校の3、4年生は、機械第1課、組立課、検査課などに配置された。機械課では、旋盤とミーリングを使って自動車のロット作った。組立課では、機械課から送られてきたピストンやロットなどの製品を検査してリングをはめたり組立をしたりした。検査課では、出来上がったロットやネジなどの製品を定規を使って検査した。

相馬中学校3年生が動員された海軍航空技術廠支廠は、京浜急行線の金沢八景駅の裏手にあって、主として飛行機・艦船の火器や爆弾・砲弾などを製造していた。相馬中学校の学徒は、製鋼部の鍛造作業、射撃部の火器組立・検査・試験などに配置され、部署によっては昼夜2交替であった。

日立製作所多賀工場動員の磐城中学校4年生は、國分・桜川・鮎川の各工場に配置された。作業は、航空電波探知機の部品製作加工、組立、製缶工場での検査などに十数名ずつ配置された。

磐城高等女学校4年生が動員された日東工鉱業富久山工場では、黒のスフ地の作業衣を支給され、3学級15班に編成され、原液・製絹・耐火煉瓦・ロックウール・グラスファイバーに配置された。原液は、針葉樹のセルローズから生成されたパルプを、アルカリ処理してビスコース液にする作業、製絹はそのビスコース液を白金のノズルから硫酸の中に噴出させて人造絹糸を製造し、耐火煉瓦は炎熱の下で煉瓦を焼成し、ロックウールは、岩石を高温の溶鉱炉で溶かして防火用石綿板を作り簗に包む作業、グラスファイバーはガラスの塊を溶かして細い繊維状に加工する仕事であった。

田村中学校4年生が動員された横浜ゴム鶴見工場では、

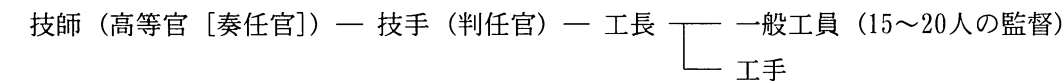
- 午前5時 起床。戸外整列。点呼。海軍体操。並行して部屋・便所・戸外の清掃。
- 洗面。朝食（食堂―食事訓・「箸とらば」）。帰室。
- 6時半 出発準備（ゲートル巻きなど・整列）。行進。職場ごとに集合。
- 午後4時半 作業終了。
- 5時 食堂集合。雑炊給食。入浴。事務所前整列。帰寮行進の途時軍歌並びに学徒動員の歌。
- 着寮点呼。諸注意・反省。
- 7時半 自習。（～8時45分）
- 9時5分 点呼準備（蒲団敷き・廊下整列）。点呼。五省・父母への挨拶。就寝。

（この報告では、昼食やおやつの時間が不明である。）

職場の組織と編成

これについては、成文化されたものを見る機会がなかった。そこで動員日誌、回想文、日記などの断片的な記事を手掛かりに復元してみる。したがって動員工場によっては異なった事例もあることは否定できないが、これによって当時の軍事工場並びに軍需工場の雇用関係などを理解する参考になるであろう。

まず、福島中学校から横須賀海軍工廠に動員され、沼間第2寮の寮長付を体験した塚本利勝の証言によって、その組織を整理すると、つぎのようであった。



また福島高等女学校の菅野照子「ある日の室長」に紹介されている1945年8月17日付鈴木哲治の書簡によれば、鈴木哲治は「鈴哲組長」兼「組立工場工手」であった。このことから工手は組長として組員を指導・監督する立場にあったことが分る。福島高等女学校の回想文集『敷島の海いまなお藍く』や保原高等女学校の座談会記録には、こうした組編成の実態が証言されている。例えば、浅羽組、森田組―鑄造工場、中村組、鈴哲組―組立工場、第三工場金子組などである。入所すると、先ず組に振り分けられ、正門近くで作業服を受取り作業

服に組の印をおす。こうして例えば、次のように編成された。

材料試験班 — 男子工員 4、長野県的女子挺身隊員 4、学徒 8（湘南女学校 6 名、福島高女 2 名）の 16 名。

整理班 — 宮城県、山形県各 1、静岡県（伊豆）2、神奈川県、福島県各 1、学徒（福島高女）4 の 10 名。

これをみると、工員（徴用工員を含む）・挺身隊員・学徒を混成して 10～20 名で編成したようである。浪江高女の墨つけは、第 1 船殻といって船舶の外側えの墨付け作業で、25 人が配置され、それを 5 人とか 2、3 人とかに分かれて作業した。保土ヶ谷化学の場合も工員と女子挺身隊員と学徒（中学・商業・高女）が 10 名程に混成で編成された。学徒は白河高女だけ 10 名という職場もあった。

日立製作所多賀工場の場合も工員、徴用工、女子挺身隊員、学徒（第 1 高等学校・弘前高等学校・多賀工業専門学校・磐城中学校・田村中学校）が混成された。

この場合、工員及び挺身隊員とは雇用関係があったが、学徒とは雇用関係がなかったという事実が、同じく海軍工廠に動員された坂下高等女学校の高松慶子の請求資料によって明らかになった。このことは、厚生年金の受給という今日的問題を含み、2008 年 2 月 22 日付朝日新聞朝刊が報じた「戦中年金加入確認申請」に関わる問題を遺すことにもなった。こうした雇用関係からこの組は、当時一般に行なわれていた労務者供給の下請けの組の慣行をベースに熟練した正規雇用の工員を若干名配置・編成したのではないかと考えられる。

日本鋼管川崎製鉄所の鋼管二課圧延工程は、次のような編成であった。

職長 — 班長 — 伍長 —

— 熟練工（少数）・徴用工（若干）・朝鮮の少年・英米人の捕虜・学徒（大学生・中学生）

田村中学校 4 年生が動員された横浜ゴム鶴見工場の状況を 1944 年 1 月発行の松風寮「鶴見新聞」第 2 号掲載の工場勤労担当の和田礼儀が保護者宛てに書いた報告書から紹介しよう。

課 — 班（班長は学徒） — 班員（学徒）

精煉課 — 混合班 — 班長外 11 名。 圧延班 — 班長外 3 名。 配合①班 — 班長外 1 名。

配合②班 — 班長外 1 名。

タイヤ課 — 蒸熱①班 — 班長外 4 名。 蒸熱②班 — 班長外 3 名。 チューブ切断係班 — 班員 1 名。

成型係班 — 班長外 2 名。 ウォーターバック班 — 班員 1 名。 材料班 — 班員 4 名。

第一工業用品課 — スポンジ係班 — 雨沢課長・班長外 3 名。布巻ホース班（原料係） — 班長外 1 名。

編上ホース班 — 班長外 1 名。

第二工業用品課 — 防震ゴム係班 — 班長外 1 名。電槽係班 — 班長外 2 名。 V ベルト班 — 班長外 2 名。

加工課 — 内翼タンク係班 — 班長外 2 名。外翼タンク係班 — 班長外 3 名。

胴体タンク係班 — 班長外 1 名。

検査課 — 班長外 2 名。

原倉課 — 班長外 2 名。

工員配置との関係は明らかではない。配合①班は、硫黄華・石灰・亜鉛華等の中で真黒になり真白になり真黄色になりして作業するという。またチューブ切断係班の堤義明は、次のような創作小話「ネズミの歌」を載せている。

A 「いやに近頃相棒が死ぬね。これじゃ夜襲もおじゃんだ」

B 「しかたがないさ。胃袋をおおきくしたから死素（砒素）がつきまとったのさ」

危険な原材料や薬品と同居して作業に従事している。

技術研修

新入所者に対する技術研修は、どこの動員先でも行なったであろうが、必ずしも記録されていない。また聞き取りの中でも印象が薄いのか明確ではない。あるいは、工員の不足から熟練工を一定期間新入所者の研修に当てることが困難なために現場において課・係・班などの職域単位で随時手ほどきしたとも考えられる。そこでここでは一定期間まとまった研修を実施した二、三の事例を紹介する。

会津中学校生が動員された東京衡機溝ノ口工場では、

- 10月22日 基本作業の練習。機械の名称をきく。
- 10月23日 基本作業の練習。ハンマーの使い方、ヤスリのかけ方、キシヤゲの使用法。
- 10月25日 基本作業の練習。ハンマーの練習、タガネの打ち方。
- 10月26日 基本作業の応用。ハンマー・タガネ・キシヤゲの応用。製造部長の工業上の説明。
- 10月27日 基本作業の応用。ヤスリの使用、六尺旋盤の仕上げ。
- 10月28日 基本作業の応用。四尺旋盤の摺り合わせ。工場にて危険なる機械をいたずらしないこと、集合を敏速に行うことなどの注意。
- 10月31日 基本作業の応用。
- 11月2日 キシヤゲの柄作り。
- 11月3日 旋盤の仕上げ。
- 11月4日 基本作業。

このように基本作業の練習と応用に7～10日間ぐらい当てられていた。基本作業の練習、例えば、タガネの打ち方とハンマーの使い方では、目隠しをして左手に持ったタガネの頭を右手に持ったハンマーで打つ練習から始まる。打ち損じて左手の親指を打って血が吹き出す。しかし号令が掛かっている間は止められない。それで全員左手に包帯を巻きながら訓練をした。旋盤・バイトを扱う作業や製図・墨付け・切断・溶接などの作業、塩素・苛性ソーダ・硫酸などを扱う作業の工程では、とくに促成で工員を養成するのは困難であった。そのため負傷者・病人・オシャカ(不良製品)が増加することになった。テキストないしマニュアルも組に1冊しか配布されないという状態であったから、東京兵機に動員された保原高女生の場合は、個人的に組長から教本を借りて帰寮後、自習したという。棚倉高等女学校の女子挺身隊が出動した横河電機では、はじめ三鷹の本社(吉祥寺工場)で1か月ほど研修を受けて新設された藤沢の辻堂工場へ配置転換されたという。

保土ヶ谷化学郡山工場に動員された安積中学校5年生影山登の「動員直後の講義より」(『ターゲットナンバー2025』所収)から研修の内容を紹介する。彼の手許には1944年10月21日に工場から配布されたノートがある。動員後、約半日にわたって、社史や工場製品に関する知識の他に皇国産業人としての覚悟や心得を微に入り細に渡って精神教育された。

○会社工場の歴史と現況

◇保土ヶ谷化学の分工場 ― 保土ヶ谷(ホスゲン)、鶴見、矢向、川崎、横須賀、大島(サッカリン)
 王子、豊島、中川、郡山(最大、軍需品など)、日出、富山、小名浜(臭素)
 建設中(佐伯、白河)

- 郡山工場の立地
- 陸海軍監理工場 ― 厚生省重要事業場指定、軍用物資秘密保護法、軍機保護法の適用
- 軍需会社法の適用(監理官＝陸軍中佐、海軍大佐)

○綱領・守則等について

- 産業報国会綱領
- 第一課勤務五則
- 塩化エチル作業守則 ― 濃硫酸・苛性曹達・アルコール・塩酸・塩化亜鉛。
 装置に対する注意。圧に対する注意。

○主要資材について

- 物動計画 ― 当工場の主原料・建設資材

○組織図

○製品について

- 四エチル鉛の合成
- 二臭化エタン

○基礎化学……………平瀬研究部長による基礎化学の講義が約1週間続けられた。

主要資材、組織図、製品については詳細に製品の合成過程を化学式を用いて説明している。

第5節 福利厚生と学徒の生活

1. 労務災害・疾病と医療

作業中の災害や疾病と施療

ベルトコンベア、旋盤、ミーリング、溶接バーナ、切断機、破碎機などの機械や器具を用いての作業は、14～17歳の未経験の少年少女達や引率・指導の教員にとっては、過酷な作業であった。当然予測されたことなのだが、怪我をする学徒が出た。鉄粉・鉄屑で指をいためる者や旋盤・ミーリングで爪や指を負傷する者がかなり出た。

昭和電工広田工場の現場(火薬製造―若松高女、会津工業―)

- 私も、星野さんと喧嘩しましたよ。何回も非国民だっていわれました。重労働させられるんですよ。目を離すと危険な仕事、大きな家ぐらいの櫓、(そこへ上がって竿で)掻き混ぜるんですよ。下煮立ってるんですから。そんな危ない仕事やらせるんですよ。星野さんていう東大でている人だったんですよ。その人とよく喧嘩をしました。工場の主任に言っても分らないんですよ。だから(その人は)総合部長というのですが、工場の事務一切をやってる人なんですけど、そこへ行くんですよ。学校出たばかりの若い人、だから(要望聴いて)巡視するんですよ。
- 仕事の内容は、火薬を作る作業で、鉄製のボールを洗う仕事をしてました。その前にくずれ(?)が入っていたんです。それで、鼻、みんなやられる。鼻がおかしいって言い出してね。そして工場の人達をみたら、マスク掛けてるんですよ。生徒には掛けさせてないんですよ。私怒ってね。引揚げるとね。生徒、こんな病気になるまでね。駄目だって言ったら、次の日に、すごい厚いマスクをみんなに作って持ってきて、先生、今度は大丈夫です、なんていわれました。
- そのボールの中に火薬を入れるのを工業学校の生徒がやっていた。その火は熱いですよ。脇の箆に塩を入れて置いてその塩をなめながらみんな裸でやってたんです。
- 私が当番を交代する前の月に、若女の生徒が1人火薬の中に落ちたんです。次の月に私が当番で行ったらその生徒が私のところに来て、「先生、こうなったの」といって足の傷をみせてくれました。ものすごくひっついちゃってました。「足でよかったな。顔さでもかかったら大変だった。」といった。あの原爆のあれ(ケロイド)と同じでしたよ。
- 私のクラスの子供が、私が小田原(国産電機―若女4年生)に行ってる留守中に殉職したの。日橋第1発電所があってそこが通れるんですよ。男女2人の先生が指導に行くわけでしょ。お互いにどっちか行ってると思って行かなかったの。結局2人とも行かなかったの。その昼休み時間に生徒が3人でそこを通過して落の藁採りに行ったんですよ。帰って来て後ろ見たら1人いなかったんですよ。発電所の水車の廻っているところに落ちたって気づいた。それで工場に走って行って子供が落ちたらしいって知らせた。筏を組んで探したんです。沈んでしまったので、発電所を止めたり動かしたりしたら着物がふわっと上がってきたり靴の片方が上がってきたりして最後に死体が上がってきたの。校長先生から電報が来てびっくりしたの。戦時中に学徒勤労動員で行って死んだからっていうので、工場で殉職にして社葬やってくれたの。お墓から帰ってきて生徒の家に線香立てに行ったの。「さんこう館」という写真館の後の「きんたか」という料理屋の娘で、高橋かめのさんっていったのね。お母さんにね「先生がいなかったのしらなかった」って泣かれちゃって、もう本当にどうしていいのかわからなかった。小田原の方は学年が違って担任でなかったのにねえ。

(1998. 12. 24. 「木村[旧姓稲生]淳子先生に聴く」より抄録)

東北興業福島工場での事故

1945(昭和20)年4月から福島商工学校の3年生は、信夫郡野田村の軍需工場東北興業福島工場に出動した。そこは研磨材生産工場で、原料・粉碎・破碎・仕上げなどの職種に配置された。5月に、破碎機を操作中に武藤徹君が機械に巻き込まれて死亡した。彼の作業服のポケットには煎り豆が入っていたという。武藤少年はひもじさに耐えながら就労し機械に押し潰されて行ったのである。(「若き心」Iより)

海軍工廠の事故

浪江高女生が作業現場で次のような光景を目撃した。女性の指導教員が、巡回してきた。ところが、ギヤーという悲痛な叫び声に振り向くと、幾本ものベルトが猛烈な勢いで廻っている中の1本のベルトに被っていた戦闘帽も吹っ飛んで束ねた髪の毛の曲げが絡み込まれ、巡回中の教員が宙吊りになって振り回されていた。現場指導員がスイッチを切って機械を止めた。教員はドスンと落下し、大事には至らなかった。

池貝鉄工所の事故

型削り盤というのを担当していた学徒の目に金属が刺さるという事故にあった。その学徒は、体のあちこち傷だらけ油だらけであった。

原材料やガスの被曝

1944年12月3日に、猪苗代高等女学校生が動員された日東工鉱業郡山第一工場では二交代制でガラス座布団やガラス繊維で15センチ幅の織布をした。そのためか皮膚病や喘息で帰郷した者が4、5人いた(月岡和子の手記より)。また磐城高等女学校生が動員された日東工鉱業富久山工場の現場では、石綿で肌がチクチク痛み、ガラス繊維は折れ針のような鋭さで肌に刺さりガラスの破片は肌を切り、18%のアルカリ液は容赦なく指を溶かした。こうした危険な重労働の中で、闘病生活13日、急性肺炎での犠牲者を出した。

保土ヶ谷化学郡山工場の現場(K十一安積中学校一)

K十の現場に配属され、四エチル鉛を作るための、クロールエチルを作った。大きな反応釜を与えられ、四人一組で昼夜交代で、働いた。碌な衣服も与えられず、自分の服を着て、濃硫酸、硫酸、水酸化ナトリウムの垂れる中を毎日洗ったり、流したりしていた。

私の父は、鉄道員で郡山駅の運転主任をやっていて病気になり、大越駅長になり、この年(1945年)の1月15日に死亡した。私は四人の女性の中の男一人の家族であった。姉は国民学校の教員をし、私と祖母、母は少しの田畑を小作していた。力仕事は私が中心となってやっていた。本当に貧しい生活であった。

3月15日十時頃、その日は雪やみぞれもなく、2、3日前からの雨も上がり、曇時々晴であった。反応に使う水酸化ナトリウムを運ぶため、ドラム缶を利用したトロッコを押して、私たち四人で、KAの前を通りRTを通り、ターンテーブルを廻して、蒸発室の前にゆき、ホースで液体を入れ始めた。ところが下のコックが開いていたので流れ出してしまった。閉めようとスパナを探したがない。皆であちこち探したら、大きめのスパナがあった。そこで馬場がスパナの隙間に鉄の小片を入れて廻してしめよとしたら、パチンと音がして、鉄の小片がこぼれ、濃水酸化ナトリウム(70~80%位)がバシャンと落ちて並んで見ていた三人の中の私の両眼にバシャーとかかってしまった。ジリーと焼火箸がッささった激しい痛みを感じて「早く水のある所へ、痛い痛い」と言ったので、皆急いで水のある所へ連れて行ってくれた。夢中で洗ったがとても落ちないでズルズルが取れず、何回洗っても痛みは中へ入って行く様に感じ、「医務室へ連れて行け」と皆に頼んだ。激しい痛みで肩にすがって歩くのがやっとで、医務室にきたら、すぐさま弱酸性のぬるま湯で洗い出した。体が痛みでザワザワした。一時間程洗ったが、それでも痛みがひどく、体のザワザワが続き、いたみが中に入っていく感じであると話すとき今泉病院に車で送られ入院した。

入院した時、同室にいたのは、会田長栄君で彼は斜視を直して特幹を受験するために来ていた。(中略) 病院でも火傷が中へ進行しない様、何時間も洗浄を続けてくれたが、痛みは少しも収まらなかつ

た。頭がわれる様に痛み馬鹿になるのではと思った。それから毎日痛み続け、3月25日頃ここでは駄目と考えられたのか、新潟医大の八木博士に診てもらうため列車で連れて行かれた。この間母や姉が交代で看病に来てくれた。影山登君も毎日弁当を届けてくれた。新潟医大についたら狐の様な顔形の名医が、引率の学徒係をけとばし「ばか！なぜもっと早く連れてこんか」とどなった。診察の結果、すぐ様腐食部分を切除する手術と言う事になり、局部麻酔をしたが効かず、全身麻酔で手術した。体を固定され終わった時は立っている様な気持ちであった。麻酔が醒めてからは脳に近いせいか、もの凄い激痛があり、収まるまで一週間かかった。今度も又、馬鹿になったのではないかと思った程痛かった。

入院治療をしている最中、4月12日に保土ヶ谷工場が空襲を受け、工場は全滅し400人以上の人が死に、負傷者多数の話聞き、更に友人や女生徒も多数亡くなったと聞かされた。私は一瞬ハッとした。私が居たら死んでいたであろうし、今生かされている事を強く感じたものである。戦局がひどくなり、術後二週間で退院させられ家に戻った。それからずうっと家に居て農事をしていた。

包帯を取った時、左眼は失明し、右眼は一輪の真赤なチューリップをはっきりと意識した。凄く綺麗だと思った。次に母の顔をみたら自然に涙が出た。母も姉も涙を流し「よかった、よかった」と言ってくれた。(以下略)

(『ターゲット2025』所収、現場K十・椎根英資「学徒動員中片目を失ったあの頃」より)

日東工鋳業富久山工場の犠牲者

磐城高等女学校4年生が動員された日東工鋳業富久山工場では、次のような犠牲者を出した。以下磐城高女第33回生の回想記から転載して紹介する。

重労働の末に(富久山工場耐火煉瓦部)

日東富久山工場耐火煉瓦部に配属された私達の作業は重労働でございました。窯に入れて焼き上げる以前の成型された粘土質の重たい物を腰に乗せてもらって(腕の力では到底運べません)窯場迄運んだり、又窯出しと云って焼き上がった熱い熱い煉瓦を部厚い手袋と部厚い前掛けをかけ運ぶ作業が主でございました。(中略)

そんな或る日、昭和19年11月も半ば頃、同室の篠原寿美子さんが寒い寒い云い乍ら仕事をしておりました。職場の小父さんは「そんなに寒いなら窯にでも入って温りなさい」と云われたので、スミ子さんは窯出し途中の十段位残っておりました、暖かい煉瓦の上に横になって休んでおりました。しばらくして様子を見に行ってみましたら、油汗をたらたら流し乍ら、寒い寒いとわなわな震えておりました。凄く熱なのです。すぐ工場の敷地内にあった日東病院に入院しましたが、容易に熱が下らず、病名も解らないと云う事で、4、5日経ってから郡山市内の太田病院に移されました。その際鍵谷ツヤ子さんと私(丹野とみ子)の二人が看護してあげる事になりました。

寿美子さんを真中にして、川の字に枕を並べ、灯火管制の薄暗い六畳の部屋でツヤ子さんと交代で眠り、氷枕を取り替え、おまるを当てて上げて「早く良くなってねえ」と励まし乍ら一心に看護致しました。けれども寿美子さんの病状はちっとも良ならず、熱は高く続き、又、伝染病かも知れないと、ふらふらの身体を寝台車に乗せて、検査室迄行かれた事が二度、三度ございました。

そのうちうわごと譫言迄云う様になりました。(中略)今思い返すと、寿美子さんは生死の境をさ迷っていたのでしょう。

12月に入って、監督の先生がお母様をお呼びして下さったので、私達は一応工場に帰り作業に着きました。

12月6日昼頃、寿美子さんの危篤の報せを受けて駆けつけましたが間に合いませんでした。午後零時30分寿美子さんは急性肺炎の為、遂に不帰の人となりました。

同室の友はもちろん、夜勤のため休んでいた友も太田病院まで最後のお別れに参りました。

その夜工場の控え室にてお通夜が行なわれ、翌7日午後3時平駅にて在校生に迎えられ、無言の帰宅を致しました。

12月13日午後1時母校にて修練隊葬が行なわれ、私達二人も一旦帰校して参列させていただきました。柴田祐定先生はぼつりとおっしゃいました。「二人共好くやってくれましたね」私達は唯々泣くだけでございました。(以下略)

(『あすの盛りの花まちて』所収、松島(旧姓丹野)とみ子「篠原さんを偲んで」より)

小柄な班が配置された現場は、1380度の大きな窯が三つ並んだ耐火煉瓦課。溶鉱炉を作るためである。黒い煉瓦の原料は、窯の上の二階に運ばれて乾燥され、それを窯の中へ積み重ねて扉を閉じて火入れをし、三日間焼き続ける。原料を二階の乾燥に上げるには、滑車を手で操作して原始的なエレベーター式の機械を作動させる。重い煉瓦を満載しての運転はかなりの労働である。忘れられないのは秀瀬工場長(秀瀬日吉、戦後郡山市長)の九州弁での月頭訓話は、「米軍が上陸したら、皆さんは舌噛み切って死ぬでしょう。その心で生産に励め。」とそしてその一人娘、司嬢の言動は、「磐女生には何故か、小姑的だったっけ」と吉村トシ子は回想している。その同じ現場の篠原寿美子が倒れ、太田病院で亡くなった。

呉羽化学と加里興業の田村中学

呉羽化学と隣接する加里興業に出動した田村中学校3年生の作業現場の様子を学徒の日記などから紹介する。

(呉羽化学)

1944年

- 9月8日 (三春)駅で四年生、二年生に見送られ校長先生の激励のことばをいただいて一同感激して出発、無事到着。
- 9月11日 私は液体塩素の方へまわされた。
- 9月12日 塩化ナフタリンの現場手伝い。塩素ガスがすごくくさい。
- 9月14日 ナフタリン二十三箱リヤカーで運搬。
- 9月20日 塩化カルシュウム液の運搬。酸素ボンベ運搬。
- 9月23日 公休日。みんな下衣、マスク、枕カバー等の洗濯。
- 9月27日 陶器管の塩素もれの検出作業。
- 9月30日 校長訓話(6箇条中)3. けがをせぬように。
- 10月5日 体重測定、0.6k.へる。かぜをひく。
- 10月6日 晒粉のあたりで廃ガスを食う。ひどい。
- 10月10日 アスファルトで陶器管つなぎ。ガス通し試験、ドレン抜きよりガス噴出、一面黄色くなる。
- 10月12日 硫酸ポンプの分解手伝い。
- 10月14日 アンモニアボンベから始めて機械にアンモニアを入れる。高・低温タンクの塩化カルシュウムの温度・濃度測定。
- 10月15日 陶器のガスもれ調査、修理。

(加里興業)

1944年

- 中学三年の秋、先発隊(1, 2組)のあとを追って私たち(3組)が、錦町の加里工場(現在のクレハ化学勿来工場)へ向けて出発したのが昭和十九年十月十九日。
- 加里石英粗面岩(伊豆半島方面で採取)を粉碎して薬品処理をしたり加熱(60メートルのトンネル式焼成炉)したりして、塩化加里の結晶を抽出するという工程。約40名の級友が作業を分担。製品は、潜水艦の酸素供給器に使われたという。
- (「創立60年記念誌」所収、柳沼晴二「風船爆弾の見える青年前期一生きることにひたむきだった学徒動員一」より抜粋)

1945年

- 1月元旦(月)曇、雪
今日から新しい年を迎ひ(え)た。一層覚悟を新しくして決戦の為増産に邁進しよう。併し今吾は病気静養の為我家に帰ってゐる。それ故早く直して工場へ帰らう。昨日新しく購入したバスを持って病院へ通ふ。元旦なれど病院は休まないのか。
- 1月3日(水)晴
船引駅で降りると今俊一君と菊地君とが列車に乗る所でした。それで孔口炎(口腔炎)と蓄膿

11月1日 廃ガス管掘上げ。
11月4日 乾燥塔よりガスもれがひどい。大修理をする。
11月5日 製品(液体塩素)をボンベに一本ずつつめる。つめ終って管を外すときにとっても臭い。
11月15日 冷凍油がシャフトからもれる。ブスターばらし、組立て。塩素クロベン送り鉛管から液塩へ切換。
11月16日 明日から二交替制となる。
11月17日 二交替で深夜勤務だが、十時から一時半で交替し仮眠。徹夜作業。アンモニアが眼にしみて砂粒でも入った感じ。電灯にかさがかかって見える。ブスターから油がも(れ)る。
11月18日 またガスもれ。ガス予冷器の上部から臭い。
11月30日 朝礼時、本日より夜勤は中止の伝達。
12月1日 現場排気ファン取付け。
1945年
1月4日 塩素ボンベくちていて一本破裂、塩素ガスの海。
2月10日 今夜から液体塩素学徒は夜勤再開。
2月18日 塩素ガスの濃度が低い。
2月27日 昨夜二時頃大きい音がした。電解の脱水が大爆発。事故。乾燥塔はめちゃくちゃ。リングはとび出し、陶器管は吹とんでいてフランジだけが点々と残っている。電槽もぐにやぐにや、天井のスレートが大きく穴があいている。莫大な損害でがっかりした。
特にソーダ類増産期間中のことである。
九時ごろソーダ工場室前に第一製造課員全員整列、工場長・渡辺次長殿よりこれは不可抗力であり増産期間中で無理がたたったといわれた。
3月2日 液塩で脱水をはじめる。
3月4日 VP20° ナッシュポンプの硫酸分離器のブラインパイプに穴があいてガスと硫酸とブラインの混合物が噴出、臭くていられない。ブラインに硫酸が混ったからたまらない、パイプがやぶれる。
3月6日 病気で帰る者が多い、(三春町字)北町

を手術したから少し遅れるかも知れぬと言った。互に手を振りながら別れた。次に合ふ日はいつなるぞ。

正月八日(月)曇、雪

弟の奴一円八十五銭を持って来て、これが十二月分の報酬金ださうだ。確かに星先生が持って来たのだ。矢館先生は暇があったら遊びに来いと言ってゐたさうです。

正月九日(火)晴

いよいよ明日帰る事にしました。いつ迄居てもきりがない。速く帰って働らかふ。今日で病院通ひも終ひだ。さらば郡山の街よ。家に帰ってから帰る用意をした。家と(の)人達と寐るのも今日が終りか、明日の晩は友と枕を並べて眠るのか。

正月十日(水)晴

出発だ、母が忙しい中をいろいろと世話をする。仁子のやつ僕を送ってゆくのだとわざわざ停車場迄来た。今年は五つになったのだ、可愛いやつだ。

呉羽の遠藤良三と一緒にになった。(常磐線)植田駅で降りた所呉羽の女工員の人と遠藤のやつが荷物を持ってくれたので大助かりだった。

正月十一日(木)晴

早速仕事だ。今日は(炭)糟運搬か。

正月十二日(金)晴、風強し

作業は焼鉍粉碎だが僕と俊ちゃんは抽出の糟運びをやった。今日は俺が室日誌の当番だ。

一月十三日(土)晴

今朝は塩素ガスを食って酷いめに合った。今日は一日中糟運びだった。

一月十四日(日)晴

俊ちゃんだけ今日公休だ。抽出班は配合へ応援だ。併し脱水へ一人行く、八人してじゃんけんで決めた。今日は一日中脱水作業だった。脱水は楽だ、なにしろ皆体の弱い奴ばかりやってゐるからなあ。

一月十五日(月)曇

今日は全員公休で平潟・勿来方面へ行軍です。平潟を通り越し大津町迄行って来ました。

一月十六日(火)曇、雪

俊一君が気分が悪いといふ。此頃あまり飯を食はなかったが矢張前々から気分が悪かったで

では一人しか残らない。

3月14日 夜勤、液体塩素二十七ミリ出来る。

3月16日 液体塩素の現場でも今日は防空ごう(壕)掘りをした。

3月18日 相棒の季吉君が休みなので冷凍、脱水室を一人で運転した。午前中は電解ヘガス分析用のアルカリをとりに行ったら休憩室を出た時ガスを食った。アリロンポンプ一号に栓をはめ一号、二号の掃除をし、中のカーボンを全部出してオイルを交換した。

3月19日 近頃帰る者が多くなった。上遠野、野村君ら七名帰宅。

3月21日 家に帰りたし病気になりたくない。

3月24日 敵B29頭上偵察する。

3月25日 日勤は明日から一人になる。交代休で季吉君も家へ帰る。

3月31日 終業式。矢吹教官、学校長、牧野先生、書記さん来社。

4月12日 茨城県大津町へ行軍。B29の空襲にあう。

4月19日 家へ帰る(三回目)、公休四日利用。

4月22日 三春発四時、工場へもどる者十名位いた。

4月23日 高橋、新田君家へ帰る。夜の点呼たった二人。いよいよ引あげか。

5月7日 現場最後の仕事、八十係長さんにあいさつ。夜大広間で現場の方と一緒に茶話会。

5月26日 空襲激しく動員解除、引上げ。

注：太字の箇所は、「50年記念誌」所収、末永正「戦時下の中学生活」により補う。

(液体塩素・末永正「中学三年生、昭和十九年四月より昭和二十年五月までの記録」より抄出)

(注：上記の「記録」は末永正氏が後年同級会用に彼が手許の「日記」から抄出・要約したものと推定される。従って現代仮名遣いで表記されている。)

先生も生徒も倒れた

昭和十六年日米が開戦し、戦況不利の中十九

あろう。

一月十七日(水)曇

俊ちゃんはどうとう欠勤した。自分も病気にならぬやう気をつけねばならぬ。今日の作業は昨日と引きつづき掃除である。どうも仕事がないとストウブにあたっている時の方が多い。仕事はあまる程あった方がよいと思ふ。

一月十九日(金)晴

今日の作業は石炭ガラ運搬、風が強いので粉が顔に吹きつけて顔が真黒けた。

一月二十日(土)晴

作業は焼鉱粉碎、併しコンデイショナアのモーターが焼けたので粉がバケットコンベアのまゝ一杯だ。僕はハンコンベアへ焼鉱をのせる仕事をした。

一月二十六日(金)晴

今日は全部一緒にて石炭運搬をやりました。午後四時から初荷の式を挙行されました。そして折箱(赤飯の)を一ケずつ貰いました。夕食も赤飯でした。いよいよ僕達が汗と泥にまみれて製造した塩化加里が出陣しました。感慨無量です。

二月三日(土)晴、大風

午後二時呉羽の講堂で種痘をしました。大人の人も小人も誰でもしました。今日は節分です。舎監の先生が豆をまきました。「毛唐の眼目ふつとばせ」と。

二月九日(金)晴

抽出ノ乙班ノ第三班は受験三名、病気二名で乙班は我が第五班五名のみ。

二月十三日(火)晴

夜中と今日は営繕の鈴木大工さんのてこをした。第一の粉碎現場に新しくココカルボールミルをすえつける為にセンメンを台にする型を作る為にだ。ボールミルを(が)すごい音をたてて廻るので大工さんの言っている言葉が一向わからぬ。

二月十四日(水)晴

今日も営繕応援だが僕のやうな鈍感にはとてもわからぬ。それで午後は武田正志君に変わって(代わって)貰って午後はガラ捨てをした。糟運搬をするのに線路を引くのだ。それで今日は全部線路運搬についた。

年中学校も勤労働員されました。男手が戦争にいった農家の手伝い、日立工場(五年生)、横浜工場(四年生)、呉羽化学錦工場、カリ工場(三年生)などに動員されました。私はまだ小さい生徒に付き添って錦工場へ行き工場の生活を共にしました。出発の日、親さんたちが駅に見送りに来てくださり、本当に心配そうでした。生徒たちと工場内の寮に入り、粗末な朝昼夕食を大食堂で工員と共にし、風呂も一緒、夜の点呼があり、その後疲労で寝込んでしまう子が多く、勉強する余裕は余りありませんでした。勤労働員も厳しくなり夜勤もするようになりました。夜勤のみまわりに行くともしろやふとんにわが子のように休ませている工員のかたたちの情けに感動しました。工場で発生する塩素ガスを吸って生徒も、夜見まわりの私も倒れたこともあり苦労しました。郡山大空襲のあと錦工場も被爆、これ以上は危険と生徒たちは自宅へ戻りました。

(「同窓会だより」No. 27所収、伴野 恒先生「私の中学校」より抜粋)

加里興業の思い出

(青山) 一足遅れて呉羽の隣の加里興業と言う小さな工場に動員されたが、労働条件は呉羽と比較にならぬほど酷かった。仕事は全てが原始的で肉体労働の思い出など……

(青山) 夜勤があつて夜中の仮眠の前に渡された一杯のすいとんの味は、本当にうまくて忘れられない。

(横山) 夜勤といえば、明け方四時頃が一番辛かった。仮眠の時ボイラーの脇でムシロを敷いて友と重なりあつて寒さに耐え、ゴロ寝した姿は戦後の浮浪児そのものだった。

(「創立60年記念誌」所収、横山昭治「学徒動員のころ」より抜粋)

二月十五日(木)晴

作業は線路作り。午後四時より広場で郷(皇)軍と一緒に特攻訓練を行ふ。訓練の種類は勅語奉(捧)読・敬禮・銃剣術。銃剣術は竹槍で元氣に行つた。

二月十六日(金)晴

午前九時頃警戒警報発令さる。次いで空襲警報。吾等は壕に退避(避)せり。今日はセメントの歴史。講義中再び空襲警報、講義は直ちに止めた。作業中海上辺か十五機の飛行機が飛んだ。

二月十七日(土)晴

今朝の新聞を読むと昨日飛んだ敵機はグラマンの艦載機だそうです。今日も警戒警報発令。

二月十九日(日)晴

久しぶりに抽出の作業です。ブロックが五つでました。ショウクラッシャがこはれてゐるので人工粉碎です。頑張つて午前中に運び終つた、が併しコンデイショナーがこはれてゐる為粉にしかけただけです。作業中に手にけがをした。人さし指と中指をすりむいただけですが、水野さんが工務室や事務所にかけに行きマキロやはうたいを貰つて来てしばつてくれました。水野さんは本当に母親のやうに親切です。

二月二十日(火)晴

昨日液を出さなかつた為糟出ず、それで今日は線路修理です。とっても寒い。やうやく鉄橋の所に釘を打つた。

二月二十一日(水)晴、曇

作業は焼鉱粉碎、頑張つて一時半頃に終つて仕舞つた。午後から大変寒くなつてきて(特攻)訓練をする頃は冷たい風が吹いてゐる。油座さんに大変しばられながら寒い訓練は終つた。手はきかなくなつてしまつたが、顔は少し温かつた。

二月二十二日(木)雪

作業は糟運搬、始(初)めて線路を使用した。桑野も欠勤したので乙班はたった五人、全部長靴をはいて皆スコップを持って作業せり。九時頃配合で座談会あり。工場長と係長と濱島さんの三名が工場側代表となつて吾等の質問に応じられた。その答によると大変工場側も困つてゐるらしい。

二月二十三日(金)晴

暫く焼成からブロックが出てこないでとう
分の間は雑作業で隙がある。

二月二十四日(土)晴、寒し

今日も昨日と引続き場内整理、昨日余った糟
も運搬した。午後から高架鉄道の線路修理。佐
久間俊一君が全快した。病気は過労ださうだ。

二月二十八日(水)晴

昨夜一班の室で矢吹先生に色々の事を話しま
したが、今日その事を工場側へ談判しました。

三月十日(土)晴

この日午前一時半頃寢床にあって警戒警報を
聞く。すると間もなく飛行機のエンジンの音、
飛行機がゆき去った後空襲警報がなった。今日
は陸軍記念日この栄ある日の午前二時ごろ吾は
防空壕で過したので始めてB29の爆音を聞いた
のでした。平に焼夷弾が落ち約三百戸焼けたさ
うです。僕が二月五日に試験(甲種予科練)に行っ
た所(公会堂)の近くで平工は全焼したさうです。

三月十九日(月)晴

今朝から耳がづきづき痛む、飯を食ふ時には
とても痛くて飯など食はれない位だ。昼休呉羽
の診療所に行って見て貰った所中耳炎と判明せ
り。

三月二十二日(木)雨、曇

三時半より修練隊室にて健康診断を行ひ吾班
の菊池一郎君が左肺門淋巴腺と診断された。

三月二十四日(土)晴

一昨日の診察で菊池君が今病をはっきり知る
為植田に行って診断して貰った所左肺浸潤(滲)
と決定した。衛生部長も病気になっては大(台)
なしだ。

三月三十一日(金)晴

午後四時より呉羽の講堂にて修了式を举行。

(注：原本コピーより抄出したので、旧仮名遣い
になっている。)

(箱崎一平「昭和二十年より」[1月元旦～4月
1日]より抄出)

呉羽化学(錦工場)と隣接する加里興業(現在の呉羽化学勿来工場)は動員割当段階から問題があって、平商業
が保護者の反対で動員を拒否し、そこへ田村中学が動員されたという事情があったことはすでに述べた。呉羽
化学は相模海軍工廠が同居し、液体塩素・ジニトロクロルベンゼン・カーリット爆薬などを製造し、宮城県船
岡町(現柴田町船岡)の第一海軍火薬廠に納入していた。そのため勤務環境は非常に悪く健康を害し、「疾病」

により欠勤するか、あるいは受験による「公休」をとる学徒が増加した。ガスの吸引あるいは原始的な重労働による疾病や怪我によるばかりでなく二交替夜勤制がとられ、過労による体力の減耗もあった。

日立製作所多賀工場の磐城中と田村中

- (磐城中学校4年生が動員された多賀)工場では上司や工員の顔色を伺いながらも幾分作業にも慣れ、周囲の状況も少し判りかけた或る日、隣接のミーリング機械で作業中の遠藤政雄君が事もあろうに指を切断する事故に遭い忽ち大騒ぎになった。急きょ病院直行の為工員に支えられた遠藤君を私と級友の何人かが後押しするような格好で病院までのかなりの道程を歩いたことがあった。大人の工員でもショックで倒れてしまうことが多いのだそうだが、彼の場合は三本も切断しながらタオルで指を押さえ弱音の一言ももらさず歩き通した彼の気丈な行動には随行した流石の古参工員も一様に口を揃えて感嘆、青褪め震えっ放しだったのはお伴をした吾々の方であったのが思い出されてならない。(磐中四十六回卒『学徒動員の記』所収、四家 剛「多賀工場の思い出」)
- 多賀工場に動員された田村中学校5年生の一人が事故死したことは同期生の証言や磐城中学校46回卒業生の前掲『学徒動員の記』によって断片的に伝えられてはいたが、その詳細は不明であった。同期生の記憶を手掛かりに出身地の後輩知友の協力によって凡その状況が確認されたので、以下に紹介し故人の冥福を祈りたい。

1944年8月8日に多賀工場に動員された田村中学校5年生の中で工具課に配属された学徒達は、10月16日、何時もの夜勤が終った。仲村 鈞(ひとし)君は、まだ作業が終らない仲間より一足先に退勤した。常磐線の踏切を渡って国道に出て上り方面にしばらく歩いてもう一度踏切を渡ると学徒の宿舍大沼寮に達する。学徒達は、何時も近道して常磐線の線路伝いというか線路上を歩いて通っていた。その晩、仲村君は何時ものように線路上を歩いていた。今となっては上り列車か下り列車か確認する術はないが、その途中で、列車にはねられて、左脚を切断され、河原子病院に運ばれたが、出血多量で、翌17日午前1時に息を引取った。10月22日、工場で、緒方政次学校長や西 栄介工場長臨席のもとしめやかに修練隊葬が営まれた。そして家族が、行器(ほかい)に詰めて背負ってきた栗飯が動員学徒皆に振舞われた。彼は、小野新町の材木店の三男であった。長兄は、横浜の工科の専門学校を出て中島飛行機に勤め、志願して海軍の予備学生となったが、戦病死した。次兄は、日本大学工科の専門部から第二海軍航空学校の予備学生(整備兵)を志願し潜水艦「海龍」に搭乗する予定であった。弟の葬儀には参列できなかった。三人の息子の二人まで戦争で失った両親の悲嘆は如何ばかりであったろうか。越えて1952(昭和27)年に、国家総動員法により準軍属扱いとなり、茨城県からの連絡を受けて申請したという。工場長の弔辞などは申請書類に添付したので、今手許には、厚生大臣宛の履歴書(写)しか残っていないという。その後、無事復員した次兄が家業を継ぎ位牌を守り、墓地改葬の際に弟の骨壺に田村中学校の徽章を納めたそうである。(河野信三、清水昭平、矢内義亮、仲村 魁聞書き・遺族の所在確認は蓬田良夫)

出勤状況

次に出勤状況を各校の動員日誌などから抄出して参考にする。まず横須賀海軍工廠動員の白河中学校3年生の出勤率を1945年8月2日付の「保護者通信」第3報から掲出する。

月別出勤率

年 月	44 10	11	12	45 1	2	3	4	5	6 上旬	6 中旬	6 下旬	7 上旬	7 中旬	7 下旬
出勤率(%)	99	99	99	99	96	88	98	98	95	92	78	74	76	82

報告の冒頭には、「謹啓 今や肇国以来未だ曾て体験したことのない酷薄な試練に直面いたしました。昨年十月故郷を出づる時と唯今とを比較いたし^{うた}転感慨無量であります。」と述べ、出勤率表に続けて「前表より御賢察の通り」六月下旬より七月上旬にかけ欠勤者続出したし甚だ遺憾に存じます。」と述べている。8月1日現在の欠勤者数と事由は、呼吸器関係疾患：13名、足痛：2名、神経衰弱1名の合計16名であった。また出勤率が出勤以来最低となった7月6日の状況は、

欠勤の事由	私傷病者	帰農者 (休業)	自己の都合	受験生 (公休)	欠勤合計	出勤率 (75名)(%)
欠勤者数	26	15	9	2	52	69

なお1944年12月の第1報に「出勤に対する生徒の心構へ」として「欠勤は利敵行為である。殊に私病による欠勤は[字明]天皇陛下に対し奉って不忠の行為である。工場内での怪我其の他の事故の為めの場合は工場では出来るだけ懇切丁寧に而も欠勤しても出勤同様に取扱い、或は休養を與へてゐます。」と述べている。

疾病と医療

白河中学校の「保護者通信」第1報には、「医療設備」として医療設備と医療及び作業現場での主な疾病を上げている。それによると「工場に於ていての病気・怪我」は「公症として医療費全部を負担してくれます。」「私病の場合」は「海軍共済病院」で「無料或は極めて低廉に治療します。」と述べ、其の段階での主な疾病数を掲げている。

公症・私症	公 症		私 症	
病 名	薬 物 性 皮 膚 炎 (カ ブ レ)	荷造・荷物運搬等による手足の負傷者	伝 染 病 (猩 紅 熱)	不注意による怪我 (撓骨・尺骨骨折)
休業者数	16	3	1	1

(注)：其の他下痢・風邪等は省略。

先に紹介した1945年8月2日付の白河中学校の「保護者通信」第3報の前後の余白には、家庭に宛てた学徒(金沢弘喜氏)の次のような通信文が記されている。

[磨耗し判読不能]した天候も回復して非常に暑くなってまいりましたね。小生帰寮してから腸チブスの注射をして三日休んだ事はお知らせしておきましたが、あれから又、腹をこわしてしまい二日ばかり寝てしまいました。そして先生や室の者に迷わくをかけてしまいました。体を大切にしているのではありませんが、なぜか弱くて我ながら困ってしまいますよ。[判読不能]曜迄は行って来ようと考えております。今度はふんどしや白米等持って来ていただければと考えます。鈴木理夫君は気管支炎で八月の半ば頃でなければ帰寮しないらしいです。淳文達は試験も終った事でせう。成績はいかがでした。良い成績を取る事を望んでいます。一年の一学期は中学生としての初めてのものですからね。手紙を出す時切手がなくて困ります故、送っていただけないでせうか。先生の方へは病気の時世話になった事の礼状をだしておっていただきたいのですが。[判読不能]わかりました。わかっていたら大至急[一字不明]知らせていただけないでせうか。上級進学事お父様と話したい事があります故。未だわからない時は小太郎さんの所の住所でも良いです。手紙を出して見ようと考えておりますから。本日の新聞にて東白川郡の某村にもB29(?)による火災がおきたとの事、家の方はいかがですか。

ますます暑くなります折、ご自愛の程を。
 弘喜拝

(なお第3報に掲載の学徒の詠歌・短文から金沢君の作品を紹介しよう。)

黄色い手 黄色い足 九ヶ月の 勤労に 汚れし 吾手吾足 貴くもあるか
 金澤弘喜

こうした学徒の朴訥な通信文を読むと、15、6歳の多感で悩み多い少年の切ない気持ちが伝わってくる。そして公式の「家庭通信」には記されていない様々な出来事が見えてくる。猩紅熱以外にも腸チブスなどの伝染病にも罹患するものがあつたし、肺炎や肺浸滲の他にも気管支炎などにかかるものがあつたことが分かる。彼の短文にある黄色い手足は、勤労によって遅しくなったからであろうか、と私は少々疑問に思う。食糧事情が悪かつた当時カボチャ(南瓜)やさつまいもなどばかり食べていて食物の色素が残留したために皮膚が黄色くなっ

たのではないかと、もっと深刻に取れば、胆嚢や肝臓を傷めて黄疸症状を起していたのではないかと考えられる。

話題が先走ってしまったが、戦争あるいは勤労働員終末期の資材・人員不足や空襲とその被害に危険などによる生産の停滞などについては、項をあらためて詳述することにする。

2. 食糧・食事・栄養不良・食中毒・伝染病・医療

当時の食糧事情

すでに1939(昭和14)年11月6日に、農林省は、米穀配給統制応急措置令(省令)を公布して、米穀の強制買上げを実施し、食糧の確保を目指した。また2旬後の11月25日には、勅令をもって米穀搗精制限令を公布し、搗精の歩合については、農林省令をもって7分搗以下とし、12月1日から施行した。さらに1940年10月24日には、農林省令をもって米穀管理規則を公布し、11月1日から町村別割当供出制を実施した。他方、米穀の供給体制については、1939年4月12日に、米穀配給統制法を公布し、米穀市場の統一を日本米穀株式会社一社に絞り米穀商を許可制とし、同年8月25日には、米価抑制のために米穀配給統制法第4条を発動し、販売価格の上限を1石38円(1俵=15円20銭、1kg=25銭)に制限し翌日から実施した。これらを踏まえて1941年4月1日から6大都市で、米穀の配給(米穀配給通帳制・外食券制)が開始され、同年中に全国に拡大実施された。1日の配給量と外食券の制限は2合3勺(345g、岩波『日本史辞典』では、330g。)であった。これに先立つ1940年7月15日に、小麦配給統制規則(農林省令)を公布し、同年10月4日には、砂糖・マッチ配給統制規則(商工省令)を公布し、11月1日から切符制を全国で実施した。1941年5月8日には毎月2回の「肉なし日」(肉屋・食堂の肉不売)が設定された。1942年の春には、東京のそば屋に、そばの代用として「はるさめ」や「海藻めん」が登場し、同年9月には、全国ソース工業組合連盟が、マヨネーズなどの製造を中止した。またこの年には、乾燥鶏卵や乾燥バナナが配給された。1943年1月には、戦時代用食「芋パン」が登場した。

横須賀海軍工廠の食糧事情

農業が主力の福島の学徒たちは、こうした厳しい食糧事情下の東京や神奈川の工場へ動員されたのである。1日2合3勺はおよそ丼一杯、育ち盛り、働き盛りともなれば、1日の配給量は1食で消えてしまうであろう。横須賀海軍工廠動員の白河中学校の「家庭通信」第1報には、次のように伝えています。

◆食 事 朝、昼、夕三食とも第五寄宿舍の^{ほうすい}炊で調理したものを食べて居ります。昼食は特に第五寄宿舍より取りよせます。内容は主食は米、それに小麦、豆、甘藷等がはいります。甘藷は美味です。カロリーも相当あり、蛋白質、脂肪等も十分です。量も神奈川県^の重労働者への配給量よりも遥かに多い筈です(白河の配給量よりも多い)

◆配 給 此処に来てははや六回位菓子^の配給がありました。一回二十銭、餡入りの大福やキナコのネリカリント、パン等々、生徒をよろこばせております。但し欠勤者には配給停止。明治節にはお汁粉・林檎二ケの配給もありました。

◆面会及食糧等の搬入に就いて 東京迄生徒を呼び出して面会し、食物を食べ過ぎ翌日病氣した例もあります。原則として寮に食物を搬入することは許されてゐませんが杓子定規にするのも可愛さうです。黙認していただいてゐます。面会の際の贈物・小包等で送られるときは次の品等は適当でせう。

乾いも・乾ぐり・餅(餡入りは、其の場で食べる位、腐り易い)・乾柿・果物類・漬物・キナコ・フリカケ・味噌・醤油・生大根(オロシとして食べる)

野菜はこの室は割合多く配給されますが生野菜、漬物は少ないです。生野菜が食べたいです(寄生虫や伝染病の虞ないもので)。魚類、[印刷不鮮明]するものは一切駄目、鯀等送られた方もありますが炊炊で煮てくれません。

1945年8月の「第3報」では、次のように報告している。

◆加 配 米 御存知の通り主要食糧一割減となり(当地は8月11日より実施になります)、それ故、労働の軽重に応じ工場に出勤せる日、出勤せる者に対して一日当り次の割合で加配米を支給されます。

甲 六〇瓦券 三枚 重労働するもの 過半これになります (注：瓦＝グラム)

乙 六〇瓦券 一枚 軽業するもの

唯今加配米を給せられ満腹しております。

主要食糧一割減が8月11日から実施と報じているが、健康状態(体重増減表)では、

測定日	10月7日	11月28日	1月10日	2月10日	4月28日	6月26日	7月26日
平均体重	51.2キロ	測定セズ	55キロ	56.5キロ	56.7キロ	53キロ	53キロ

と4月をピークに体重が減少傾向をみせている。これは、食糧事情の悪化、疲労の蓄積、疾病による欠勤者の増加などを反映した数値であろう。この報告では、食糧事情の悪化がさほど深刻なものとは報告されていないが、上のデータからかなり悪化していたことが推測される。そればかりではなく、入所の当初から食糧事情は良くなかった。そうした食糧事情の悪化の状況は学徒の証言によれば、およそ次のようなものであった。

◆寮に着いた夜、大きな簀に、ふかしたさつまいもが出されました。汽車の中で心づくしのおべんとうを食べ、お腹も満ち足りていた私達は、少しつまんだ程度で残りを配膳室へ返しに行きました。私達は沼間寮第七棟。他の棟には既に各地から動員された女子挺身隊の人達が住んでおりました。私達はその簀を置くやいなや、挺身隊の人の「残ったのですか？」と云う言葉と同時に、あっと言う間にもう無くなってしまったのです。………二三日たつと、親達の心づくしの食物も無くなり、主食のさつま芋を残す人は、誰一人いなくなり、いよいよ本格的な寮での生活が始まりました。

(再掲、伊関幸子「兄は田浦に、私は逗子に」、「敷島の海いまなお藍く」所収)

◆昼休み、冬の日には、二、三人連れ立って海辺の日溜りでお喋り、(中略)夕食当番さんが食缶を受け取って来ていよいよ夕食。さつまいも入り、コーリャン入りご飯のご馳走でした。

(泉清子「燻っていた私の心は、四十年にしていきいきした」、前掲「敷島の」所収)

◆昭和二十年八月十七日か十八日かの頃の事です。終戦の報も聞き寮の部屋の中で一日も早く家へ帰りたい帰りたいと念じて居りました。先生のお話しによれば帰る事は出来るけど荷物は自分の持てるものだけを持って布団類は持って帰れないからまとめて置く様にとの話しでした。私達四人は寮の部屋の中でぼんやりと空腹をこらえながら窓の外を眺めていた時、裏山の畠の方から農家のお婆さんが、きゅうりを簀に入れて寮の窓の脇を通るのを見たたん、N子さんは、急にお婆さんと呼び止めて、「お婆さん布団と簀の中のきゅうりを交換しないか？」と言い出しました。私達が止めるのも聞かず(本当は私達も食べたかったのですが)、取り換えてしまいました。今考えて見ると決して品質のいいものでなく、へぼに近いものでした。つける塩とか味噌があるわけじゃなし、ポリポリと夢中で食べたのを忘れる事が出来ません。

(簀ミイ「布団がきゅうりに化けた話」、前掲「敷島の」所収)

◆海軍工廠購買部は、松が浜の方に向かって小高いところにあった。水を通さない紙風呂敷とか、黒い皮のベルト、あしだのつま皮など、使うあてのないものを、何となく、皆が買うから買った。はがきとか、あめもよく買った。はがきは毎日のように書いた。

「今日も空襲があったけど無事でした。」

「おなかすいて仕方ありません。食料を送って下さい。」(M) (前掲「敷島の」編集部カコミ)

◆食糧といえば、コウリャンめしは良い方で、鼻をつくようなくさい豆かす御飯、塩味のきいた、しょっぱい大福が配給になったこともありました。 (尾形タケ「あれから四十年」、前掲「敷島の」所収)

白河中学校の「家庭通信」には記されていない海軍工廠の食糧事情が、リアルに描かれている。豆粕というのは、今日の食生活からは想像も出来ないことで、園芸肥料の油粕を連想するしかない。それは、福島中学校4年生だった塚本利勝の記憶によると、満州から移入された飼料用の自動車のタイヤ位の大きさのドーナツ状のもので、それをハンマーで打ち砕いて調理するのだという。彼の記憶では、主食は、七分搗の米に大豆粕を混ぜた飯であった。さつまいもも出た。キナコ(大豆を炒って粉にしたもの＝黄な粉)を練って捻った菓子、豆を砂糖まぶしにしたものなどが配給になった(99年10月19日、聞書)。

飢餓と疾病と医療事情

また白河中学校の4年生だった鈴木弘明の記憶には、体格の良いクラスメートが、空腹に耐え切れず煮炊所(調理場)の流しから流れ落ちる残飯を手のひらに掬って食べている姿が鮮明に残っているという。食糧不足には、公私ともに家庭や地域の応援を求めた。白河中学校の「家庭通信」にも食糧の補給・搬入を求める記事がみえる。食糧不足と暖房のない寮の寒さは栄養不良や消化不良を引き起こし、脚気や下痢症状になる。

◆炒り豆と米(炒り米か焼米)を混ぜたものを家から送って貰って食べた。

(99年10月19日、塚本利勝聞書)

◆第二宿舍(福島中学校、後第六に移動)の息子に届けてくれと頼まれて赤飯を届けに行ったことがある。

(09年6月19日、獅子の会「学徒動員60年の集い」聞書)

◆今ならPTA、横須賀に子どもを出している保護者たちが集って子ども達に食糧を送ろうと話し合った。

冬のことだった。H地区M子さんのお母さんは、雪の中、八キロ歩いて、集めて歩いた。次の家は快く出してくれるだろうか。趣旨を話して相手の顔を見るまで不安だった。Sさんの家は農家でもなかったのに、米、味噌、豆など、各種出してくれた。かじかんた手も温まる思いだったという。こうして集められた食糧は、ひとまとめにして寮に送られた。私たちがどのようにしてそれをいただいたのか、思い出せる人はいない。とにかく親たちがどれほど苦しい思いをして食糧を送ってくださったか、親になった今、思うことである。

(前掲「敷島の」所収、編集部カコミ記事「保護者会が食糧集め」)

◆日増しに豆粕、高粱の量もふえ、栄養失調気味の下痢、中毒症状の者の手当に途方にくれ、…………。

(前掲「敷島の」所収、山崎治子「偲ぶぐさ」)

◆食事は、外米で赤飯のように赤くぼろぼろの飯(新谷操「福女時代の思い出」[前掲「敷島の」所収]では、「ボソボソのコウリャン飯」とする)で、黒いまじり物もあって、生徒の中に盲腸の患者が次々と出た。海軍工廠の軍医さんはすぐ手術をほどこし、そのたびごとに、年若い私達女の教師がその看護にあたった。手術が終ると地下水のしたたる大きな防空壕の中のベットに移され、そのわきに付き添っていたが、夜間便器を持って防空壕を出て灯火管制で、まっくら闇の中を霊安室の前を通りぶるぶるふるえながら捨てにゆく。

(前掲「敷島の」所収、高橋利子「横須賀海軍工廠勤労働員の思い出」)

◆12月25日 手がやけに冷える。工場の外に出たら、うっすらと雪、電車は運休。この位の雪で、持っている乾パン三ヶ喰べる様に命令が出た。七時半、國分先生の判断で、寮まで行軍。食事当番が食器を並べると氷のはった味噌汁が渡される。腹はペコペコなのに思はず箸が止まる。家が恋しい。

(前掲「敷島の」所収、後藤末子「敷島隊動員日誌抄」)

◆何時の頃か、一寸記憶があいまいではっきりは分かりませんが、私達は先生方の御骨折りで牛乳を頂くことが出来ました。月に何回か夕方牛乳当番があって逗子の町まで各組二名ずつ牛乳を取りに行った思い出があります。

(前掲「敷島の」所収、大宮千代子「心の歌」)

◆それから間もなく学友に送られて横須賀へ行き、逗子の寄宿舍へ入った。そこでの生活は本当に身にしみる辛い毎日であった。寒くとも文句は言われなし、お腹が空いても何もなく細いさつま芋が四本位で一食の時もあった。それでもたまにはお菓子(すあま)の配給があり、そんな時は一口々々味わいながら食べたものだ。(中略)いつも工廠での昼食の高粱飯の赤さと、寮の夕食に出たごぼうの煮付けの黒さが今でも鮮明に眼前に浮んで来る。ことに、寮の夕食のおかずが来る日も来る日も、ごぼうの煮付けだった時期があったが、これには全くがっかりした。素人の私にも、ビタミン等の不足を来たさないかと心配であった。果せるかな、生徒の間に脚気と盲腸炎が続発したことがあった。この情報に、福島の父兄の方々が心配されて、輸送関係の非常に厳しい時期であったにもかかわらず、新鮮な漬物を数樽送って下さったのには、まことに有難かった。そのみずみずしさに、涙をながしたことであった。

次に、今その経緯はさだかではないが、多分、私が横須賀から戻って来てからのことであろう。伏黒村(現伊達市伏黒)のりんご農家数軒を訪れて寮にりんごを送ってもらうお願いに行ったことがあった。当時はりんご一個でもなかなか入手できない時代だったので、最初はびくびくものであったが、どこの農家で

も快諾して頂いて嬉しかった。あるお宅では、「先生、良いのを選んで行きなさい。」と言われて、大きくて甘そうな実を選んでいた時のりんごの実の紅が目にしみて、父兄の親心をひしひしと感じ、生徒たちの笑顔を思い浮かべて楽しかった。（前掲「敷島の」所収、土田知雄「栄養余話」）

- ◆十二月半ばをすぎて素足に下駄ばきでも、まだ寒さを感じさせない逗子、横須賀の通勤を、故郷の父母にいらせて喜んでいた冬に、あの地では二十年振りとかいわれたドカ雪で、一挙に福島を凌ぐ雪道の帰りを思い出した。

東京から電車がこなくて、徒歩で帰るということになり、一組ずつ東京（横須賀？）の線路づたいに歩きはじめたとき、海に注ぐ河口にかかっている橋を渡るのが怖くて泣き出した人がいた。それをきっかけにコースを変えて、沼間街道へ行列を組んだこと、歌をうたったり、真暗なトンネルに中を真直ぐに歩いているつもりが前の人にぶつかったり、いつのまにか行列からはみだしてあわてて列に戻ることをくり返しながらかまの途中でグッショリ濡れて、やっと帰寮したものをまっていたのが冷たい豆腐汁の夕食だった。寮の入り口に「海軍御用豆腐商」の看板だけが重々しく下がった軒の低い家が忘れられない。私はあれ以来、豆腐の入ったすまし汁に拒否感が抜け切れない何年かをすごしたものだ。沼間の防空壕探しにいったときの私の頭の中に、フト、あの豆腐屋さんをめざせばの想いがよぎったが、なつかしい？ トーフ屋さんの家は跡形なく消えていた。（前掲「敷島の」所収、佐藤節子「振り返りの記」）

- ◆逗子・沼間の夜明けは早い。またKさんの「朝だよー。起きなさいー。」のうらめしい声。国防色の作業服に着替え、洗面後朝の点呼が始まる。食事当番が下の食堂へ行って、食缶に二部屋分の食事を運んでくる。外米のまじった御飯に佃煮、さめた味噌汁が頭に浮ぶ。（中略）一日の作業を終え、山の端に沈む夕日を感じ傷的に眺めることもなく、重い足を引きずって寮に戻る。夕食後のおやつは楽しみの一つ。それはおいしいさつまいもであった。（前掲「敷島の」所収、塩谷孔子「思い出の地を訪ねて」）

- ◆第四工場中村組に配属されたのは、引地美代子さん、河野純子さん、三浦慶子さん、今野富美子さんと私の五人でした。岡田伍長さんのお宅に御好意でお招き戴いたのは、六月の日曜のことでした。逗子の駅まで迎えに来て戴いて、葉山まで海岸通りの道は磯の匂いがして砂浜は海草が干してあり、日あたりの良い湘南の別荘は素敵な家々ばかりで、その庭にはあじさいが咲き乱れていました。（中略）途中森戸神社に参拝して武運長久を祈り畔道を急ぎました。畔道には色鮮やかに野アザミが咲いていました。

岡田伍長さんのお母様は貝柱の入った真っ白な御飯と、香りの良いワカメの味噌汁を作って待っていて下さいました。寮はアルミの食器だったので茶碗の感触は懐かしく久しぶりでした。一升も炊いて戴いたのに私達の食欲はおひつをたちまち空にしてしまい、まだ岡田伍長さんが食べていない事に気づき、あわててどうしようと赤くなったことなど、今でも昨日の事のように、あの貝柱の御飯の味までも思い出すことが出来るのです。（前掲「敷島の」所収、鈴木蓉子「私の中の横須賀ー思い出のままに」）

- ◆寮生活も始めて、親元を離れて、ちょっぴり寂しさもかんじたのですが、一生懸命働くんたという、意気込みがありましたから特に涙をこぼす感傷も無かったようでした。畳の部屋を庭の竹箒木で掃いたことを母に出したハガキが黒く塗りつぶされたり、食事をとりに炊事場へ凄いいぬかるみに足をとられながらさつまいも、本当は美味しかったのですが、大きな竹カゴに入ったままの味気ない食事。お正月にははつきり歯型のつく厚いお餅の入ったお雑煮を頂いた事。（中略）あの時の光景が私の心の宝として瞳の裏に刻みこまれて居ります。（前掲「敷島の」所収、関塚玲子「くれないに咲くハイビスカスに囲まれて」）

- ◆又、炊事場は寮より大分離れており、当番が交替で食事を運んできましたが、「今日は赤い御飯よ」と喜んでいてコーリャンが入っていて見た目は丁度お赤飯のようでした。家から送ってもらう食糧は炒めたお米や大豆などの非常食ばかりで、美味しいもまずいもなく食べていたような気が致します。寮の入口に近い左側が先生方のお部屋、廊下をはさんで右側が静養室になっていて、私達が発熱して休養していた時、先生や友達が心配して優しい言葉をかけて下さいました。非常に心細かっただけにとっても嬉しく感じました。又、友達が病気で夜半氷枕の水を入れる時、氷枕に少しでも空気が入っているとキン先生に「駄目です」と注意されて寒いのも我慢して又あわてて入れ替えに走って行った事もありましたが、……

(前掲「敷島の」所収、田代陽子「思い出の地『逗子』『横須賀』を旅して」)

- ◆学徒動員といえど必ず思い起こされるのはやはり足の手術(うおのめ切開)をして工廠から寮まで、あの遠い道を渡辺先生と粕谷先生に背負って頂いて切開後の痛みをこらえて帰って来た事が忘れる事が出来ません。当時支給された黒いゴム靴で歩くと、私の足の底にはいくつものうおのめが出来てしまい、はじめは何か石等に当たらぬ様に気をつけて歩いていても、もともと化膿し易い体質の上に栄養不足から段々化膿して、さわる事も出来ない位の痛さになり、先生に連れられて医務部へ行くと軍医さんが、いきなりメスで患部を切り、メスで中の膿をかき出し、その後リノール酸の黄色いガーゼを押し込みました。勿論麻酔はありません。その痛さは今でも思い出すとゾッとします。現在の様に一寸の傷でも麻酔をかける医療とは程遠い治療でしたが、戦時中のことです。ですから受けられただけでもいい方だったのかも知れません。

(前掲「敷島の」所収、戸木田とも子「先生ありがとうございました」)

- ◆各部屋の前に整列朝礼の後、食事当番が食堂より食缶を持参、アルマイトの海軍食器に高粱や豆粕のいっぱい入った主食に一汁一菜、これでも良い方で福島では餅草、おおぼこ、甘藷の茎と口に入る物は何でも食べました。空襲が頻繁になる頃は夜中に炊くので、冷たく上はカチンカチンでした。(中略)小島、藤井さん等がおり、様爺(綽名、逆さ読み)が日なたぼっこをしながら空缶にホワイトチチを衣類から拾って入っていました。その後皆にも蔓延し、寝具衣類を空の風呂に寄宿全部入れ蒸気で蒸しましたが、余り効果はありませんでした。続いて蛆虫、廊下の付(突)当りにある便所は換気が悪く入ると目にしみ、息を止めて急いで済ませる。夜ともなれば夜勤と称しタタキに無数に這出し踏まない訳にもいかず、プチプチと潰れた感触は今(未)だに強烈。一週間頃が一番ホームシックにかかり皆で「家に帰りたいー」と叫びました。その時の話題は真白な熱い御飯に白菜のつけもの、これが最高のごちそうでした。最初の頃は、素甘、甘食、さつま等のおやつ配給も在りましたがだんだん乏しくなり、家から送ってもらう貴重な米と大豆を煎ったおやつ、豆味噌の常備菜等、防空壕で茶筒から出しポリポリ、荒井さんが送って戴いたオレンジ色の梅干をチョコレートと名付け、夜のひとときおねだりして美味しかったものです。

(前掲「敷島の」所収、長島きぬ子「さくら貝に想う」)

- ◆炊事場のところだったか、風呂場のところだったか、板壁のところに鉄パイプがあって、蒸気が通っていた。栓を開けると激しい勢いで蒸気が出て来た。ヤカンに小麦粉をこねたものを入れて、その蒸気で熱し、すいとんを作って食べたことがあった。御飯も炊いた。洗面器で御飯を炊いたことがあったには、どのようにしたのだろう。

(前掲「敷島の」所収、編集部「蒸気で炊いた」)

- ◆間もなく空襲のサイレンの日々、一ヶ月後小雨降る十二月の或る夜も例の如くサイレンで赤い毛布を持って一同裏山へ逃げる。雨の中ずぶ濡れになり身を震わせ乍ら解除を待つ。翌日から風邪をひき高熱に胸の痛みと咳と一日中苦しんだ。一人ぼつねんと部屋に寝て居たら、漸く渡辺キン先生が見廻りに夕方になって来られて、四十度を越す高熱に驚かれ、大変だとばかり「早く来ないでご免なさいね」と言い乍ら早速私は田浦の病院に入院する様になってしまった。暗い病室、小さな灯りで注射をされ、その中又サイレンで、担架で防空壕へ移される、家を離れて丁度一ヶ月後の十二月八日の事でした。私は急性肺炎になっていました。地べたに置いた低いベットの生活、高熱で地面が岩の様に凹凸に見え足を高く上げて歩いていた様におもいます。空気の汚れた中での生活、今泉先生と荒井先生が交替で看護について下さったご恩を忘れる事が出来ません。故郷の母は電報を受けた夜、震えが止まらなかったとの事、父が夜汽車に揺られ乍ら、私の壕内ベットを訪れてくれた時、食べる気力もない私に持参の餅や水飴を進めてくれた。先生方の手厚い看護の甲斐あって退院する事が出来ました。暫く寮で静養し乍ら薬を頂きに病院に通院していた或る日、「お便りが来てますよ」と看護婦さんの言葉に何処に有るのかなと壕へ行き桜井さんから受取る。それは父よりの便りで、兄が支那海で戦死したとの公報が入った知らせだった。

この田浦の病院の下をバスが通り抜ける時、様々な悲しみそして思い出があった事を今しみじみと脳裏をかすめ乍ら、じっと病院を見つめて参りました。

(前掲「敷島の」所収、沼崎優子「今横須賀を尋ねて」)

◆指を怪我してひょうそ(癰疽)になり、トラックを止めて乗せてもらい田浦の厚生病院(防空壕内)へ行き治療を受けた。それから工場へ戻った。

(伊藤純子聞書、2005. 6. 19. 「獅子の会、学徒動員60年の集い」にて)

◆B足らん(ビタミンB₂不足)の脚気に取りつかれ、他の二、三人の友達と帰郷する羽目となった。逗子駅まで皆がリヤカーで柳行李に詰めた荷物を運んでくれた。見送りの友と、直(治)って必ず戻ると手を握り合って帰福した。一ヶ月後、戦いは終わった。その時の柳行李は今でも持っている。

(前掲「敷島の」所収、阿部英子「タイム・トンネル」および05. 6. 19. 「獅子の会」における聞書)

◆脚気になり寮で寝ていて、7月初めに証明書で切符を買って帰省した。その一ヶ月後に福島^の渡利に爆弾(これは「戦略爆撃調査団報告書」では、パンプキン型模擬爆弾だとされる)が落とされた。

(佐藤貞子、05. 6. 19. 「獅子の会における聞書」)

◆思えば苦しい日々でした。カッケで、寮の一室が病室に変わり、私もそこで休んで居りました。そこへ渡辺キン先生が、「これはとってもよく効く薬で、皆さんの病気はすぐ治りますよ」って、出されたのが何とビスラーゼ、啞然として配られる手元を見つめました。それは飯坂町湯野字田中の東亜栄養の工場^で、父達が生産して居る薬だからです。いわゆるビタミンB₂剤、不思議と脚も軽くなり数日後には治りました。

(前掲「敷島の」所収、平井美耶子「ふるさと恋しや花いちもんめ」)

※東亜栄養は、現福島市飯坂町湯野字田中のトーアエイヨーで、片倉製糸伊達工場跡地に片倉興業八王子工場が疎開し、東亜栄養と改称してビスラーゼを海軍から受注製造していた。整腸剤ビオフェルミンもこの種の薬剤である。この種の整腸剤メーカーに「ビオフェルミン製薬」がある。

◆最終のガス溶接棒工に廻された。叫んでも喚いても何も聞こえぬ騒音と塵埃の中で文字通りパントマイムの作業だ。眼だけ出していれば良い大型マスクをかけて分厚い軍手を嵌め、専用作業服を纏って入る乾燥室だ。熔融液で練り合わせた様な煤を直径1糎、長さ20糎位の黒ずんで古そうな鉛の棒に捲きつける原料の薬品名は分からぬ。溶接するのは船体だそうだ。緩いカーブ断面の接合だ。其の艦種は既に暗黙の範囲で確と知る者は知る。早急完全乾燥棒は当然乍ら熱風漲る密室で造る。熔融混合剤は恰も掃除不足のまま激しく噴き出す工場の煙突に溜めた真黒の煤とアルミを粉にして混ぜ熱湯で練り込んだ様なドロドロをきりたんぼ様に煉りつけた感じだ。それを完全乾燥させるには高熱と早急確実な換気を要する。其れを翌日の朝取り出して容器に詰め待機するトロッコに積んで現場に送り出す。

或る日、余りにも息苦しくて外に出た。真黒な煤で湿った綿マスクを外し、外側から中を覗いた。お蚕屋に似た段々棚籠に今並べてきた棒の黒く濡れて光る溶接棒。乾燥の早い奥際の空間には漆黒の微細粒がダイヤモンドダストを^{ちりば}鑲めた様にきらめき宙雲にたなびく。(中略)

寮に戻って漸く本物の空気をゆっくりゆっくりと吸って吐く。身も口も喉も、どう拭っても洗っても流しても黒い塵芥は執拗に残る。だから何回も何回も何時迄も一杯一杯深呼吸をする。

日に日に咳が酷く咳が混じってくる、少しずつ其の色が加わる、食欲が落ちる、たまの麦御飯も粟も稗もどんなにふん張っても噛めない、気だるい。非常食の乾パンと家から送って貰った炒り豆は、只口の中に含んでおくだけの弱体を如何に堪えようか。

胃が重く肩が凝る。それでも仕事には出ていた。部屋に帰ると友が交替でさすったり揉んだり指圧をしてくれた。全身が重い。朦朧として診察を受けた。肋膜炎という診断で数日欠^{ママ}んだが足も腕も顔の筋肉も固くて重たい。遂に転地療養の名で数人と一緒に帰された。(浪江高女、飯塚禮子「日本の空の下で」)

◆私はボルト切りをしました。重労働でした。私は元々丈夫ではありませんでした。漸く卒業の三月を超すことが出来て何とか勤まっていたが七月の声を聞いた時には限界を超えていました。海軍病院で診てもらいました。重度の栄養失調ですと言われ直ぐ家に帰されました。ボンヤリと馴れた道を家に帰りました。母が真っ先に私を見つけて不思議そうに暫く見詰めました。私もボンヤリと突っ立っていました。大分時間が経ったように思いました。母が「誰? ……光子かい?」びっくりして自分の娘を見違えたようでした。体つきも顔立ちも眼もまるっきり人相が変わっていたのでした。面影も無い程にやつれ痩せ衰え

ていたからです。 (浪江高等女学校昭和20年卒業生「文集」所収、宇佐美光子「栄養失調」)

- ◆学徒動員で私は大きなボルトを作りました。寒かったので大砲の玉を熱くして隣の工場から持って来てみんなで手をぬくめました。ボルト作りは冷たかった。良いものを選別して切り直すのが仕事でした。ばんばん暇になってくると指導員の人がりヤカーに何か適当な物を積んで六号ドックでも見て来なさいと解放してくれました。手ぶらで職場に居るわけにもゆかぬからという事で外をウロウロしました。その内風邪をひいたのか気管支炎になってしまいました。八月に入ると家に帰って休みなさいと言われ、何人かやっぱり病気になった友と寂しく先に帰りました。 (前掲「文集」所収、遠藤ハナ「リヤカーでドックへ」)
- ◆三月の卒業式をようやく乗り越えてもう少しもう少しと頑張ったのですが肋膜炎と診断されて故郷に帰るように言われました。折角一生懸命、鈴木ともちゃん鯨丘みっちゃん門馬キヨちゃん等と力を合わせ励まし合い、海軍の将校さんが素敵でヒソヒソ話して楽しいひとときもありましたが残念でした。家に着いてもそればかり胸に漂い淋しくて涙が滲んできてなりませんでした。

(前掲「文集」所収、久保田雪子「肋膜炎になって」)

- ◆ゴム靴を履き鉄板に上がります。ガス切断機をボンベに繋ぎ、目的標に向けて補助車を押すとガス切断機が動きます。そのスイッチを手許で押したり引いたりしてガスの炎を点火したり消したり動いたりを運転します。足許は何とか分厚いゴム靴なので安全ですが、ズボンの方は、散る火花に依って一面が穴だらけになります。繕う道具も物も着替えも無く、洗濯も寮故に節約を旨の(とする)事とて思うにまかせず、かてて加えてお風呂の自由なんてありません。当然、自然現象としてあの懐かしい様な悲しい様な虱や南京虫の大量訪問を受ける事になります。週一度位の熱湯にそれは大勢の「花は乙女」の筈の女子学徒の衣服をギュウギュウと詰め込むのですから、熱湯としての効き目など先ずはさておきの慰めを自らに要求するのです。

(前掲「文集」所収、池崎リヨ「進水式を見届ける」)

- ◆思い出すと夢のような、良く頑張ってきたよね。食べ物はずつま芋、それに大豆やもち、あの時はおいしく頂きましたよね。時々家から送ってきた物は何時も餅を小さく切って油で揚げたものや干し芋、それだって家からの送り物だから部屋の人、四人で喜んで食べたっけ。お洗濯は一番、女だから人前で出来ない時もあったね。誰も私達の時代は病気もせずに働きましたよね。

(前掲「文集」所収、横山ミドリ「学徒動員」)

- ◆又、思い出すのは朝早くから海兵隊のカッタをこぐ、ギーギーという音が冬の冷たい風につけて聞こえて今でも忘れられない。食事は大豆の入った御飯、最初はなかなか食べられなかった。でも、食べなければ他に食べる物が無い。食べる物といってもいり豆だけだった。夕食にみかんがあったのが最高の幸せだった気がする。

持物(手帳に書き残っていたものです)

印鑑 衣料切符 移動証明書 ゴマ塩 梅干し 味噌漬 裁縫箱 雑巾二枚 かっぱう着

着物 下駄 ツック ハガキ 金(小使)

月給 四十円 食費十五円 米四合配給

(前掲「文集」所収、高木ナヲ子「思い出」)

- ◆私は畳二畳位、厚さ2cm位の分厚い重たい鉄板の上に上がって電気ドリルを使って直径2cm位の螺子穴を開ける仕事をしました。最初は鉄板の上に立っただけで転びそうになったりバランスが取れず、先ず鉄板の上で立つ事を練習しました。重たくて凄い震動のある電気ドリルで定められた箇所に穴をあける事は大きな勇気を要しました。寮に帰るなり急いで梅干し仁丹や炒り豆を口に含んで自分の疲労感を誤魔化しました。

(前掲「文集」所収、前田アキ「電気ドリル」)

- ◆二十年の四月半ば、横須賀の山の上の桜が散った頃、私は皆さんより一足早く津島小学校(当時は国民学校)の代用教員に採用されて故郷へ帰りました。満員列車で故郷へ近づくにつれ、友達と別れてきたことが淋しく感じました。あんなに家に帰りたかったのに。

今まで配属されてた原図場、進水式にお菓子をもらうのが楽しかったこと、毎食鰯の煮付けが出て一生分食べたこと、鎌倉八幡宮へ遠足、夜間行軍しながら歌を歌ったこと等々、走馬灯のように浮び涙ぐみま

す。

(前掲「文集」所収、松本徳子「思い出」)

- ◆私は元々心臓に病気を持っていました。寮では栃沢素さんなどと五人部屋でした。仕事はボルトの長さに鉄棒を切断する仕事でした。一ヶ月無理をしました。兵隊は手や足が取れても帰りゃせんと脅かされましたが私は帰されました。

(前掲「文集」所収、荒 玉「病氣」)

- ◆一応の卒業式以後は、専攻科生として自動的に残留組となり仕事にも慣れてきた五月、私は何本か転がしてあった仕事用のガスボンベを見廻るうちに、その一本の止め口に足を取られ転倒しました。そのまま立てなくなりました。寒気がして左足の踵あたりが異常に痛みました。一生懸命目を開けて動けなくなった足首を見ました。コンクリートの床に真っ赤な物が流れていきました。びっくりしてしまって、出そうとしても急には声が出ませんでした。懸命に誰か助けてと叫びました。指導員さんが走って何処かへ行きました。直ぐ普通車のような救急車が来て、何人かに抱えられながら応急手当を受けて工廠内にある海軍病院に運ばれました。痛くて痛い痛い泣いたら軍医や看護婦さんに、

「これぐらいの事で何ですか。兵隊だったらこんなもんじゃないよ。手でも足でも取れちゃうんだ。これ位でなんだ！」

とか邪険にされながら三針縫いました。11cm程バツクリ傷口が開きました。一週間位、仕事も空襲警報も食事時間も只ひたすらじっと我慢して、治療だけ寮の係りの女の人に世話になりながら布団のなかで泣いていました。五月のお天気の良い日に切符を買ってもらって、浪江の家に貨物列車で帰されました。途中、二回、B29に襲われて列車はトンネルで何十分も立ち往生しました。痛くて辛い旅でした。浪江の病院でやっと治りました。

(前掲「文集」所収、鈴木伸子「動員先で怪我」)

海軍工廠以外の工場の・衛生・食糧事情

日頃の生活環境や食生活、それにそれぞれの感受性の違いもあるから回想や聞書の場合、あるいは受ける印象には個人差があるので、煩瑣をいとわず、出来るだけ多くの事例を挙げた。海軍省の軍事工場でさえこのような状況であった。その他の工場の状況も検証しておこう。

- ◆国産電機小田原製作所 若松高等女学校の学徒が動員された小田原の国産電機では、朝は釜の蓋をあけると数えるほどの米が入ったご飯、それに沢庵1枚、梅干1個。お汁は太平洋といって掻き混ぜると、ワカメが1、2枚引っ掛かるか何も入ってこないか、磯の香りも何にもしない。「あかす」か醤油粕みたいだった。おやつに、ご飯粒などあまり入ってない麦とひじきと素麺がはいった塩味の三角のおにぎりが出た。麺など良くくっついてたなあとと思う。あの小さなおにぎり、それでも美味しかった。夜などお腹空いてるから良く眠れなくて皆さん在(近在の農家)の方は、家から炒り豆などいろいろ送られてきた。町の方は、いろいろ交換して買う(衣類などと食糧の物々交換)方だから中々送ってくれられなくて寂しい思いをした。

母の思いー割れた窓ガラスー

母が割れた窓ガラスに紙を貼って補習したまま、取り換えないで使っていてね。「お母さん、何もこのまま置かないでとりかえらったら」って言ったら、母が「あの時は、昔お嫁に来る時に持って来た、死ぬまで(一生)着ようと思った珍しい着物をお米に換え、お部屋の10人におにぎりが1個ずつあたるように送ろうと思って、今何個作った、(後何個だ)と数えながら握っていると、小さい弟たちが悪戯して失敬して食べてしまった。母は、姉ちゃんに送んだ。また悪戯したかって怒って追っ駆けて戸に当たってガラスを割ってしまった。それで(おにぎりが足りなくなって)、明日また着物持って近在に行ってお米を分けて貰ってご飯を炊いて握ったのだ。そういう思い出のガラスなんだ。」といいます。

「さつま芋1本ずつとおにぎり梅干とできたから今日は送ります。やっとこれだけの荷物にまとめたんだよ。心して食べてちょうだい。」という母の手紙が届いて、やっと届いたなあとって荷物を開けたら、悲しい事にさつま芋から毛が生えてもう食べられなくて泣き泣き捨てました。い

や本当に母の気持ち考えて泣き泣き食べたものでした。

荷を解きて 頂く飯の 白き香に 古里遠く 母を想へり ヤス

(1998. 9. 11. 若松高等女学校、座談会「国産電機小田原製作所動員の想い出」)

遠足の時は、いも2本とおにぎりなどを竹の皮に突っ込んで貰って箱根の山・十国峠・甘酒茶屋を越えてくる時、一瞬、「今、戦争なのかしら」と思ったという。

毎週日曜日だけは自由に外出できた。農家に行ってみかんなどを譲って貰って来た。農家の皆さんにとっても(大事な)食糧だから矢鱈には譲らない。それを何とか頼み込んで譲って貰った。枯葉を集めてソーッと焼き芋をした。煙がチョロチョロでも段々匂いがしてきて先生に見付かって先生にも半分上げたりして隠れるようにして食べた。草もいろいろ食べた。先生に教わって、これは食べられる、これは食べられないとかいって、道端の草も食べた。

神奈川の女学生に良く助けられた。さつま芋などふかして持って来てくれたり、豆など煎って持って来てくれた。

(1998. 9. 11. 前掲座談会「国産電機小田原製作所動員の想い出」)

この神奈川の女学生というのは、小田原の私立新名高等家政学院(現旭丘高等学校)のことで、以下に座談会記録から抜粋する。

和田 第一の人たちは日加工業。国産電気(機)はね、相洋中学、私たち新名と会津若松高女と三校入っていたんですね。相洋中学の男子生徒と会津若松高女の人たちは寮に入っていたのね。寮はね、川がある所、酒匂川じゃなくて、こっちの狩川ですか？その堤防の側に二階建の木造の寮がありましてね、そこから通っていましたね。

何人ぐらいいました、その会津若松高女の人たちは。

津田 大分いましたよねえ。高女の人たち。そう、百人ぐらいみえたのかしらねえ。

大友 七、八〇人、もっといたかもしれない。

和田 それで3時に、こういうおにぎりが出るのね。

大友 その、おにぎりの中にうどんが入って。

和田 そう、おにぎりが出るのね、その中にたくあんが入ったおにぎりが出て、その会津若松の人たちがひもじい思いをしているので、みんなあげたような事がありましたね。

大友 家のばあちゃんは、さつま芋を供出するでしょ、そののこったのを毎朝、二升釜でゆでてくれて、それを会津の人たちにあげなさいって言うのねえ。婦人乗りの自転車買ってもらってその後ろにお芋を乗せて行くの、そうするとね、会津の女学生がね「今日もくれるの」って、みんな喜んでねえ。まあ全部には行き渡らないのですよ。私たちもみんな旋盤やったり、私の場合はこの四人が検査だったの。その検査の人には、まあみんな田舎の方だったからあげなくてもね。会津若松の人たちにはあげたんですよ。

(戦時下の小田原地方を記録する会『戦争と民衆』第37号収録「日の丸の鉢巻をして軍需工場で働いた女学校時代—戦時下の新名高等家政女学校の教師と生徒たち—」より抜粋)

木村淳子先生の想い出—炒り豆と下痢、クレソン・もち草摘み、砂糖、しらみー

学年違って担任でないのに行かせられた。酷かったですよ。行った日に病人7人も寝てたんです。みんな下痢。物凄く熱出して寝ていたんです。何もしないで只寝てるだけです。直ぐ工場に電話掛けて、「7人、ズーっと寝てますから。」と通報したが、それで終わりだった。酷かったんです、あの工場は。家から心配しておやつ送ってよこすんですけど、固い炒り豆や焼米を食べ過ぎて腹を壊すんです。それで私達は送られてきた食べ物を取り上げたんです。工場から寮に帰ってきた時に、手を出せて言って、その開いた掌に食べ物をくれます。それだけしか食べさせませんでした。

工場のあるところは、酒匂川沿いの低湿地で、「クレソン」って西洋ゼリが物凄くいっぱい青々

していた。それを見つけた私は、生徒に調理場から箸を借りてこさせて「クレソン」を採って来て、工場で調理して出したら、みんな美味しい美味しいと喜んで食べました。それで明日もまた採って来て出して貰えといったら、採りに行って戻って来た生徒が「先生もうひとつもない」というのです。「どうしたの」と聞いたら、「食べられると分かったから工場の人達がみんな採って行ってしまった。」というのです。それから餅草をみんなに採らせて、「3月3日の雛の日には、必ず団子食わせるんだから食わせてください」と工場に頼んだら一人五つずつ、あんこ掛けて作ってきたんです。みんな喜んで食べましたね。

工場には若い将校さんがいて、夜、遊びに来るんです。「何が一番困る」っていわれて、「甘いもの食われないのが一番困る」っていったら、砂糖を持って来てくれたんです。それで砂糖を団子に入れて作ってもらったんです。

何ていう中学校の生徒だったか、シラミがついちゃって酷い。その男子生徒のシラミが移るっていうんですね。私が行った晩に風呂に入るのに、「風呂敷で衣類包んで風呂さ入らんしょ。そうでないとシラミがくっつくから」っていわれたんです。シラミがいっぱいでした。やっぱりくっきました。

(1998. 12. 24. 若松高等女学校 元家庭科教員「木村(旧姓稲生)淳子先生を訪ねて」)

【注】中学校は、神奈川県私立相洋中学校。

- ◆東京兵機 主食のご飯は、コーリャンやマイロ(モロコシではない)、それに豆粕が入っていた。魚のようなものが入っているシチュウともカレーともつかないものを食べさせられた。家から送られてきた炒り豆や餅や胡麻塩で空腹を癒した。火の気がなく湯でもないので、床の中で生水を飲みながら食べた。外泊して親戚で馳走になったりしたが、昭和20年になると、それが出来なくなった。食べ物を家から送られてきた人は全体の三分の一位でしょう。食べ物を天井に隠していて先生に注意されたり調べられたりした。防空壕の中でも食べ物の話ばかりだった。三年生は残留した分だけ飢餓感が強かった。

(1999. 10. 15. 保原高等女学校「座談会記録」から)

- ◆日本アスベスト 工場敷地内を従業員が開墾してさつま芋を作っていたので、さつま飯やさつま汁が多かった。その畑の作物を失敬して寮の炊事場で煮焼して食べた。帰省した時、むすびを全員分作ってもらって戻ったことがあった。日曜日に外出して、貰った報償費で雑炊などを食べた。

(1999. 12. 13. 私立福島電気工業学校「渡辺清吉聞き書き」より)

- ◆池貝鉄工所 三度三度の食事は全くとろろで、ふかした帆立貝を入れたご飯に味噌汁、それにおかずがちょっと一皿、それだけ。午後のお茶の時間—15分位—to雑炊が出された。雑炊には細かくした素麺がトロトロになって入っていた。それにお茶ガラが入っていたり魚の骨が入っていたりした。だから一番美味しかったのは雑炊、少しずついただくそのいっぱいが本当においしかった。朝は、空襲で賄のおばさんが来られない時はコッパン1個配られるだけで外になにもなかった。寮に帰ってからみなグループ毎に家族から送られてきた豆とか干し飯(糰)とかを食べていた。

(1998. 11. 13. 喜多方高等女学校座談会記録「学徒勤労動員を語る会」より)

- ◆横浜ゴム鶴見工場 1944年11月19日の夜行列車で動員先の横浜ゴムに向った田村中学校の4年生は、翌朝、寄宿舎松風寮に到着した。

やがて与えられた部屋に落ち着き旅装を解いて遅れて届いた行李の始末も終わり寮での第一夜を明かした。その夜の出来事だ。鼠の大機動部隊が彼等が手小荷物にして持参した大事な食糧を食い荒らし押入れの中は惨憺たる有様となった。栗を詰めた袋には穴が開けられ、栗の皮が散乱し、柿や梨にはトンネルが穿たれ全く目も当てられない有様でしばし呆然とするばかりだった。そして日々の生活を詩歌に託して寸描している。

○車座になって糧を食ふのが絶好の歓喜だ 橋本 勇

○重箱開いて 甲「うは……真黒い飯だね……」 乙「飯が箸にのっからないぜ」 瀬下 仁

○今日も浮ぶふかし芋、親元離れて幾十里 桑島 昭三

○工場より帰って食べる紅い柿、遥かに故郷を思ふなり 影山 勝長

暮には父兄会から餅やあんこが届けられ、雑煮やおしるこにして腹いっぱいいただいて満腹感を味わった。その感想を次のように述べている。

○正月や郷の雑煮の一涙 宗像 善二

○一膳の雑煮笑顔で寮の春 野中 宏

○二千六百五年の餅の味は格別だよ 青柳 寛

○あんこ餅と鮭缶で今年もよい正月を迎えたよ 塩田 礼市

○寮のお餅は南方から送られて来たのでせうか真黒です。古里のみやげは寒い寒い雪の積もる地の送物ですから、おいしく真白でした。 藤田 昭

○あんこ餅のびてちぢんで父母の顔 佐藤 栄一

◆日立製作所 1944(昭和19)年8月7日に、日立製作所多賀工場に出動した磐城中学校の4年生は、多賀工場内の國分工場、桜川工場、鮎川工場に配属され、宿舍は、多賀町大沼の大沼寮であった。磐城中学生は1・2棟、田村中学の5年生は3棟で起居した。食糧事情について、磐城中学校第46回生3人の回想記から紹介しよう。

毎日工場からの遠い道を腹をへらして帰る。各部屋の食堂当番は食堂へ、与えられた飯は極く少量の雑炊、皆と分け合い空腹の一部を満たす。当時炊事場では各人の配分以外に、棚の片隅に満杯の白米のお櫃が二つ別にとってあり、炊事人及びその家族は、毎日満腹感を味わっていたのである。そんな折、各部屋の食堂襲撃事件が起きた。若者の腹を満たす餓鬼道に落ちた感さえある一時期であった。その頃の或る日、食堂の神棚にお供え餅が飾られた。空腹者には鮮明な餌食として映る。お供えの重ね餅は一夜にして消えた。次の日の夕食時、雑炊のどんぶり飯を前に長々と説教、辛い時間である。雑炊の表面は固くなり、じっとどんぶりをみつめる外なし。犯人は誰か、吾々の仲間だ。連帯責任の強い吾々は誰一人として指弾する事なく、庇い合い我慢したものである。

夕暮れ頃、寮から近くの鉄道橋で、田村中学生が工場からの帰途、列車にて轢死する事故があった。寮生活初めての事である。葬儀後の夕食に、田村郡の栗飯を馳走になり腹一杯食べさせて貰った思い出がある。寮生全員満腹感を味わった事と思う。当時、食糧事情が悪く毎日空腹の連続であった。米のない戦時下、盛り沢山の栗ご飯は思い出の一つでもある。(片寄金治)

一番つらかったことは食事の少ないことでした。喉も通らぬ程の食物で、高粱めしには下痢患者が続出。さつま芋だけの時もあった。そのうち家から持ってきた米を寮の裏手にある会社の社宅で炊いてもらうことがはやり出した。残業をすれば工場で雑炊がもらえるということで、よく残業した。

休みにも汽車の切符が購入できないので、半分の人しか帰れなかった。残った人は日立まで歩いてコッペパンを買いにいったり、大甕にさつま芋の買い出しに行ったりした。(鈴木 茂)

食糧の状況は、①配給のパンを貰ったように思う。②帰省して余分の食糧を持ち帰った。③大橋先生から(会社に食事に改善について)クレームがあり、会社の厚生課からコッペパンの特配があったように思う。(桑田徳三)

◆昭和飛行機 学徒ではないが、相馬高等女学校の女子挺身隊の事例も紹介しておこう。このグループにはこの3月の卒業生ばかりでなく前年3月の卒業生も加わった混成隊であった。昭和19年3月20日、沢山の見送りを受けて中村駅を後にした。T子は、過年度の卒業で、仙台の洋裁学校生だった。洋裁学校でまとめたレインコートを着て出発した。宿舍は青梅の三階建ての元魚久という料理屋で、廃業か軍需工場へ接收されたのだろう。10畳に7名であった。屋根はトタン、床板は隙間だらけ、夜はストーブに木炭を焚くが、隙間風に絶えず足踏みし身体をこすり合った。寒くなってから瀬戸の湯タンポを渡された。昭和20年春、空襲が激しくなってから隊員の寮は青梅から福生の農家の養蚕室に移転した。

朝5時半起床、白い襟の黒いバンドのついた黒地の上衣とズボンを着て、食堂で味噌汁に漬物少々と丼飯の朝食を摂って青梅駅6時20分発の日川線で昭和前駅(現昭島駅)へ。ラッシュ時には、ギュウギュウ詰めでガラスが破れたり、足がバラバラになりそうになったり、隅の方に押し付けられたり泣くほど痛い思いをして通勤した。午前10時と午後3時にお茶とさつま芋、秋には皮付きのサトイモが配られた。昼飯は、高粱や豆粕が入った煮崩れした煮物のようなドロドロしたものだった。山形の隊員からは給食用の黒パンをいただく。たまに干バナナ・ココアが配給になった。E子の父が面会に来た時は、羊羹、しみ餅、餅米などを持参してくれ皆で飛び上がって喜んだ。

消耗品は配給制。寮の隣の小間物屋からやっと分けてもらったクリームは消しゴムカスのようにボロボロと落ちた。寮の風呂は時々で、皆と近所の銭湯に行くこともあった。洗濯は、水洗いだった。

K子は風邪がもとで肋膜炎になり、7月に3ヶ月の自宅療養で帰郷し、梨畑の番小屋で祖父母の看護と医師の往診をうけながら療養した。K子は、10月、心配する両親を振り切って、柿と炒り豆と小魚の乾物などを背負って青梅に戻った。昭和20年の3月からは毎朝空襲警報で、防空壕へ走った。ある日、警報が解除され砂だらけになって這い出したら第5男高(府立第5中学か)の生徒に爆弾が命中し死傷者が出るという場面に遭遇した。オーバーを着たまま床に入ったり、地下の防空壕でモグラのように皆で固まり一夜をあかすこともあった。N子は、有楽町の毎日会館の出張所に週3回程出張させられそこから三経ビルへ書類を届けに出ると必ず空襲があり防空壕に待避した。

そうした状況下で体力を失った隊員たちが次第に減って行った。K子も6月半ば身体を壊して帰省することになった。上野の墓地の板塔婆の焚き火で身体を温めながら3晩徹夜をして漸く中村駅までの切符を買い、郷里に帰って梨畑の番小屋で終戦を迎えた。N子も耳の病気が悪化して医者叔父に引き取られて帰省し、仙台鉄道局へ隊員身分のまま臨時雇いとなり中村から通勤した。兄が出征したので身重の兄嫁と岩沼駅前に引越した。食糧事情が悪く毎日サツマイモばかり食べていた。

三階のトイレは、吹き抜け?で暫くしてからボタンと音がして印象的だった。

食堂では、豆ご飯が多く、豆の中からご飯を拾うようにして食べた。苦い大根と魚の煮付け、それに嫌いなジャガイモという食事の毎日だった。(相馬高等女学校『挺身隊回想記』所収、西岡テル子「昭和飛行機工業会社」、宮内英子「挺身隊回想記」、太田 和、佐藤信子、佐藤富子「昭和飛行機会社挺身隊」、鈴木きい子、「昭和飛行機挺身隊の記」などによる)

県内工場の衛生・食糧事情

県内の動員工場も、県外に比べて食糧事情は恵まれていたであろうが、経営規模や急ごしらえの宿舎の状況からして安心できる状況ではなかった。

◆日東工鉱業富久山工場 栄養不足からか労働過重からか生理が遅かった。今のように便利な物がなかったから生理には一番困った。石鹸がなかった。その上、風呂が故障して40日も入れなかったから、パンツはトイレに捨てた。時間がなくて便所でシラミ取りをした。診療所はあったが、BCGの化膿がひどかった。

食事の量は少なかった。ご飯には、小麦飯、豆飯、うどんや干葉などが入っていた。芋の煮しめ・焼しめ・野菜のあんかけなどであった。芋は皮を剥いてなかった。家族の多い農家出身者は、保有米が少なく日頃から糧を入れて食べていたからあまり格差を感じなかった。家からは炒り豆・炒り米・餅などが送られてきた。食糧が届くと先生がそれを皆に分配した。

(1999. 11. 20. 原町高等女学校「座談会記録」から)

◆日東工鉱業郡山第一工場 食事は大根の入ったご飯、それに皮がついたままのジャガイモの入った味噌汁だった。それで自分たちもそれぞれ親が作ってくれた煎り豆を缶に入れ、救急袋に貴重品とともにに入れて必ず肩に下げて携帯した。(2003. 9. 3付、猪苗代高等女学校「月岡和子書簡」による)

◆沢田の飛行場建設現場 吉子川国民学校(1922年建築の木造平屋)の3教室をぶち抜いた部屋に粗氈を敷き軍用毛布1枚を掛けて寝た。虱が大発生し毎朝虱取りが日課となった。近所の農家の主婦たちが動員されて炊事に当たった。朝食と夕食は宿舎でとった。何故かもち米が多かった。通常、おかずはたくわんのみ、

時折カドイワシ(ニシン)なども出た。汁は醤油汁で時々食用油が入ることもあった。それに芹が入ることが多かった。弁当はご飯に沢庵のみ。朝食の時、腹いっぱいにならず弁当まで食べてしまい、空弁当を腰に提げて仕事に行く者もいた。こんな替え歌を歌いながら作業場まで歩いた。

朝の早よから起されて 空弁当提げてトボトボと 歩く姿の情けなや これから沢田の地獄行き

近所の農家に3人位ずつ割り当てられて風呂を貰いに行った。風呂ももちろんだがお茶菓子をご馳走になるのが楽しみだった。

吉子川にいた間、肺炎や栄養失調で三名が倒れた。履物は素足に草鞋履きであった。棚倉陸軍飛行機練習所の作業についてここで紹介する。田村中学校の場合は、およそ幅50メートルの滑走路の土掘り、もっこ運びやトロッコ押しによる土の運搬、整地、胴突きなど。コンクリートを使わず土に種々混ぜて固めた。そのため仕上がりが軟弱で、作業中、軍用機が不時着したことがあって、その時、車輪の跡が深々と刻まれたことがあった。

(2005. 2. 17. 付、田村中学校「渡辺俊三書簡」より)

- ◆中島飛行機福島工場 いわゆる信夫山地下工場に動員された福島中学校3年生の学徒たちの証言によれば、1945年の6月頃から福島工場の工事現場に就労した。朝鮮人や徴用工や勤労報国隊員が掘削した岩石(鉱山でいうズリ)をトロッコに積んで運び出し、工場入口前の広場や取付け道路に敷いたり路肩に積んだりした。そして縄で網を編んでそこに萱や松の枝を伐採して網に差して土砂に被せたり茂手木を組んだりして隠蔽した。ある日、筒状の物を食べている作業員に食うかといわれ、ダイナマイトの皮を剥いて齧った。自宅からの通勤で、弁当持参であったが、空腹に耐えられなかった。ダイナマイトの主成分はトリニトロトルエンでニトログリセリンや今日、心臓の痛み止めに使うニトロールなどと同じで、下痢をするがとても甘味があり空腹の一時凌ぎになった。また導火線はそのまま家に持ち帰り皮を剥き、線の周りに付着している粉末を七輪に入れてマッチを擦って着け木代わりに使った。

(1975年ころ「戸戸俊哉証言」、2007. 8. 31. 「菅井旭証言」)

- ◆石川山のウラン鉱砕石 私立石川中学校の3年生は、理研希元素工業関連の砕石に動員された。石川山での採石は、鉄ノミ、長タガネ三本で岩石に穴をうち、ダイナマイト三本を差し込み、最後の一本に雷管と導火線を付け、50m程待避して点火、爆破して行なわれた。三瓶君、山田君、服部君と記憶しているが味噌火薬のダイナマイトのパラフィン紙を開封しなめたところ甘い、と言う。ではと早速なめてしまった。その日作業終了後、点検したところ二発足りないことが判明、皆で探させられたが、結果は不明となった。小生らの胃袋に入っていたのである。

(第四十一回私立石川中学校卒業生『風雪の青春』所収、松村興治「石川中学校で過ごした五年間」より)

- ◆呉羽化学錦工場 (朝食や夕食の記録が見えないが、)昼食はサツマご飯だった。7月14日、梨8個ずつ配給、1円也。10月5日、体重測定0.6kg減る。10月31日、パンやまんじゅうは貴重な品、豆煎りがよい。11月18日、朝1時半起床、よく寝られない、寒くて朝5時頃発電所へ湯入りに行く。11月30日、掛布団1枚ずつ支給。12月1日、食事方法変更。12月5日、半ペン配給2円也。12月3日、石鹼3個配給3銭。12月13日、リンゴ配給3円60銭、1箱1人で60個びっくりした。2月9日、みかん8個配給25銭。2月11日、午前中眠った。昼食は眠かったが食堂へ行ってとる。2月12日、昼飯を寝すごす。2時半に目がさめる。2月13日、午前中眠る。昼食時を寝過す。2月28日、サツマ芋3個ずつ配給。3月6日、病気で帰る者が多い。3月13日、風退治用の石鹼が夕方配給になった。1ヶ10銭。二部君に頼んでシャツ下着類を風呂へ消毒しに持って行ってもらう。3月14日、朝風退治をした衣類の洗濯をする。3月15日、母面会に来る、嬉しい限り。リュックを背負って来てくれた。3月21日、家に帰りたい、病気になりたくない。

(末永正「中学三年生の記録」より抜粋)

- ◆加里興業錦工場 (この記録も3度3度の食事の詳細は分からない)11月26日、午後4時から初荷の式を挙行された。赤飯の折箱を1個ずつ貰う。夕食も赤飯。1月30日、朝礼の集合が皆より遅れて大変叱られた。帰って見たら風退治したシャツ・モモヒキが干してあった。もう風は当分の間は出ないだろう。1月31日、夕食はライスカレーで豚肉も入っていてとても旨かった。2月2日、荒井先生が今日で勤めが終わる。夜

盛大な送別会が催され、パンが出た。大変旨い。2月3日、午後呉羽の講堂で種痘をする。節分で舎監が豆撒きをする。3月4日、前もって知らせずに帰郷する。昼、茶碗飯を食う。何と小さい食器であろう、寄宿舍の井とはまるで比べ物にならない。3月4日、菊地君や善君や靖君の母が来訪され、みなでご馳走になり満腹になった。

学校・保護者会・県市町村の対応

動員学徒を取り巻く職場や寄宿舍・寮などの衣食住の環境について個別具体的に事例を紹介してきた。いかに国家のためという大義が個々人の生活を苦痛と飢餓に追い込んでいたかが明らかであった。その中でも育ち盛りの若く愛しい我が子たちへの保護者の思いが随所に書き留められていた。最後に学校などがどのように対処したかを、1944年10月に、3年生と4年生を三菱化工機川崎製作所に出動させた安達中学校の例を、1944年11月10日付、父兄宛、学校長よりの通知によって紹介しておこう。

(前略)

食糧につきては主食物は概して充分に御座候へ共、副食物殊に野菜及塩分類(味噌)に於ては充分と申難く、会社に於ても此点につきては営々努力致し居り候。されど時局柄思ふに任せ得ず固却(涸渇か)仕居候。学校に於ても此点につき種々協議の結果郡農業会其他各種関係当局と交渉、大体野菜類出荷の許可を得る見込つき申候。就ては甚だ御迷惑とは存じ候へ共、野菜其他の蒐集に御協力を賜はり度御願申上候。追而出荷期日は県当局より認可有之次第御通知申上べく候間、予め左記要項により御準備願上候。

尚生柿二百箱(生徒1人当四貫目)及蝗、柿箱に三箱は近々出荷の運びに相成居候間、充分郷土食を味はせ得ることと存じ候。

(中略)

記

1. 野菜ノ種類 里芋、大根、白菜、甘藍(注：キャベツ)、葱、人参、牛蒡、乾燥野菜類

2. 数 量 右ノウチヨリ選定1人五貫目以上

右計算基礎 — 生徒1人1日ノ補充量 五十匁トシテ二百六十名分十三貫目
全期間約4ヶ月分 百二十日 千五百六十貫目
1560貫÷260家庭=5100貫

貨車貸切ニテ輸送ノ予定。

3. 味 噌 都合ツク方ノミ可成 数人持寄、1樽ニ取纏相成度シ。

4. 集 荷 場 本校トシ遠距離ノ処ハ在校生ヲ差上持参サセル予定。

5. 代価及本校迄輸送スル場合ハソレ等費用等支払仕バク候。

6. 集荷ニ支障有之方ヲ慮リ集荷可能ノ場合ハ出来得ル限り多量ニ御都合願度候(十噸車貸切1車、積載量二千七〇〇貫内外、俵数凡ソ二〇〇—二五〇俵ノ見込ニテ輸送量充分可能ニ候)

十一月十日

福島県立安達中学校長 笹 田 得 治

第三、四学年生父兄各位

この集荷および出荷計画が計画通り実施されたかは検証していない。文書中に「主食は充分」というのは既に紹介した学徒の回想とはかなりかけ離れている。しかしながら食糧の窮迫してしている当時の状況はこの文書によって十分に伝わってくるであろう。

3. 学徒の日常 — 給与・報償金、学習と娯楽、外出・通信・交際、問題行動 — 給与・報償金

動員学徒の給与または報償金の基準については、第2章第2節に掲載した。それによれば、次のようであった。

① 長期間の学徒は、健康保険の被保険者とし、保険料は受入側で支払うこと。

- ② 勤労時間中の軍事教育等は、週 6 時間とすること。
- ③ 勤労時間は、10時間以内を原則とし残業を含めて12時間を超えないこと。交替制における深夜就業（午後10時から午前 5 時まで）および残業は男子のみとすること。
- ④ 報償費は、一括学校修練隊に納付すること。
- ⑤ 通勤交通費は、受入側にて負担すること。
- ⑥ 基本報償費の算定基準は、

性 別	学 校 種 別	月額(円)
男 子	大 学	70
	専門学校・高等学校・高等師範学校・青年師範学校・大学予科・師範学校(本科)	60
	中等学校 3 学年以上・師範学校(予科)	50
女 子	専門学校・師範学校(本科)・青年師範学校・師範学校(予科)	50
	中等学校	40

- ⑦ 隊員の父母の死亡、隊員の死亡・危篤の際は、旅費を支給すること。
- ⑧ 弔慰金は、業務上の死亡：500円、業務外の死亡：300円。

給与や報償金の支給の実態

この調査を始めたのは、1998（平成10）年のことであった。敗戦の1945年からすでに53年が経過し、動員学徒の記憶にも給与や報償金を支給されたか、ましてその明細などほとんど忘れ去られてしまっていた。それでも数ある学徒の中にはおぼろげながら記憶している者もあり、中には日記に書き入れ大事に保存していたり、支給明細書や昇給辞令などを保存していた者があって実態の一面を知ることが出来た。

◆女子挺身隊員の事例 1944年 3 月26日に芝浦工作機械株式会社鶴見工場に動員された中村高等女子職業学校
の女子挺身隊員は、 3 月29日付で雇員に採用され月給31円を支給され、翌1945年 5 月 1 日付で35円に昇給した。辞令および支給明細書を掲げる。なお辞令は、社名が印刷された縦18センチ×横13センチの用紙の縦書きで、支給明細書は、明細費目が印刷された縦18センチ×横10.5センチの用紙である。支払明細書は、 3 か月分をまとめて掲載する。

青 田 キ ミ

雇 員 二 採 用 鶴 見 工 場

会 計 課 勤 務 ヲ 命 ス

昭和十九年三月二十九日

芝浦工作機械株式会社

青 田 キ ミ

自 今 月 給 参 拾 壹 圓 ヲ

給 ス

昭和十九年三月二十九日

芝浦工作機械株式会社

(相馬市石上 青田キミ蔵)

青 田 キ ミ 殿

昭 和 19 年	8 月分支払金(円)		9 月分支払金		10月分支払金	
給 料	31	00	31	00	31	00
臨 時 手 当	4	65	4	65	4	65
家 族 手 当						
食 事 手 当	13	00	13	00	13	00
皆 勤 手 当						
残 業 料	22	50	15	55	25	05

昭和19年		8月分支払金(円)		9月分支払金		10月分支払金	
計		71	15	64	20	73	70
差 引 金	所 得 税						
	戦死者弔慰金			1	80		20
	健保一部負担金				30		
	厚生年金					2	75
	食※		66				
	報 国 献 金		10		10		10
	報 国 貯 金		50		50		50
	月 掛 貯 金						
	健康保険料	1	00	1	00	1	00
	定期券代						
	購買会差引金						
	前期繰上追加仮払返納金		15		60		76
	計	1	75	4	96	5	31
円位未満繰上追加仮払金			60		76		61
支 払 金		70	00	60	00	69	00

(神奈川 24)

芝浦工作機械株式会社

※意味不明

(相馬市石上 青田キミ蔵)

これによれば、臨時手当、食事手当、残業手当が支給され、雇員の本給31円に対し64円～73円が支給された。残業の時間と算定基準が明らかでないが、残業手当は、本給の50%～80%にもなった。控除されたものには、厚生年金や健康保険料・健康保険料一部負担金などがあり年金や医療費などの福利厚生に加入していたことが分かる。また、戦時下特有の報国献金や報国貯金などの強制的な預金が源泉徴収されていた。彼女は、購買会も利用せずつましい生活をしていたのであろう、控除額は、6円に達せず手取りは、60円～70円であった。彼女たちの記憶によれば、当時会社の課長の月給は、100円であった。挺身隊員の月給は、部署によって異なり、およそ31円～40円位であった。

◆**学徒の事例** 1944年10月19日に横須賀海軍工廠に出動した福島中学校4年生の場合を橋本喜久也の「日記帳」でみると、12／6－10円、1／5、2／2に報償金を支給されている。11月分以外は、金額は記載されていない。11月分は、手取り10円であった。強制貯金でもなければ、金額が少なすぎる。購入品の代金も天引きだったのであろうか。

1944年10月18日に横浜ドックに動員された保原中学校の場合は、本俸58円。この中から貯金、食費等を差引かれて、手取り10円～15円であった。貯金は、先生が給料から差引いて積んでくれた。

金額／月次	19年10月分	11月分	12月分	20年1月分	2月分	3月分
手取支給額	12.53	10.－	15.－	15.－	15.－	10.－
別途貯金額	－	23.80	29.20	35.70	?	?

(神奈川 24)

◎会社に出勤後間もなく衣類が配給された。(単位：円・銭)

上衣：5.45 ズボン：4.90 ゲートル：1.22 足袋：1.03 ちり紙：0.10

◎学徒厚生演芸大会の賞金 会社から出した賞金

1等－30円 2等－15円 3等－10円 4等－7円 5等－5円

◎写真代 キャビネ版1枚：9.17（伊勢崎町「横田写真館」）

（旧制保原中学校第20回・21回卒業生同級会『学徒動員の思い出』所収、石川金吾「思い出の記録」）

1944年7月11日に相模陸軍造兵廠に動員された私立石川中学校5年生の場合を鈴木光男の回想記でみると、次のようであった。

摘要	月次	20年3月分	4月分	5月分	6月分
報償金手取額		9円余	10円35銭	（記載なし）	（記載なし）
支給月／支給方法			6月10日	終戦直前、中学から自宅へ	5月分と一緒に中学から自宅へ
特記事項		病気でかなり欠勤	病気でかなり欠勤		6月27日退廠

（1975年3、4月号『自由』掲載、鈴木光男「語られざる歴史“勤労働員”」）

1944年10月14日に川崎市中丸子の東京兵機に動員された保原実科高等女学校の学徒の場合は、次のようであった。

報償金支払明細通知

拝啓 関根澄子殿 四月	
報 償 金 下 記 ノ 通 二 候	
条 此 段 及 通 知 候 也	
5月10日	
保原高女動員学徒	
会計係	
保 護 者 殿	
4月分報償金	34.13
授業料・修練隊費等	5.50
食費、寮費、布団代	9.10
修練隊特別会計繰入金	0.95
国民貯蓄	－.－
差引 本人渡分	18.58

（保原高等学校『写真で綴る70年、仰ぐは霊山』p.61）

1944年11月8日に、鎌倉の横須賀海軍工廠造兵部深沢分工場に出動した坂下高等女学校の学徒の場合はどうであったか。丹念に記入した日記から整理した給料は、次表のようであった。

通年動員時給料等一覧表

区分		収 入				天 引 分(源泉徴収・控除)					①－② 支給額	記事
		① 報償金	② 残業	③ 賞与	④ 小計	⑤ 食費	⑥ 宿舍費	⑦ 授業料	⑧ 特別 会計	⑨ 保護者 会 費	⑩ 小計	
月別	支払日											
S19 11月分	12／9	9.03			9.03	3.70	1.00		0.33		5.03	4.00
												11/9～ 11/15 日割計算

区分 月別 支払日		収 入				天 引 分(源泉徴収・控除)						①－② 支給額	記事
		① 報償金	② 残業	③ 賞与	④ 小計	⑤ 食費	⑥ 宿舍費	⑦ 授業料	⑧ 特別 会計	⑨ 保護者 会 費	⑩ 小計		
12月分	1 / 2	40.00	2.21	24.00	66.21	25.30	1.00	4.50	1.00		31.80	34.41	
S 20 1 月分	2 / 2											17.87	明細 なし
2 月分	3 / 11											20.60	"
3 月分	3 / 27											18.13	"
4 月分	4 / 28											19.67	"
5 月分	5 / 26											20.36	"
6 月分	6 / 26											20.91	"
7 月分	7 / 24	40.00	4.68	40.00	84.68	17.05	1.00	5.00	1.00	0.40	24.45	60.23	"
8 月分	10 / 13											264.40	" ※
合計												480.67	

※「昭和20年9月末に尾崎先生が横須賀へ出向いて報償金と賞与を受取って来られた。」と注記。

(高松慶子作成「通年動員時、給与等一覧表」)

高松慶子の証言では、当初の説明では「基本給40円の中から食費、授業料その他を差引いた残金の中から10円を本人渡しとし他の残金は貯金する」ということだったが、深沢分校では貯金することなく差引金全額を本人渡しとなっていた。明細は、その月の付添教師により知らされた月と知らされなかった月があったという。前月半ばから当月半ばまでの給料を当初は翌月初めに、3月以降は、当月末に支給された。明細を見ると、賞与は、7月と12月に、それぞれ給料の1カ月分が支給されたと推定される。授業料とか特別会計という名目で修練隊費（交友会費）も控除されていた。こうして支給される手取額は18円～20円であった。

事 務 連 絡
平成6年11月2日

高 松 慶 子 様

厚生省社会・援護局業務第二課

履歴事項の証明について(回答)

このたびご依頼ありました標記につきましては、戦時中、学徒勤労令による勤労協力のため旧海軍工作庁において総動員業務に従事した所謂勤労動員学徒であったので、旧海軍との雇用関係がなかったため当課にその資料が引き継がれておりません。したがって、履歴証明書を作成することができませんから御了承ください。

(高松慶子提供文書)

学徒は、これまでのところでは、辞令の交付の有無が確認されていない。政府の関係省庁は、雇用関係を結んでいなかったとする。このことが、今日、厚生年金等が給付されない理由となっている。高松慶子が雇用関係確認に必要な職歴証明を請求し、半年以上待たされて入手した厚生省社会・援護局業務課の文書は上掲のようなものであった。横須賀海軍工廠の場合は、就労期間が1か年に満たないため年金給付の対象から外されている。その上、報償金であって給与ではなかったし、控除（天引き）内訳を見ても厚生年金や健康保険料などの納付が行なわれていなかった。しかし冒頭に掲げたように、「長期間の学徒は、健康保険の被保険者」で「保険料は受入側で納付する」とされていたが、厚生年金については、何らの規定も示されてい

なかった。通年動員の開始に当たって学校や保護者は、こうした雇用条件を確認したであろうか。荒川信吉が残した安積女学校の記録では、そこまで確認を取っていなかったようである。ともあれ、学徒にとっては、今になって雇用関係がない「勤労協力」であったから対象にならないとは、学校も学徒も欺かれたに等しい心境であろう。

男子学徒については、記憶を辿るだけで控除の明細まで知ることが出来なかった。おおむね額面では、基準の50円が支給されていたようである。錦町（現いわき市）の呉羽化学錦工場に動員された田村中学校の学徒末永正の日記の抄録には、「(1945年) 3. 1、職員室で二月の給料をいただく。二月度は無公休であったので、手当が4円50銭ついたので送金は26円余」とある。報償金が基準の50円だったとすると、残業手当4円50銭と合わせて54円50銭、そこから種々控除されて手取りがいくらになったか。日記抄録に、「10. 4、健康保険に加入、現場へ印持参」と記されている。年金問題については、後章であらためて述べる。

学 習

1944年5月3日発国279号、各地方長官宛国民教育局長文書「決戦非常措置要綱ニ基ク中学校教育内容ニ関スル措置要綱実施基準並ニ生徒ノ成績評価規準ニ関スル件」（荒川「前掲綴」。福間「前掲書」212には、本文の一部のみ）には、次のように明示されていた。

○中 学 校

一、通年勤労働員ノアリタル場合

項 目	時 間 帯	教 科	指 示 内 容	
(1)	勤務時間中		原則 1 週 6 時間の授業時を特設すること	
(2)	特設授業時の活用	体練科教練	最少限毎時凡 3 時	
		理数科数学	軍事科学に関係する教材を重視して取扱うこと	毎週凡 3 時
		理数科物象	現場作業に関連せしめて取扱うこと	
(3)	特設授業に余裕ある場合	国 民 科	出勤教員の担任教科等の関係により他の教科中必要なる事項を課すこと	
		理 数 科		
(4)	適宜自学自修の指導をなすこと			

- 二、八箇月以上勤労働員ニアリタル場合（省略）
- 三、六箇月程度勤労働員ニアリタル場合（省略）
- 四、四箇月程度勤労働員ニアリタル場合（省略）
- 五、勤労働員時間外ノ日曜日ハ概ネ隔週毎ニ教科及修練ニ充ツルコト

○高等女学校

一、通年勤労働員ノアリタル場合

項 目	時 間 帯	教 科	指 示 内 容	
(1)	勤務時間中		原則1週6時間の授業を特設すること	
(2)	特設授業時の活用	家政科育児	毎週凡2時	最少限重点的に要点を課すこと
		家政科保健		
		救護実習	毎週凡1時	実習施設を欠く場合は適宜講話を持って代ふること
		保育実習		
(3)	特設授業時及其他適当なる時間を利用	国 民 科		
		家 政 科		
		理 数 科		
		体 練 科		
(4)	適宜自学自修の指導をなすこと			

二、三、四、五は、それぞれ中学校と同じ。

◇安積高等女学校の授業実施計画

これに対して安積高等女学校では、同年6月6日に、「高学年生徒工場勤労働員下令時措置要綱」を策定した。その中の授業の実施計画（五～七）を要約すると、以下のようであった。

五、授業関係

- 授業は勤務時の間に織込むことなく纏めて授業日を定め出校せしめ学校でおこなう。
- 出校日は、各請入所と協議し、甲学年（1、2、3の3学級）および乙学年（4、5の2学校）を同日とする。
- 監督職員は、すべて生徒と同日に出校し、全校学級につき担任教科の授業をする。

六、教科目

(1)	1週1日出校の場合 措置基準通年動員の場合に同じ		(2)	1週2日出校の場合 (一)教科6時の外に次の教科を課す	
1	家政科育児	2時	1	国民科修身（講堂修身…朝会、第1出校日分と併せて）	1時
2	家政科保健	2時	2	国民科歴史および地理	1時
			3	国民科国語	1時
3	救護実習	1時	4	理数科物象	1時
			5	理数科数学	1時
4	保育実習	1時	6	体練科教練・体操・武道	1時
			7	芸能科音楽	1時

七、授業時間割

(一) 日曜日以外甲学年時間割

その1

甲 学 年	乙 学 年	朝 会	1 時	2 時	3 時	4 時	5 時	5 時
1 組	4 組	講 堂 修 身	育児、全実習		保健、全実習		救護、全実習	
2 組	5 組		救護、全実習		育児、全実習		保健、全実習	
3 組			保健、全実習		救護、全実習		育児、全実習	

各時50分授業、但し朝会あは20分。

その2

学級交代順	朝 会	1 時	2 時	3 時	4 時	5 時	6 時
甲 番	講堂 修身	保 健、 全 実 習			育 児		救護実習
乙 番		育 児		救護実習	保 健、 全 実 習		
丙 番		保 育 実 習					

3学級中1学級は、交互に幼稚園及び保育所に於いて終日実習。

3週間で2日は本校で、1日は実習場において修学修練をする。

(二) 日曜日時間表

1週2回出校の内、1回は日曜日に当たるため全学年5学級出校となる。

学 級	朝 会	1 時	2 時	3 時	4 時	5 時	6 時
1 組	講堂 修身	理 科	国 語	数 学	体 育	歴 史	音 楽
2 組		歴 史	理 科	国 語	数 学	音 楽	体 育
3 組		音 楽	歴 史	理 科	国 語	体 育	数 学
4 組		体 育	数 学	歴 史	音 楽	国 語	理 科
5 組		数 学	体 育	音 楽	歴 史	理 科	国 語

非常に綿密な授業計画を立てているが、安積高等女学校の動員先が、保土ヶ谷化学、日本化学、日東工鉦業など地元事業所であったから計画が比較的容易であったとみられる。他校ではどのような計画を立てていたであろうか。なお、英語の授業が計画されていないが、それは、1942年7月8日付の文部省通牒で、高等女学校の英語が随意科目として週3時間以内に削減され、翌43年2月には、英米語は、敵性語とされ英米語の雑誌名が禁止され、3月1日には、スポーツ用語が日本語化されるなどの事情を反映している。

◇福島中学校の事例

横須賀海軍工廠に出動した福島中学校4年生の場合を橋本喜久也の「日記帳」から抄録する。ただし、工廠の指導員の講義も抄出しておく。

科 目	曜 日	午 前				午 後	
10.23	月			航海実験講義			
10.25	水	海軍体操	中山技術中尉	訓話(戦時工員規則・部組織)	沼田技術少佐	講話(第二科組織)	杉田大尉
10.26	木					海軍体操	
10.27	金	教練		講話(海軍常識)	松枝少佐	訓話(現場の心得)	平山少佐
10.28	土	自習		講話(機雷関係技術／海軍体操)	松枝少佐／中山技術中尉	海軍軍楽隊演奏	
10.30	月					訓話(安全心得)／講話※	平山少佐／野崎大佐
10.31	火			設計講話(機雷の性能)	江川大尉	講話(兵器増産工程と感想)	織方中尉
11.1	水	教練		訓話	杉田大尉	講話	杉田大尉
11.2	木	体操	織方中尉	講話	織方中尉	講話	杉田大尉

※講話の内容：一、清廉 二、確実 三、沈黙の三則、工場労務管理、戦争と兵器。

月 日	曜 日	授 業 ・ 自 習 ・ 読 書 等			受 験 ・ 合 格 ・ 進 学 状 況 等 の 記 事
入寮以前					海軍機関学校・陸軍士官学校合格
11.8	水		力学講義・演習	杉田大尉	
11.9	木		力学演習(昼～4:30)	杉田	勉強ばかりしていて工員にすまない気持。
11.10	金	朝自習			
11.11	土	朝自習			
11.12	日		読書(午前～2:00)		
11.13	月	朝自習			
11.14	火	朝自習			朝自習本日限りで打ち切り。
12.9	土				高等学校一次合格4名。

月 日	曜日	授 業 ・ 自 習 ・ 読 書 等			受 験 ・ 合 格 ・ 進 学 状 況 等 の 記 事
12. 15	金		教科書(物象 1. 2、数学 1、生物)配付		
1. 12	金		朝：寮の仕事、夕方：先生の仕事、他は読書。		
1. 15	月				大竹先生来寮、第 1 期第一次選考結果を報告。
1. 19	金		午前中静養、読書		
1. 28	日		午前中雑談、読書		
1. 31	水				慶応工科合格 1 名。
2. 5	月				1 組の上級学校合格：二高、山高、高師各 1。
2. 6	火		午前中読書、雑談、帰寮後読書		
2. 7	水		午前、勉強。3 時半頃から読書		
2. 8	木		午前、数学勉強。		
2. 9	金		午前、数学		
2. 12	月				受験のための帰宅 3 名。
2. 18	日		終日読書		2. 14 寄宿舎久里浜に移転。
2. 25	日				家より着校期日通知来る。
3. 1	木				陸軍士官学校入校のため帰郷。

入廠当初は、専ら工廠配属の海軍将校による訓話・講話・講義などの研修に費やされた。各自の勉強は、11 月半ばまでは、出勤後自習時間が設けられていた。その他総員点呼の午後 7 時 30 分から 9 時までの間が充てられた。

◇田村中学校の事例

先ず 1944 年 8 月 26 日に横浜ゴムに出動した田村中学校 4 年生佐久間林作の「昭和 20 年度日記帳 2 号」(1945 年 3 月 1 日～3 月 28 日) から抄出しよう。

月 日	曜日	訓 話	学 習	受 験 ・ 進 学 な ど の 特 記
3. 1	木			受験帰省から職場復帰
3. 2	金			夕食時軍人勅諭奉唱
3. 3	土	高久田先生		
3. 5	月		終日日誌整理と勉強	在寮。自由行動許可
3. 6	火	金沢工専教官訓話		工専教官と会食。二期合格者発表通知届く
3. 7	水			2. 31 発表合格：米沢工専 1. 東京第三師範 1. 特幹入隊 1.
3. 8	木	大正大学の坂戸教授講演「敗戦国の惨状」	修身考查(600-800 字)	
3. 13	火	工場疎開の話(七月までは此処にいないだろうと)		高久田先生の説明「昼食時、度量衡室で」：新設の海軍特別幹部練習生の話

月 日	曜日	訓 話	学 習	受 験・進 学 な の 特 記
3.14	水	みな工場疎開を希望しているが、精錬課は残るだろうとの話		
3.15	木		無機化学	
3.16	金	竹内先生(銚子空襲)		
3.17	土	高久田先生(非常準備)		
3.19	月	高久田先生(1カ年授業停止の新聞記事)		
3.20	火	高久田先生講演(宮沢賢治)		
3.21	水		数学	欠勤12日間は受験で出勤扱い
3.22	木	高久田先生(夕食時、硫黄島玉砕の話)	午後数学考査(一次二次方程式・根・単振動・周期・振幅)	憲兵派遣所にて出勤祈念撮影、工場長・重役臨席
3.23	金	朝礼、玉砕の新聞記事を読む		海軍特別幹部練習生願書作成
3.24	土		自習、午後数学2類(新制数学)を購入	4年生の父兄会
3.27	火	校長訓話(夜)		父からの速達(父兄会で農業要員となるようにと先生から話されたと書いてある)
3.28	水	第19回卒業式(護謨工場の青年学校で)		

加里興業に動員された田村中学校3年生の状況は、箱崎一平の「日記」によれば、およそつぎのようであった。

月 日	曜日	学 習
1.1～ 2.25		(この間、関係記事なし)
2.26	月	自習時間に物象2類の考査。
2.28	水	突然、6時半から修身考査。
3.1	木	物象・数学の問題渡される。物1・数1・数2考査予告。
3.7	水	呉羽食堂で昼食後、物象1考査。
3.9	金	矢筈先生(徴兵検査を受けて)帰ってこられた。先生にも召集が来るかも知れないので、今度は考査をしないそうです。
3.14	水	昼、呉羽食堂で数1考査。
3.18	日	数2の勉強には大分悩んだ。しかしやうやくやってみた。どうやら出来そうだ。
3.20	火	明日は数2の考査があるので、休憩時など皆なかなかやっている。
3.21	水	昼休、呉羽で数2の考査があった。自分の好きな問題だけなので大体出来た。もう考査の心配は毛頭ない。

福島中学校や田村中学校の事例から見て、安積高等女学校の授業計画の実施が困難であり、どの程度実施されたか、そのまま受け入れることはできない。このような現実にもなお学校本来の学習を主眼とする

方針を堅持しようとした心意気を評価したい。

1944年10月19日に国産電機小田原製作所に出動した若松高等女学校4年生の回想は次のようであった。

(学校から工場に交代で指導に来られる先生は、) 工場を廻って夕方に作業が終ると寮で過ごします。学徒もヘトヘトに疲れて帰って来るから勉強どころではなかった。ほんとに燃えてる方は、夜、夜鍋に勉強してもらったかどうか。あのころは煎餅蒲団で、その上、全然火は使われなかった。朝、氷を割ってその水を汲んで雑巾を揉みだしてお掃除でしょ。みな手がもう……裸電球を両手で包むようにして10まで数えるようにして「誰々さん遅いよ」などと言いながら部屋の10人が順番にかじかむ手を暖めた。

(1998. 9. 11. 座談会「国産電機動員の思い出」より)

工場と民間事業所、あるいは野外の土木建設工事などの違い、上級学校や軍関係学校への志望か、就職あるいは帰郷し農業要員となるかによっても学習への意欲が異なったであろうことは、容易に推測される。ましてや京浜・日立・磐城のように空襲の危険と工場疎開の不安定な状況に置かれた動員学徒が、不安を抱き学習意欲を失いかけていたことは否定できない。

娯楽

1944年8月7日、日立製作所多賀工場(国分工場・桜川工場)に動員された磐城中学校4年生の生活を『磐中四十六回卒学徒動員の記』から紹介しよう。

◇工場での休憩時間、一高生が岩波文庫をむさぼるように読んでいたのが印象に残っている。昼休み、工場脇の空地で寝ころんだり、話し合ったり、隠れるように喫煙している者、参考書を開いている者もいた。中には高女生の中に入って話している軟派の者も若干いたようだ(佐々木亮)。

◇動員されて間もない晩夏、休日のひと時を河原子海岸で過ごしたことがあった。吾々には農家の誰かが実家から持参した貴重な白米に目をつけ、各自飯盒^{はんごう}を持ち寄って米を分けて貰い、大騒ぎしながら水汲みに走る者、焚木を拾い集めて来る者等、欣喜雀躍一斉に炊飯にとりかかり漸く夢にまで見た銀シャリを腹一杯にし暫時満腹感と解放感に浸り、楽しく語りあったのは……(四家 剛)。

◇寮での勉強は全くなく、各自、部屋で机もない所で自習、進学するものは大変だったとおもいます。読書が空腹で互におちこんでくると、十一号室歌や「誰か故郷を思わ(は)ざる」「バタビヤの夜は更けて」「新雪」などを合唱したものです(星野忠太郎)。

◇一部で部屋の押入れに隠れて喫煙してた者がおった様で火事の心配があった。十一月頃か寮生の慰安大会があり映画「無法松の一生」が上映され興奮のルツボに化したことを記憶、同時に演歌「勘太郎月夜唄(笠?)」「長崎のオランダ坂」が印象的。田村中学の五年生が隣の寮におりその代表が歌った「新雪」の歌はなまなましく当時を思い出す(桑田徳三)。

◇大沼寮と工場との行き帰りは、唄のカタルシスの連続であった。誰しも欲求不満と空腹の中にあって、私はあの少しの時間が、悦楽と唯一の慰めのひとときであった。そして、それが人生を支配する一生の生き甲斐ある仕事になろうとは、誰しも想像できない一過程であった。「サーカスの唄」「人生の並木道」を唄い「カチュウシャの唄」や「ズンドコ節」に明けくれ「予科練の唄」で発奮の糧としたその行き帰りの歩みに、私の青春の投影をみる事が出来るのである。そしてある日曜日の午後、日立多賀の映画館で観たあの「新雪」は、今でもはっきりと眼の前に映し出してくれる。中でもこの映画の中の主題歌「新雪」は今も口ずさみ、私の話題の一頁を語ってくれる。この作曲者は浪江町出身の佐々木俊一であり、唄っているのは灰田勝彦であった(石河 清)。

◇そのほかどんな歌を唄ったか? — 炭鉱節、ツンダラーカヌサマヨーという沖縄の歌を歌って、輪をつくって、たわいない所作の入る踊りを踊った。軍歌は全然歌わなかった(滝田都三)。

◇軍歌や映画主題歌などを合唱もした(横山 哲)。

1945年2月に日立兵器勝田工場に動員された平工業学校機械科2回生の寮生活は次のようであった。

仕事はつらかったが寮に帰れば庭に花壇をつくって郷愁を慰め、月夜などは庭に出ていわき名物「ヤッチキ踊り」や「常磐炭鉱踊り」を繰り広げ昼の疲れをいやすこともあった。

(毎日新聞「高校風土記」[42] 学徒動員一平工②一、昭和49年12月12日)

1944年9月8日に呉羽化学錦工場（相模海軍工廠）に出動した田村中学校3年生末永 正の「中学三年生の記録」と同年10月19日に加里興業勿来工場に出動した同じく田村中学校3年生箱崎一平の「日記」とから抄出しよう。

年月日	呉 羽 化 学 の 生 活	
44. 9. 10	勿来関見学行軍。茨城県平潟町八幡宮に参詣。	
9. 30	明日4年生が出発して三春に帰るので、夜、余興会（9月18日、4年生来社）。「呉羽新聞」が好評を呼んでいる。	
11. 6	植田町へ外出。	
11. 8	ハーモニカバンド結成式。	
11. 9	夜、紙芝居。	
11. 23	錦座で慰問団演芸会。	
12. 9	「呉羽新聞」第4号配付。	
12. 12	夜、錦座で産報の慰安会浪曲。途中で警報、帰寮。	
45. 1. 1	帰省。登校。	加 里 興 業 の 生 活
		病気療養のため帰省。郡山の病院へ通院。
1. 3	帰寮。	
1. 4		郡山で映画「かくて神風は吹く」。
1. 5	夜、大広間で新年会兼伴野先生の送別会	
1. 10		帰寮。
1. 15		全員公休。平潟勿来方面へ行軍。大津港まで行き100噸の木造船内を見学。日立製作所の煙突の煙を眺め、帰途平潟港で海賊鯨を見た。
1. 18		夜、錦座で漫才・曲芸を見て愉快地過ごした。
1. 27		映画「英国崩るる日」を観た。大映作品で香港攻略の劇的映画で台湾沖航空戦の日本ニュースがあり17,8歳の少年が出ていた。
2. 2		夜、荒井先生の盛大な送別会。漫才や相撲の呼出などの余興があって腹が痛くて涙が出るほど笑った。
2. 4		帰省。（2月5日、平で適性検査、合格）
2. 6	高久田先生送別会。	帰寮。
2. 11	夜、錦座で呉羽・相模工廠の素人演芸大会。	呉羽の女工さん達が主にやった。幼稚園という寸劇はとても面白かった。田中生からは浪曲・ハーモニカなどがあった。
2. 13	斎藤先生送別会。	夜、映画観覧。
2. 17		慰安会。
2. 20		休憩時に菊地君より特攻隊の歌を習った。歌を歌ふと気分がとてもなごやかになって、する仕事にも力が入る。
3. 7	相模工廠演芸大会。	「加里新聞」が発行された。夜、錦座で相模の演芸大会。相模には挺身隊など来ているせいか呉羽のよりずっとうまかった。データラム楽団などは愉快的風変わりな楽団だった。
3. 19	錦座で映画。	日本ニュース、神風特攻隊など感激を新たにするものがあった。大映の「三代の盃」。
3. 23		夜、三月生まれの人の誕生会が食堂であった。

呉羽化学・相模海軍工廠・加里興業は、しばしば演芸大会をも催し、映画の許可のあるなしを別にしておく見ている。

当時、学徒の間で愛唱された歌の歌詞を掲載し、それにまつわるエピソードを紹介しよう。

【新 雪 ―当時の学徒の本当の気持ち―】

五所平之助監督、水島道太郎・月丘夢路主演の大映映画「新雪」の主題歌として作られた歌で、映画の源作は、朝日新聞に連載された藤島桓夫の同名の小説である。映画は、1942（昭和17）年10月1日に封切られた。これは、月丘夢路のデビュー映画となった。

映画の中では、メロディーしか流れなかったが、主題歌のレコードも同年10月に発売された。コンチネンタル・タンゴのような曲調と映画の雰囲気マッパし、灰田の人もプラスして、よく売れたという。B面には、宝塚出身の月丘が、月丘の役（千代）にちなんだ「千代の唄」を吹き込んでいる。

まさに戦争一色の中で戦争とは全く関係のない佐伯の歌詞が、明るく気品のある佐々木の曲とともに歓迎された。このことは、当時の国民なり動員学徒たちなりの気持ちに共感したからであろうか。

（ユークャン『昭和の流行歌歌詞集』 p. 20）

新 雪

作詞 佐伯 孝夫

作曲 佐々木俊一

唄 灰田 勝彦

- 一、紫けむる 新雪の
峰ふり仰ぐ このころ
ふもとの丘の 小草をしけば
草の青さが 身にしみる
- 二、けがれを知らぬ 新雪の
素肌へ匂う 朝の陽よ
わかい人生に 幸あれかしと
祈る臉に 湧くなみだ
- 三、大地を踏んで がっかりと
未来へ続く 尾根づたい
新雪光る あの峰こえて
ゆこうよ元気で 若人よ

惜 別 の 唄

作詞 島崎藤村

作曲 藤江英輔

- 一、遠き別れに たえかねて
この高殿に 登るかな
悲しむなかれ 我が友よ
旅の衣を ととのえよ
- 二、別れといえは 昔より
この人の世の 常なるを
流るる水を 眺むれば
夢恥かしき 涙かな
- 三、君がさやけき 瞳のいろも
君紅の 唇も
君が緑の 黒髪も
またいつか見ん この別れ

【惜別の唄 ―陸軍造兵廠動員学徒が作曲―】

1944年に、東京・板橋の陸軍第二造兵廠に動員された中央大学予科2年の学徒、彼の世界的ヴァイオリニスト巖本真理と小学校の同級でもあり自身もヴァイオリンを弾く藤江英輔が、島崎藤村の「高楼」にメロディをつけた。原詩の「悲しむなかれわがあねよ」を勝手に「悲しむなかれ我が友よ」と書き換え、原詩8連中、1、2、5の3連をピックアップして「惜別の唄」と題名もつけ、学徒出陣する友人たちを、この唄で送り出した。そして45年8月1日には、彼もこの唄で、静岡の航空隊に送られた。入校してから2週間で敗戦となった。以前動員先で一緒だった東京女子高等師範学校の生徒たちが、やがて教壇に立ちこの唄が歌われ続けた。戦後の50～51年ごろ中央大学の合唱部が、中央大学の学生歌としてコロンビアからレコードにした。それから10年、「うたごえ喫茶」ブームの中で、キングレコードが、「旅の唄」をレコード化したが、それは、宇田博の「北帰行」の替え歌で問題になり、コロンビアが、小林旭の「北帰行」をレコード化した。藤村の三男蒔助と職場新潮社で机を並べていた藤江は、藤村の「高楼」の使用

許可をもらった。それが、「北帰行」のB面に収められた。

この唄に送られて逝った友らの顔を思い浮かべながら「私は80歳になったのに、友だちはみないつまで経っても若いままなんです。」と、藤江はいった。

(合田道人『本当は戦争の歌だった童謡の謎』の「9 惜別の唄」より)

外出・通信・交際

時局柄、外出も通信も交際も、男女の交際は特に制約があった。そしていろいろのハプニングやエピソードが書かれ語り継がれている。上司などの工員が学徒を自宅に招いて食事を共にするとか、看護婦や女子事務員が親切にしてくれたとか、地元の学徒が食料を分けてくれたとか、既に幾つか紹介してきた。女子挺身隊員や女子学徒が、若い将校や下士官や大学・専門学校・高等学校などの学徒に憧れたり思いを馳せたりすることは、戦時下といえども、青春を生きる若者のもだしがたい心情であった。そしてそれは、男と女の淡い慕情だけではなく苦楽を共に分かち合った同窓・同級・同室・同班の仲間の友情にも現れた。

1944年10月17日に、藤沢の渡辺海軍施設部隊に配属され海軍飛行場建設に動員された磐城中学校3年生を待ち受けていたのは、次のような状況であった。

◆**検閲を逃れて外出日に投函** 宿舎は第一線部隊と同じプレハブ木造の平屋建てで、ところどころをロープで支えた移動式仮設宿舎であった。われわれは、この宿舎を「鶏小屋」と呼んだ。板張の床に窓といえば幅二メートルの連子格子の窓があった。その年は厳冬で夜間、格子窓の隙間から粉雪が舞い込み、寝具の上に積もることもあった。兵舎には畳などなく、板敷きの上にゴザが敷かれていた。就寝時には厚い藁布団をしき、その上に毛布三枚を封筒型に折ってもぐりこんだ。二等毛布一枚と三等毛布二枚では寒さがこたえた。

後日、食料不足のため親元宛に食料を送るようハガキを出したが、検閲でアウトになった。窮すれば通ずるの譬えで、外出許可日（日曜日）にこっそりハガキを投函して耐寒用のドテラなどの衣類にゴマ塩、煎り豆などを縫い込んで送ってもらった。しかし成功したのは初めのうちだけで、伝染病の原因になるとして没収された（神奈川の学徒勤労働員を記録する会編『学徒動員記録』所収、磐城中学校小野善朗「藤沢で飛行機をつくった」）。

信書検閲のもう一つの事例を紹介しよう。なお、1945年4月から私立石川中学校の3年生は、沢田の飛行場の建設作業（現石川町沢田地区の陸軍棚倉飛行機応用練習場）、ついで石川山の採石作業に従事した。地元なので自宅からの通勤であった。

◆**姉さんへの手紙で憲兵隊へ出頭命令** そんな折、小生の姉が、当時の満州国大連に嫁いで行ったので、時々家族の様子や内地のこと等を記してお互いに勝利の日まで頑張ろうと便りを交わしていた。五月の某日であったと思うが、身体を害して1日家で休んでいた。そこへ一通の葉書が舞い込んだ。何気なく目を通すと「某月某日午前十時まで出頭せよ。」との文面であった。発信先を見て驚いた。憲兵隊からのものであった。表を見ると二度びっくり、小生宛のものであった。何が何やら出頭しなければならない原因に思い当たらずオロオロするばかりであった。

いよいよ出頭の日がきた。出頭先は郡山の現在ある裁判所であった。朝、藁草履をはき石川町を避け野木沢駅より乗車した。時計を見ると出頭時刻が迫っている。走りながら道順を聞き漸く憲兵隊前に到着した。憲兵に葉書を恐る恐る差し出すと「ついてこい」と言って一間四方位の部屋に入れられ「ここで待て」と錠をかけられた。漸く我に返って耳をすますと、隣室から大声と罵声と共に尋問の声が洩れてきた。身の縮むおもいで待っていると、「鈴木こい」と尋問の声が洩れてきた部屋へ連れていかれた。伏目がちにしていると、突然名前が呼ばれ、「どうしてこのような手紙を書いたのか」と姉宛の手紙を眼前に突きつけられた。観ると手紙の所々墨でぬりつぶされている。まさしく自分の書いた手紙であった。内容その他について約20分位尋問を受けた。主なものは、姉は何をしているか、どうして大連に行ったのか、等々であった。ここで初めて出頭の原因がわかったのである。尋問に対して小声で震えながら、勤労働員で自分も国の勝利の為一生懸命頑張っている事を知らせただけで他意のないことを繰り返し説明した。すると驚いた事には、憲兵士官は、俺は君の先輩だと声を落とし、二度と軍事機密にふれる手紙を書いていけない、君の国を思う心情は

理解できたので、軍法会議にかけるところだが、今回は許す、我が国の勝利まで頑張ってもらいたい、と諭され帰された。その士官の名前は忘れたが、当時は先輩は有り難いと何度思ったか知れない。

しかし、戦争と言うものは、人権尊重も言論の自由も無視し、本人の許しもなく無断で開封し検閲する暴挙を犯す恐ろしいものであることを知らされたのである。（『前掲書』所収、鈴木廣茂「勤労働員と憲兵隊出頭命令」）

次に、1944年8月7日に、日立製作所国分工場に動員された磐城中学校4年生の場合を紹介しよう。

◆遠い思い出真鍮の光沢 私と岡田博行君の二人は、多賀国分工場常備機械の中にある部品仕上げ加工の作業に廻された。大きな鉄板の作業台を囲んで計六名がグループ、トラホームにかかっているような目つきの悪い責任者の遠藤さん、温和しい小柄な工員の若い吉田さん？一寸意地悪な幹事の重量級の小俣キンさん、色白で可憐な前髪の橋本さん、それに吾々中学生の二名、（中略）若い可憐な前髪の彼女とは到頭最後まで殆ど口をきくこともなく過ごしてしまった。岡田君も私と同様でお互いに余程純情な生徒だったに相違ない。戦時中の数々の苦い思い出の中にも何かしら心暖まる面影と共に学び励まし合った友達の表情がちらついてくる。（中略）

工場での作業が終わって寮に帰るときは、薄葉信義君（故）を誘って一緒に帰ることが多かった。彼の作業場は同じ建物の中ではあるが私の所から少し離れていて、油に汚れた小型のボール盤が並んでいる女工達（挺身隊か）の中に交じって、彼は彼の体に似合った小型のボール盤を操作していた。それ等女性の中に特に目立った女性が居た。坂本さんと言って吾々より二つ三つ年上だったろうか、とにかく当工場内では中々評判の美人、臭い表現で彼女には申し訳ないが、よく工場のトイレの中などにも彼女の名前の落書きを見かけたのを思い出すくらい。

学校工場化が決まり工場引揚げの迫った日のこと。私は何時ものように彼の所へ寄って寮へ帰る途中で彼から真鍮製の文鎮を渡された。彼は笑いながら、お別れの記念にと坂本さんから預かってきたと言うことだった。度々顔を合わせることはあっても、未だ一度もはなしたこともなかったのにこの自分を心を留めていてくれたのだと思うと驚きやら嬉しいやらで異常に興奮したのを覚えている。（中略）

その思い出の文鎮も儚く短い運命を辿って今はない。学校工場に通い始めて間もなく、何も知らない母は惜し気もなくお国の為とばかり、私の気のつかないうちにこっそり断りもなく供出してしまったのだ。何故か辛かった筈の動員生活に於て今でも遠い思い出の中に美しくきらりと真鍮の光沢を放っている。（後略）

（『磐中四十六回卒学徒動員の記』所収、四家 剛「多賀工場での思い出」）

同じく日立動員学徒の男の友情を紹介しよう。

◆兄弟とはかくのごときもの 私には兄弟がない。俗に言われている一人っ子。昭和十九年八月、学徒動員にて日立多賀工場へ。そして大沼第四寮十一号室へ。生まれてはじめての寮生活……「マカナイ部隊襲撃」「サツマイモ畑荒らし」見張り班、行動班、処理班と部屋全員して目的を遂行。又、隣室の十号室とささいな事での対決。これ又全員して防空ズキンをかぶりナグリ込みをかけた。

私が伝染病（ジフテリア）に罹病した折、徹夜で看病してくれたあげく、当時、切符も買えない時なのに、二、三の友は、心配して平の自宅まで送ってくれた。この動員中の出来事は、思い出したくもない、考えるもイヤとの人もある様だが、私にとって四十数年前の六ヶ月間に、兄弟とはかくの如きものと教えてくれた、忘れられない出来事である。（『前掲書』所収、岡山一之「兄弟」）

次に、1944年7月11日に、相模陸軍造兵廠に動員された私立石川中学校5年生の思い出を紹介する。

◆映画「暖流」の水戸光子 われわれはまず現在補給廠の本部になっている造兵廠の病院跡をたずねた。当時は病院とは呼ばず医務課と呼んでいたが、立派な病院であった。原君はこの病院に腸チブスで二カ月以上も入院していた。彼のいた病棟は老朽化して、Danger という札が掲げてあって閉ざされていた。原君は昔自分の入室していた部屋をそっと外からのぞいて感慨深げであった。

原君の話によると、当時、同一の機械を昼勤と夜勤と二人で使っていて、彼と同じ機械を使っていた工員が腸チブスになり、それから感染したということである。私は彼と同室で、彼が発熱したとき一所懸命看病

したわけだが、よく感染しなかったものである。

この病院には私も何度か通った。映画「暖流」の水戸光子の看護婦によく似た新潟県から来た看護婦さんがいて、中学生の憧れの的で、その看護婦さんに会うのがたのしみだった。美人の女医さんもいて、畏敬の念で皆憧れていた。(石中三八期生記念誌『激動の中に生きて』所収、鈴木光男「相模陸軍造兵廠の一年(抄)」)

問題行動

疾風と怒涛の時代 (Sturm und Drang = シュトゥルム・ウント・ドラング)、そのように例えられる青春時代の少年少女たちを丸ごとこれまでの生活空間と全く違う大都会の、密集し排気や排水が鼻を突く工場で慣れないハンマーやバーナや旋盤を使い、疲れた身体をあるいは古びたあるいは急拵えの宿舎に横たえさせる。言葉も違う他校との接触もある。先に紹介した回想記にもあるように襲撃や荒らしなどしばしば起きたに違いない。喫煙、食料不足の苦情などから職長への抵抗、賄荒らし、文句の多い伍長への報復などのほか学校間のトラブルなどもあった。それらを日記や回想録から拾ってみる。

◆悪のかずかず ●花咲寮にきて5日目の夜、望郷の念にかられ、部屋の窓に腰かけながら小国君と2人で、ハーモニカを吹いていたところ、吹くことを止めろと叱られた。●11月28日、武山校長先生が来寮、夕食後訓話あり、曰く「万引きする者がおる様だから、今後斯様なことのないようになされたい。」指摘のとおり多少流行したこともあったようでした。●会社では疏安を造っておりました。工員はこれを会社から運び出し、農家にもってゆき食糧と交換するのです。吾々生徒もこれをまねて、やっと寮まで運んだところ、翌日先生が各部屋荷物の検査をおこない、あわてて大事に持ち帰った疏安を便所にすててしまいました。●会社の電気課にはゴムのベルトがたくさんありました。このベルトを切って靴の半張りやゴムぞうりをつくる再生産の方法を修得？利用した人もかなりいたのではないのでしょうか。●空襲警報のサイレンが鳴りひびくと、必ず防空壕にはいりました。防空壕は、寮の外と階段の下(地下室)にあり、階段の下の防空壕は寮の食糧庫でした。ここに避難したときは、米びつの中から少々借用してくることがあったそうです。●空襲警報が発令されますと、先ず先生が避難するよう叫びながら外に出ます。生徒はわざと遅く部屋を出てすぐ防空壕に入るのかとおもうとそうでなく、やおら先生の部屋に侵入して灰皿の中からタバコの吸殻、或いは長いまま1本、2本借用してくる勇敢な生徒もおりました。そのタバコを吸ったのか灰皿を掃除してくれたのかは聞き漏らしました。

(保原中学校第20、21回卒業生同級会『学徒動員の思い出』所収、石川金吾「思い出の記録」)

◆偽の外出許可証 夜勤明けのある日のこと。空腹で寝つかれない。たまたま使われなかった外出許可証があり、数名で苦労してこれを改ざんし、守衛にみせ首尾よく外へ出た。外へ出たとたん、脱走した囚人のような、また自由なすばらしい世界へ迷い込んだような、妙な気分襲われた。農家の庭先、近くの畑から盗んだ芋にかじりつき一同大満足。ところがその間に偽の外出証であることがばれていたのである。寮へ帰ってから殴られたり説教されたりで兎に角放免となった。部屋に戻って聞かされたことは、寮の全員が叩き起こされ、中庭に全員集合、首実検されたとのことである。特に中村嘉雄君は私と間違えられて大分追及されたそうで、今でも申し訳なく思っている。ただしその時の外出組みの同志？が誰だったのか、記憶が欠落している。(石中三八期生記念誌『激動の中に生きて』所収、山口嘉勝「我が半生折々の記」)

◆脱 走 また、五年生の七月学徒動員で神奈川県軍需工場(正確には、軍事工場)で働いていたこと、その時、休暇を取って帰郷する時、明朝出発の許可がとれないでいったところ、何人かの方から何処そこの場所からだと出られると教えられ、その気になって網のうえから兵器学校の方にとび下りた処、(厚木工校生が何かして逃げ)非常線を張っていたのに捕まり、寮に監禁の上説教、後に停学処分となり、帰郷させられました。卒業式にも出られずに終った。後日、卒業証書をいただきましたが、色々あった中学生生活でした。

(『前掲書』所収、小貫一美「吾が人生」)

◆賄荒らし 寮の生活は思い出が多い。動き盛り、伸び盛りに食事量が少ない。まずい、少ない、夜、夢にさ

え出る。何時しか自他とのお碗の盛り具合まで気になる。なんとあさましい。こんなにも食べることに執着する自分が情けなく、農村の出だけに割り切れぬ思いであった。そんな切羽詰った矢先に、食堂の賄荒らしが起こった。翌朝全員が近藤先生（？）に懇々と非人間的な行為だと論された。ことの善悪は別として、先生のお話を多感な感性で、一人ひとりが、どう迎えたであろうか。私はこの時、今迄堆積し蓄積されて来た執念の山が、一度に崩れ深海の暗い彼方にどんどん沈んで行き、「渴しても盗泉の水は飲まず」と言う文字が浮んで来た。これが苦しかった大沼寮で得た最大の教訓であり、処世観ともなった。（後略）

（『磐中四十六回卒動員学徒の記』所収、鎌田好見「私の処世観を得た多賀工場通年動員」）

◆文句の多い伍長への報復 職場は多賀国分工場、作業内容は航空電波探知器の組立てと配線で特別仕事がついと言う感じはありません。指導してくれたのが一高生でみんないい人ばかりでした。彼らには工場の課員幹部の人も大変気をつけていたようです。後日、寮にも遊びに来てくれていろいろとアドバイスをいただきまた徹をとばしてくれました。工場の人も親切に作業の手順を教えてくださいました。なかに文句の多い伍長さんがいましたがみんな三日に一回位彼の通勤自転車の空気を抜いてウッポンをはらしました。

（『前掲書』所収、星野忠太郎「無題」）

◆食事の量でストライキ 1944年10月19日に、東京衡機溝ノ口工場に動員された会津中学校3年生蔭山淳の「日記」には次のような記事がある。

11月4日 昼食はカレー蕎麦が出た。非常においしかった。段々ご飯の量が少なくなってきた。

12月13日 本日は休日であった。銀座へ出て食堂でうどん二杯にありつく。満腹を感じ寮に帰る。溝ノ口の決戦食堂で雑炊を二杯食べた。昼食は水とん。今日程満腹を感じた日はない。

12月16日 夕食の時ストライキを起こす。ミカン五ヶ配給さる。

12月20日 昼食の時ストライキを起こす。

12月21日 朝食後、稲葉指導員より「不平をもらすな」と説教をくう。夕食の時飯が少ないのでストライキを起こす。明日より少しは多くなるだろう。ミカン五ヶ配給さる。

そして、蔭山淳は、後年、中学校でこれを教材化するに当り、次のような感想と解説を補足した。

これらの日記について私なりに解釈を加えると、食堂に入る前、円陣を組み母校の応援歌を歌って氣勢を挙げたのがそれではないか。誰が言い出したのかわからないが、何分間か箸を持たないことにして食堂に入ることがあったのかもしれない……………などだが、私には驚きがあった。それは、ストライキの内容が不明確であったとしても、あの戦時体制一色の時代にストライキという言葉が残っていたことである。

しかし、会中五三会ではこうした『戦闘帽の中学生たち』の文集の中の級友が寄稿した日記には、なぜかその日だけ、記述がスッポリと抜けていた。（神奈川の学徒動員を記録する会編『学徒勤労働員の記録』所収、蔭山淳「日記に見る動員学徒の“ストライキ”」）

◆連判状 「おい連判状に署名しろ」といって級友が書状のようなものを持って来たのは、8月も末の頃であった。

12時間労働でしかも1週間ごとに夜勤というのは、16才の少年にとって相当に苛酷な労働であった。しかも田舎の子どもにとっては工場での労働はあまりに異質であった。班長とか班長代理とか言う人の、軍隊でいえば下士官に当たる人達の取扱は、子供達にとっては何ともやり切れない底意地の悪さを感じさせるものであった。その上寮が不衛生で食事も悪く、そのために到着早々から病人が絶えなかった。赤痢や腸チフスになる者も少なからずあった。この種伝染病患者が出ると寮が隔離され、部屋から外にでることを禁じられた。そういう監禁状態もわれわれを不安にさせた。

こうした不安が重なって、われわれは間もなくホームシックになり、何とかして家に帰りたいと願うようになった。しかし戦力増強に忙しい造兵廠は帰郷はおろか外出さえ許さなかった。

そのとき、郷里の方でジルコン工場が建設中で、そこにかなりの人数が動員されているという話が伝わってきて、われわれは同じく働くなら家から通える所で働きたいということになり、ジルコン工場移転の希望を連判状にしたためて、学校や県庁などに提出することになったのである。やがて9月も少し過ぎた頃、学

校から教師がやって来て、連判状について説明があり、結局ジルコン工場への転進は不可能で、この造兵廠の生活環境の改善をお願いするという結論に達したむねの話があった。

その晩、生徒達は一つの部屋に集って話しあった。皆興奮してなぐりあいにもなりかねないほどであった。しかし、いくら話しあったところで16才の当時の中学生に何ができるというものでもなかった。

この連判状の中心になった何人かの人物は、停学ということで帰された。やがて帰ってきたが、その傷は、停学を受けた者も受けなかった者も、長らくいえることはなかった。

やがてわれわれはこの造兵廠ではたらくことを余儀なきものとして受け入れて行った。われわれはすでに青少年学徒の双肩にありという使命観をたてまえとして生きることになれていたのである。しかし、それはわれわれの気持をますます荒んだものにさせていった。外出も自由にならず、苛酷な労働と貧しい寮生活と軍隊の内務班にも似た工場の雰囲気の中で、生徒達は、自分ではどうすることもできない不満をお互いに爆発させては、よく喧嘩をした。

山国で育ったわれわれには造兵廠の庭から遥か遠くにみえる丹沢の山々が僅かの慰めであった。晴れた日の富士山がみえたときには声を上げて感激したものである。

(『前掲書』所収、鈴木光男「相模陸軍造兵廠の一年(抄)」)

※12時間労働と夜勤：1935年、改正工場法によれば、16歳未満の者及び女子の1日の就業時間は、11時間を超えてはならない(第3条)。また、午後10時より午前5時までの間に就業させてはならない(第4条)。

と規定されていた。

※ジルコン工場：現在の石川町歴史民俗資料館の位置。1944年8月に、石川町字高田に建設される。1945年4月中旬、ジルコン工場に理研の飯盛博士と作業員らが疎開して来る。

◆日立多賀工場の大沼寮でのトラブル 一棟と二棟は磐中、三棟は田村中学と分けた寮生活であった。トラブルは両校の共同生活上の問題で、特に今回は入浴問題がその原因である。両校生の意気盛ん、今にも喧嘩が始まろうとしていたが、先ず話し合いと、全権特使として後藤君、武藤君と私の三人、田中の寮の二階に乗り込んで談判した思い出がある。途中、彼等も各部屋から出て今にももの態、小さい私は少々無気味さを感じる。田村中学の代表三人と話し合い円満解決した。

(『磐中四十六回卒学徒動員の記』所収、片寄金治「田村中学とのトラブル」)

こうして生徒同士が冷静に自主的に解決し一触即発の危機を救ったのは未だしも次のような事件もあった。

◆白河中と日川中の乱闘 1944年7月10日に、横須賀海軍工廠に動員された白河中学校5年生について紹介しよう。

昭和15年4月、白河中学校に入学許可された私達は104名、2学級でスタートした。その後学年を追うに連れ、転校、休学があり、4年生になってからは、海軍予科練、陸軍少年航空兵、戦車兵への入隊が多く、陸士、高専校へ4年生修了時で20数名入学し、昭和19年4月、5年生になった時は70名であった。6月10日白河中学5年生に動員が命令され、7月10日、白河駅を出発した。逗子駅より歩いて約20分の沼間第五寄宿舍第二棟に入寮する。(中略)寝不足、空腹が続く辛い日の連続で、夜勤帰り、凍てつく冬の夜空に、北斗七星のきらめきを仰ぐと、故郷がむしように恋しくなった。そんな荒涼たる生活から生ずる鬱気が爆発したのか、3月6日の春雨の降る宵、些細なことから、第1棟に居住する山梨県立日川中学生との乱斗があった。こわい十文字先生(引率教諭十文字鯛助)が帰省中で在寮せず、卒業を間近に控えた解放感もあったのか、突風の荒れるが如く、相手寮に乗り込んで散々に暴れた。日川中学生も呆れたことだろう。

3月28日、寮の食堂で卒業式が举行された。(以下略)(白河高等学校『七十年誌』所収、中19川瀬正三郎)

※「些細なこと」：同書中の斎藤重千代(旧職員)「二十一世紀への生き証人」の中に「日川中学と食器かんの奪い相(合)いから喧嘩になった」とある。